

朝焼空の色

夏樹夕

空色惑星

<http://sorairowakusei.yu-nagi.com/>

○ も く じ ○

今、そこにある危機。	005
ダイブ	011
眠り姫	047
リアルマジシャン	081
青のシンデレラ	105
あなたの好きな人	115
別名・恋人の樹伝説	183
片想い	249
羽と彼女と魔術師と	269
作品紹介	316

今、そこにある危機。

目が覚めると、みように頭がすうすうした。触つてみた。細い、絡まりやすい質をしたものがそこにあるはずだった。

「——はりや？」

ペタ。ペタ——

小気味良い音が朝の静かな室内に響く。

パン。パン——

予想だにしていなかった音。

ペシ。ペシ——

(なんてやつてる場合じゃない！)

薫はあわてて飛び起き、鏡に映る自分の顔をいや、頭を凝視した。まじまじと鏡に映る頭を見て、いつもそこにあつたはずのものを探そうとした。が、そこに探していたものなど一本も見出せなかった。髪の毛と呼べるようなモノなど。

最初から何も生えてなどいなかったかのような、見事に、綺麗に、むしろ感嘆するほどのスキンヘッド。

自分つて案外頭の形いいんだ。

……………。

(何じやこりやああああああ二)

心の中で大絶叫。本当に驚いたときは声がでないもんだつてことを身をもつて知ら

7 朝焼空の色

される。

(どうしよう！)

次に浮かんだのがこれ。冷静というわけではなく、混乱してたのだ。

「と、とりあえず……」

部屋の片隅でうつすらほこりを被っていた帽子を頭に載せる。去年の春に買ったものの、数回使用しただけで放り投げていた。

「な、何とか、わからないかな？」

母さんに『のっぽさんみただ』と言われたために被らなくなったクリーム色の帽子をこれでもかと深々被る。けれど、どこか違う。横髪、後ろ髪がないのは違和感がある。

「……毛……毛——かつら！」

いぶかしげな両親を目で牽制し、朝食をかつ込み、十一時になるのをまんじりとして待つ。近所であつらを売ってるのはたぶん、大型ショッピングセンターだけ。

その開店は十一時なんてふざけた時間。ああ、まったくふざけている。緊急事態だつてのに！

十時半にはショッピングセンターに到着。今日に限って時計の針はじわりじわりとしか動きやしない。開店準備のために店内では店員さんが動き回っている。

(掃除なんていいから!)

心の中で絶叫。時計の針はやっと一分前。

(ちよつとくらい早く開けてくれてもいいのに!)

いくら毒づいても彼らは時間通りに仕事をこなす。

やっと扉が開くとともに店内を猛ダッシュ。店員さん方の注目を一身に浴びるが、そんなことにかまつてはいられない。

(かつらは確か、帽子売り場にあつたはず)

一ヶ月くらい前の記憶を頼りに、帽子売り場のある二階へ急ぐ。エスカレーターを駆け上がり、ラストスパート。

白、ベージュ、クリームが点在する帽子売り場。

(かつら、黒髪でもいいからとにかくかつら……)

見渡すが、無い。

(かつら、かつら、かつら!)

あまり大きいとはいえない帽子売り場の周りを三周もするが見あたり無い。

「かつらは?!

思わず近くで作業していた店員さんに大声で尋ねてしまう。

「へ? かつら——あ、ウィツグは現在取り扱っておりません。申し訳ありません」

薫は……何かが崩れていく音が聞こえた。

9 朝焼空の色

「——終わった」

何もかも。

自分はスキンヘッドとして、今日から生きていかなきゃならないのだ。

(呪ってやる。何もかも。全部。みんな。呪ってやる)

「あの、お客様」

こわごわ、先ほどの店員が声を掛ける。口中でぶつぶつ唱えながら、座った目で薫は店員を見る。

「ご注文なされますか？」

天の声だった。

その頃、宇宙の片隅で。

「今回の非検体、その後の追跡調査結果の報告書がまとまりました」

銀色の服を着込んだ彼は、同じ服装の司令官に報告書とともに資料を見せる。

「ふむ」

しゃちほこばった顔で報告書を受け取った司令官は、その中に書かれたある言葉に注目した。

「この『かつら』というのは何かね？」

「今回非検体から抽出した頭部保護のための肉体の一部、それに似せたものよう
です」

「ふうん」

ぱらぱらとデータをめくりつつ、司令官はちらりと横手に置かれた資料を見る。

基本色は黒。であるのに、科学的な変化を加え(サンプルを調べた結果判明)、先は黄色く、半ばは茶色く変色している。非検体が眠っている際に、頭皮、毛根ごと採取した貴重なサンプルだ。

非検体は適切な傷跡の事後処理をし、眠っているうちに元の場所に戻しておいたから何が起こったかなどわからないだろう。ただ、一度と髪が生えることはあるまいが。

「新たな発見ですよ、これは！」

若き生物学者である彼は黒い大きな瞳を輝かせる。

「地球人たちの文化では頭部は人に見せるべきではない、恥ずべきものとして認識されていくんです！」

若い彼は始めての地球遠征で、さつそく新たな論文テーマを見つけ興奮していた。

そんな彼に司令官は報告書を返しつつ、

「——とりあえず、その結論を出すには十分なサンプルデータをとってみてからにしたほうが良いだろうな」

11 朝焼空の色

「そうですね。慎重なことに越したことはありませんからね」

その後、三丁目の山田さんや、隣町の中島さんが、朝目覚めるとスキンヘッドになっていたりしたわけだが、それはまた別のお話。

ダイブ

分厚い鉄の扉一枚隔てた室内は別世界だった。

廊下から漏れてくる蛍光灯の光が救いに思えるほど室内は暗く、気味の悪い雰囲気。目の前を歩くミトは慣れた様子で、ずんずん進んでいく。シンはミトの後ろを歩きつつ、興味深く周囲を見渡す。

回廊の左右に並べられた、筒状の『プール』と呼ばれている透明なカプセル。二メートルくらいの高さ。直径は一メートル半くらいあるだろうか。

その上部に取り付けられたライトからは、柔らかな緑色の光。これが室内の光源。カプセル内には水のような液体と、それに漂うように浮かんでいる人間。電子音と水音が、奇妙な調和を持ちながら、静かな室内に一定のリズムを刻んでいる。

「まるで、アクアリウムみたいじゃない？」

くるりと振り向き、ミトは楽しげな笑みを浮かべる。

「一匹づつ、小さな水槽に閉じ込められた熱帯魚……そんな感じしない？」

「……闘魚のことか？」

いつもながら無愛想にシンは答える。

「トウギョ？」

「オスは綺麗だが喧嘩早いから、一匹づつ小さな瓶の中に閉じ込めて飼うらしい」

「ふーん、こんな感じ？」

「さあ、実物を見たことないから……」

15 朝焼空の色

様々な色のスウェットスーツ。頭部に取り付けられた幾本ものチューブやコード。皆、軽く体を曲げ、中には足を抱え込むように水の中に浮いている。遠くから見れば、熱帯魚を閉じ込めているように見えるかもしれない。だが、目の前でそんな感想を漏らすミトの感覚はどこかずれている。

更衣室で、シンは自前のダイブ用スウェットスーツに着替える。中古で買ったものだが、去年流行していた柄なのでそれほど古いものではない。深緑の地に鮮やかな黄緑色の線が龍のように描かれている。

「あ、懐かしい。私も一着持ってたよ。黄色のヤツ」

澄んだ青色に和風な金魚が墨絵的に描かれたデザインのスウェットスーツをミトは着ていた。

「これ、可愛いでしょ？ こないだ買ったんだ」

ファッションショーのように格好をつけてくるりと回転。

ミトはガイドで稼いだ金を全てスウェットスーツにつき込んでいるらしい。他のヤツにガイドを頼めばよかったとシンはいまさら考える。

「あ、後悔してる？ 後悔は『後』で『悔やむ』って書くから、正解だわ」
手を叩き、嬉しそう。

「——三一号機に入って」

奥にある何も入っていないプールを指差す。

近くによつてまじまじと見やるが、シンはどこから入ればいいのかわからない。

「……どうやって？」

ミトは隣に並んだ三二号機の操作パネルから顔を上げ、

「……シン、本気で初心者だったんだ。珍しい」

軽く口笛。

頼む時にそう言ったはずだがと、シンは言いかけてやめる。口論でミトに勝てると思えない。

「このボタン押したら扉が開くわ。中から出る時も一緒。あと、何か緊急事態のときもね」

カプセルの手前に大きな丸いボタン。つぎはぎだらけの機械なので、目に付きにくい。手のひらで押すと、カプセルの扉がゆっくり、左から右へと開いた。

「さつさと入って。入ったらこれとこれとこれと、そつちの線をこつちにつないで、あれはこつち。それはあつち。で、アレをこつちにこうやって……」

「何を言ってるかわからない」

「もう、覚えがわるいんだから！」

ミトが専門的過ぎるだけだ。素人にもわかるように説明してほしい。

思いはするが、口には出さない。シンがふてくされていることなどミトにはお見通しの様子で、

「今回は全部やってあげるから、次回は自分で全部接続できるようにダイブ関連の参考書最低十冊は頭の中に叩き込んだきなさい。じゃないと、正規料金取るから」
友達だからと、かなりの安価な料金でガイドを引き受けてもらっている以上シンは文句を言えない。

ミトの手によってあつという間にコード類の設置が終わる。首筋や頭部に取り付けられたコードは体温や脈拍数のデータを採取するためのものらしい。コード類は上から垂れ下がっているためあまり重さを感じない。

「扉閉めるわよ。注水するから、マスクかぶって」

イヤホンを通してミトの声が耳に響く。本人はガラスの向こうで、軽く手を振り、「ダイブした先では私が一番先に声をかけてあげるから……」

シンと同じダイブ先になるよう、三一・三二号機を連結するための設定をしている。水かさは徐々に増し、シンは腰の辺りまですでに浸かっている。他のカプセル同様、頭の上まで水は来るはずだ。

「大丈夫よ、落ち着いて」

心拍数などのデータを見たのだろう。ミトがシンに声をかける。

狭い場所に閉じ込められ、水が流れ込んでくるといふ感覚は誰しも多少の混乱を伴う。

「浅い眠りにつくのと一緒よ。違いがあるとすればそれがとてもリアルな夢だって事」

チューブから注ぎ込まれる酸素に、睡眠系のガスでも混ぜてあるのだろう。徐々にシンの意識は薄れていった。

頭の痛みに、手をやりつつ目をあける。

「……………こは？」

肺へ吸い込む空気は暑く、季節は夏のようだとシンは認識する。澄み渡った青空、覗きこむ水着姿の人々。自分はどうかやら上向きに寝ているらしい。

「大丈夫か？」

シンに声を掛けたのは左手から覗き込んでいる青年だった。

「ミトか？」

シンの問いかけに、

「何言ってるんだ？ おまえ、倒れたときに頭打ったか？」

怪訝な顔。

「混乱してんじゃない？ 休んでれば良くなるよ——」

右手から覗き込んでいる若い女の同情的な声。

「立てる？ マサキ」

声を掛けられたものの、シンはそれが自分の名前だとはわからなかった。

「大丈夫？ マサキ」

女がもう一度声を掛けたので、シンはそれが自分の名前だと気づき、立ち上がる。

19 朝焼空の色

ふらり、立ちくらむが、歩けないことは無い。

「あつちで休んで、冷たいもの買ってくるから」

女は日陰になっているベンチを指差し、白いパーカーを羽織り、どこかへ駆けてゆく。

「……どこだ、ハイ」

誰にとも無く、シンは呟く。

蝉の熱気をあげるような鳴声。プールの中で、色とりどりの薄い布を身につけ、水と戯れる人々。涼やかな水の音と、にぎやかな声。

ゆつくりと見回すが、ミトラしき人間は見当たらない。

「はい、」

先ほどの女が冷たい缶をシンに差し出す。

「……？」

戸惑っていると、女はプルタブを開け、再び差し出すのでシンはしぶしぶ受け取る。

「美味しいよ、シン」

隣に座り込んだ女の横顔を見る。黒い髪は肩ほどの長さのストレート。

「ミトか？」

「当たたり〜。でも、ここではカナ、君はマサキね」

カナと名乗ったミトは自分用の缶を開け、飲み始める。

「美味しい〜」

嬉しそうに空を仰ぎ見る。シンもミト——カナの目線の先を見つめる。

夏特有の高く澄んだ青空。白い雲が山の端に大きくせり上がっている。積乱雲によつて形成される、夏特有の入道雲つてやつだろう。

カナが何も言わないことに業を煮やし、シンは口を開く。

「これはなんだ？」

「この時代、アルミ缶なんかに飲み物入れて売ってるの」

飲め、とばかり突き返される。促すような視線。仕方なく、ごくり、飲み下す。

「……変な味」

「飲み慣れないからよ」

「それより、説明してくれ」

カナに向き直る。

「いつもダイブするときは男の体だつて言つてたよな？」

「だいがんばつてみたんだけどね……」

カナがプールに目をやる。シンも同じように目をやると、そこに先ほどシンがミトと間違えた男の姿。

「最初は彼の身体にダイブしようとしたの。でも波長があわないらしくつてさ、一番身近で波長の合うこの身体にダイブすることにしたの」

と、自分を指差す。どこにでもいそうな感じの少女。

21 朝焼空の色

「あと、ごめんね、シン」

「……何が？」

「タイムラグちよつと大きかったなあつて思つて」

考えてみれば、シンが気づいたときにはミトがカナであることに違和感が無かった。周囲も気づいている様子もなく……ダイブに慣れているとはいえ、確かに少し変かもしれない。

「シン、ダイブ初めてでしょ？ 不信に思われぬように似たような性格の個体を選んでたらちよつと時間かかっちゃつて」

「別にいいよ」

シンは溜息を漏らし、

「で、ここはどこだ？」

言つて、あわてて付け足す。

「——プールだつて事はわかるが」

カナはにんまりとした笑みを貼り付け、

『プール』からプールへなんて面白くない？」

シンはげんなりと首を振る。

「でも屋外プールを見るのは初めてでしょ？ これはシンの希望通りだと思ふけど？」

シンはプールを見たまま頷く。

「夕方までここに居ることになると思う」

言つて立ち上がる。

太陽は傾いてはいるが、まだ当分沈みそうに無い。

「私はまた泳ぎに行くけど……マサキはここでゆつくりしてた方がいわね。その身体、慣れてないでしょ？」

答え代わりに片手を上げる。何もしていないのに、なんだかひどく疲れきっていた。

カナはパーカーを脱ぎ、プールへ向かう。プールには一メートルと、三メートルの二段階の高さのある飛び込み台が設置されており、

「マサキ〜！」

高い方の飛び込み台からカナが手を振る。シンが気づいたことがわかったのか、カナは台の上から大きくジャンプ。跳ね上がる水しぶき。周囲の歓声。水底へと沈んだ身体は、間もなく水面へ顔を出す。満面の笑顔。

カナはプールから上がると、再び飛び込み台へと足を向ける。

何が楽しいというのだろう。

シンの不信そうな顔に、カナは不敵な笑みを返し、飛び込み台のはしごへと脚をかける。

興味を失ったシンはごろり、横になる。気温は高いのだが、木陰にいるシンにはそれがちょうど気持ち良いくらい。穏やかな風は揺り籠のようで、プールサイドの歓声

や水の音もいつしか子守唄になり、シンは深い眠りの底へと引き込まれる。どこか遠くのほうから、静かな水音が、眠りに落ちるその瞬間まで耳の奥で響いていた。

「お疲れ様〜」

耳に飛び込んできた大声に、びっくりとシンは身体をこわばらせ、重い瞼を開いた。そこにはにやついたミトの顔。

「初めてのダイブはどう？ 楽しかった？」

「……いや、あれが？」

プールで目が覚め、ミトと会話した後は体調不良で眠っていただけだ。

「初心者は最初のうちは一日三時間以内って規則があるのよ」

「へえ」

ミトもきちんとガイドをやってくれているみたいだ。

「ほら、そこら辺にボタン無い？ プールに入るときに押したのと同じボタン」

言われ、見回す。確かに同じ場所に同じようなボタンがあった。

「これ、押せばいいの？」

「押すってより、押して回して？」

ジエスチャーする。

言われたとおりすると、徐々にシンを取り巻いていた水が抜けていく。頭に取り付

けられたコード類が少々重く感じる。
水が抜け切ると自動的に扉が開く。

「ほら、動かない」

カプセルを出ようとしたシンを押し止め、ミトは手際よく取り付けられていたコード類をはがしていく。

「よしと」

やつとカプセルから出るが、体は重い。

「大丈夫？ シン」

苦笑いするミト。

向こうでも同じように声を掛けられたことを思い出し、シンも苦笑する。

「これ片付けるから先に着替えて」

ミトは慣れた様子でコード類の片付けや、カプセルの点検を済ませてゆく。ダイブのため、体力づくりしているだけのことはある。

更衣室に向かうが、身体は重く、思うように動かない。ようよう着替え終わり、更衣室を出てみるとそこには着替え終わったミトが、携帯端末を睨み付けていた。

「……ごめん」

「あ、別にいいよ」

端末から顔を上げ、微笑む。集中していて気づかなかったらしい。いつもながらにミ

トには迷惑ばかりかけている。

「次のダイブなんだけど——」

ミトが携帯端末を大画面に切り替える。ミトとシンの間にホログラムのように浮かぶ複数の画面。前後から同じように画面が見られるこのモデルは三ヶ月ほど前に売りに出されたもの。ガイドのバイトは相当稼ぎがいいらしい。

「ほら、これが今日のシンの体調データ」

ミトが一枚の画面を指差す。

そこには脈拍数、血圧、体温などが折れ線グラフで記されている。

「特に問題はなかったみたい。ま、大半寝てればこんなもんだろうけど」

嫌味だろうか。

「ちよつと不安なのは体力不足ね。三時間以上のダイブは要注意が必要ってところ」
それほど体力が無いほうだっただろうか。

「そんな不満そうな顔はしないの。水の中に三時間ずっといるって考えてるより体力消耗することなんだから」

「……そういえば、昔、拷問の方法でそんなのがあったらしい」

「ふうん、シン、変なことよく知ってるよね」

百科事典を読むのが趣味だとは言えない。

「でね、次のダイブなんだけど——」

ミトとダイブの約束をし、別れた。送っていかうか、という言葉を断り、シンは家にとどり着く。思っていたより疲れていたのか、仮眠しようかと倒れこんだベッドで目覚めたのは翌朝だった。

朝から雨が降っていた。テレビをつければ、いまだに不確かな天気予報を流している。科学が発達してみても、完全な天気予測は不可能らしい。

トーストにコーヒー、ベーコンエッグにサラダといつもと代わり映えのしない朝食をとっていると、電話が鳴った。電話の上にはホログラムが映され、満面笑顔のミトの顔写真。

この間来たときにでも、勝手に電話の登録情報を変えたのだろう。シンは初期設定のまま、シンプルに『ミト』という文字がホログラムに浮かぶようにしていたはずなのに。

文字と写真ではその居心地の悪さはぜんぜん違う。無視しようと黙々パンを齧っていたシンだったが、コール音に合わせて点滅するミトの写真に嫌気が差し、電話に出ることにした。

「もしもし、」

「お、やっぱり顔写真に変えたのは正解だったみたいね」

「……勝手に人のうちの電話の設定を変えるなよ」

「そんな事言つて、戻すの面倒くさいからそのまま使おうんでしょ？」

よまれている。

「ま、私の電話には即刻でないシンが悪いんだけどね
自分勝手すぎる。」

「——体調どう？」

「……別に、普通」

「十二時間くらい寝てましたって顔してるけど？」

「……………お前、僕の方の電話、映像モードにしてるのか？」

通話中、ホログラムに表示させる画像には映像モード、画像モード、文字モードと三種類有り、初期設定では文字モード——通話相手の名前がそこに表示されている状態になっている。画像モードにすれば、好きな写真や、絵などを表示でき、映像モードにすれば相手の顔を見ながら対話できる。

ミトは勝手にシンの電話を映像モードに切り替え、尚且つ、自分の方は画像モードにしているようだ。

「そう嫌そうな顔しない」

完全に見えているらしい。説明書はどこにしまいこんだか。

「——ダイブのことなんだけど、」

食事をいったん中止し、ミトの顔写真に向き直る。

「キャンセル入ったから、今日でも良い？」

「別にいつでも……」

「そう、なら昨日と同じところで同じ時間に待つてるから」

電話が切れた。昨日と同じ時間ということは、後三十分ほどで家から出なければ間に合わない。急いで出かける準備をした。

夕日に染まる川面。赤く燃えるような水の色。

「綺麗でしょ？」

「ああ」

話かけてきたカナにシンは素直に答える。

赤い鉄橋に、同じ色をした川、黒い町並みが見事な一枚絵。

「ここはどこだ？」

昨日はプールだった。今いるのは川原の土手。カナは紺地に朝顔柄の浴衣姿。自分は灰色地の甚平。

「花火大会に向かうところ」

不思議そうな顔をするシンに、

「昨日の続きからダイブできればよかつたんだけど、ちょっとずれたみたい」

けれど、ずれたためにこのようにすばらしい景色が見ることができたのならば、それはそれでよかつたのかもしれない。

「制限時間は三時間なのか？」

「そうよ。それより体調はどう？ 一回目だからそれほどでもないと思うけど？」

確かに、前回のような頭の痛みも無ければ、だるさも無い。

「大丈夫そうだ」

「そう。無理をしないことに越したことは無いんだけど——」

言葉を濁らせる。

「何だ？」

心配して声を掛けたシンに、にかつとカナは笑みを返し、

「シンがダイブしているのは伊藤正樹。私は佐々木可奈って子。私はシンのことマサキって呼ぶから、シンは私のことカナって呼んで」

「ああ」

「質問は無い？」

「ああ」

「マサキは無口だよね」

「あ——いや、そんなことは……」

誘導尋問に引つかかってしまった。カナは可笑しそうに笑い、

「似たような性格の個体を選んでるからいつも通り行動してれば特におかしいなんて言われないはずよ」

「……そう」

「マサキ、水の音は聞こえる？」

突然そんなことを言い、立ち止まる。マサキも同じように立ち止まり、首を傾げる。聞こえてくるのは川を流れる水の音。

マサキの視線の先を見たカナは苦笑し、

「そうじゃないの。『プール』につかてるシンの肉体が聞いている音。電子音とか、水音とか……静かな室内に木霊してたでしょ？ 気づかなかった？」

「いや、わかったけど……」

「ダイブ初心者だからかなり深いところまで潜り込んじゃってるみたいね。もうちよつと引いてみて。そしたらマサキの記憶とか、感情とか……シンが必要としている情報が入る」

「引く？」

「うーん、何ていったらいいのかな……？」

カナは弱りきった顔。

空は夕暮れから夕闇へと変わりつつある。

「ダイブ初心者は大抵そうなんだけど——」

右手を握り締め、顔の前に持つていく。

「シンは今、こういう状態ね。でも、こうすれば他の情報も見える——」
手を伸ばす。握り締めた拳の向こうに、川土手の景色。空には梳いたような雲に

反射した赤い光。

「なかなか出来ない人もいるけど、コツさえつかめば簡単よ。そうすれば、ガイドが無くてでもダイブできるようになるわ」

言われたところで、ピンとこない。

「そんな困った顔しなくても大丈夫。初心者なんだから」

カナは再び笑い、歩き出す。遅れて歩き出すマサキ。

(引く……深いところまで潜り込んで……?)

何度もカナの言った言葉を脳内で繰り返し返してみるが、理解できない。

駅から電車に乗り込み、数駅先で下車。

「……何か臭う」

「海の匂いよ、花火大会つてのはたいてい海辺で行われるのよ」

駅構内は人でいっぱいだった。

「おい、二人とも！」

前方を歩く若者の群れの中から声を上げる青年。ミトと間違えた青年だ。

「さつさと来いよ、迷子になるぞ」

どつと笑い声を上げる集団。そういえば土手を歩いてきたときから、彼らは前方に

居た。

「カナの兄は心配性ね」

疲れたとばかり小さく漏らし、

「いい年して迷子になんてならないわよ！」

カナは怒鳴り返す。扇子代わりになっていたパンフレットを広げ、

「集合場所はここだから、はぐれても大丈夫よ」

パンフレットに書かれた地図の一点を指差す。パンフレットには煽り文句と共に、数枚の花火の写真。きつと去年のものなのだろう。夜空に咲いた、大輪の花。

「ダイブするのはやっぱり夏に限るわ」

路上は人が増え、歩くのもままならなくなってくる。

「すごい人だな。これ、みんな花火を見るために集まってるのか？」

「そうよ。一瞬の芸術。儂いからこそ美しい」

歌うように言い、露店へと視線を走らせる。

「あれ、」

指差す先には、りんご飴の幕。

「食べない？」

「何？」

「ふふふ、私、好物なの」

食物とは思えないどぎつい色で身を固めたリンゴ。小さなもの、中くらいのもの、大きなものと大きさはさまざまあるが、赤、緑、青色と色は酷い。

カナは中くらの赤いリング飴を二つ買い、一つをマサキに渡す。

「ま、何事も経験よ」

言われ、一口舐めてみる。ひたすら甘かった。

「シン！」

いきなりの大声に、びくりとシンは瞼を開けた。

ガラスの向こうにミトの顔。

「何？」

「体調不良のため、中止」

怒ったような口調。

「……え？」

「思ってた以上に体力無いみたいね」

ガラス越しにホログラムを見せられる。体調データという項目には注意という文字が大きく点滅している。

「まったく、これから火花だつてところだったのに！」

怒っている原因はそれらしい。

「さっさと出て」

前日同様、ミトはコード類を手早くはずす。

「シン、まともには「飯食べてる？」」

「食べてるよ」

「朝のアレ、アレは食事つて言わないのよ」

トースト、ベーコンエッグ、コーヒー、サラダ。普通だと思っただが、

「内容じゃなくて、量の問題。普通、猫の餌かと思うわよ」

朝はそれほど食べないものだろうに。

反論したい雰囲気の中に、

「昼食、おごつてあげるから付き合いなさい」

「……ああ」

うなづいたのが運のつきだった。

連れて行かれたのは焼肉屋。昼食時から少しずれた時間帯だったので、店は空いていた。案内されることも無く、店の奥の席を陣取り、慌てて水とおしぼりを運んできた店員に、

「焼肉定食二人前」

勝手にミトは注文する。

「あのさ、昼に焼肉は胃にもたれるんだけど」

「何言ってるのよ、シン。肉を食べれば体力は自然ついてくるのよ」

店の中は焼けた肉の香ばしい匂いに溢れている。店の中央にはなぜか大型の水槽が置かれ、熱帯魚の群れが優雅に泳いでいる。

「ギヤラクシーグラスグツピー、プラティレツドムーン、ゴールデンハニーグラミー、コリ
ドラス・ジュリイ、オトシンクルス——」

すらすらとミトの口から漏れる呪文。

「何？」

「あの水槽で泳いでる熱帯魚の名前」

魚が好きなことは知っていたが、

「見ただけでわかるのか？」

「まさか、」

と、笑みを漏らす。

「水槽の端に熱帯魚の写真と名前が書いてあるのよ」

店の中は水槽から聞こえる水音と、有線の音楽が響いている。最近の曲もあれば、
十年ほど前の曲、もつと昔の曲と、そのバリエーションはとりとめも無い。

熱帯魚に目を奪われているうちに時間が経過していたらしく、注文していた品が
運ばれてくる。

目の前の料理の量を見て、シンは眩暈を起こしそうだった。

「これ、食べるのか？」

「当たり前でしょ、体力つけて、花火見るのよ」

「……まさか、食事済んだらまたダイブするのか？」

「そうよ、文句あるの？」

ミトは嬉々とした表情で、熱せられた鉄板に肉と野菜を並べてゆく。

「さつきは一時間くらいしかダイブしてなかったから、今日はもう二時間くらい時間があるのよ」

初心者は一、二時間以内。だが、気分が悪くなった時点で、他の日に変更するんじゃないだろうか。普通は。

「言いたいことあるなら言ってみなさい。ただし、言ったらガイド降りるから」脅迫めいたミトの言葉に、シンはしぶしぶご飯に手を伸ばす。

「肉を食べなさい。肉を食べれば体力増幅するんだから」
何を根拠にそんなことを言うのかわからない。普段からあまり肉を食べないシンは観念した様子で焼肉に手を伸ばした。

「あー食べた、食べた」

わき腹をさすりつつ、爪楊枝を口にくわえ席を立つミト。結局焼肉のほとんどはミトの胃袋へ消えていたが、シン自身いつも以上に食べているので文句など無い。

「……みつともない」

あまりに親父くさい仕草を指摘すると、

「悪うございました」

照れた様子で姿勢を正し、会計を済ませる。

「紳士的にさ、ここでお金払ってくれば格好良かったのに」

「ミトが奢るって言ってただろ？」

バイトの稼ぎはそれほど多くない。

ミトもそれ以上追求しようとはせず、場を取り繕うように、

「じゃあ、腹ごなしにゲームセンター……いや、映画でも見ましようか」

先陣を切って歩き出す。ゲームセンターは、以前ミトと一緒に行った時、シンのあまりの下手さ加減にミトが切れ、二度と行かないと言い渡していたことを思い出したのだらう。

映画鑑賞は最近出来たミトの趣味の一つだったはずだ。考えてみれば、ミトは意外と多趣味かもしれない。

妙な敗北感に襲われつつ、シンはミトの後をついてゆく。歩いて十五分ほどの場所に懐かしいたたずまいの映画館。懐古趣味の人々のために残されたこの町唯一の映画館だ。

「ジャストタイミングではじまる映画があるみたいね」

ミトに促されるまま、自動清算機で金を払い入場する。

館内は暗く、静まり返っている。スクリーンに映し出されているのは古きモノクロ映画。後方に席を取り、スクリーンを見やる。

ホログラムや立体映像では表現できない情感。閉鎖されたこの薄暗い闇の中で、一

時だけ他人と時間を共有するその贅沢さ。ミトがはまる理由がわかったかもしれない。

二時間ほどして映画は終わった。ローマへやってきた王女が新聞記者と恋に落ちるという有名な映画だったが、シンは初めて見るものだった。

「いい映画だな」

右隣に座るミトに顔を向けると、顔をぐしゃぐしゃにしている。

「……泣いてるのか？」

始めてみる光景に、しどろもどろ声を掛ける。

「うるさい。紳士ならここでハンカチくらい差し出さない」

映画が終り帰ってゆく観客が、もの珍しそうに二人を見る。シンは慌てて、街頭でもらったポケットティッシュを差し出す。

「あー、駄目だ。感動するとさ、涙が止まんないのよね」

ティッシュを全て使って顔をぬぐう。

「涙腺壊れてるんじゃないかと思って診察してもらったんだけど、どこもおかしくないんだって」

すつくと、立ち上がる。

「腹ごなしも終わったところで、ダイブしましょうか」

いつものミトがそこに居た。

39 朝焼空の色

寄せては返す水の音。濃い、潮の香り。

ゆつくりと目を開ければ、見渡す限りの海。

「マサキ、大丈夫？」

覗きこんでいるのはカナ。

「ああ」

「……ダイブしてみても吃驚ね」

にんまりした笑み。周囲には数人の人影。

「今日が満ち潮かどうかくらい調べとけよ」

野次を飛ばす男の声。

「仕方無いだろ、浸かるだなんて思わなかったんだよ」

カナの兄の声。

「ここは？」

「あまり時間は経過して無いみたい。ここは花火の良く見える場所って兄が言った場所。集合場所からそれほど離れて無いみたいけど……まさか海の中だとは思わなかったわね」

背後には小さな島の崖。人間一人がやっと通れるような険しい道がついている。平らになっているあたりには、松などの木々。花火が見たければ、ここで浸かっているならならぬらしい。

遠く見える浜辺には溢れかえった人の山。あそこにいるよりはましかとマサキは息をつく。

まだ、開催時刻にならないのだろう。空には月が一つ、明るく輝いている。

「花火は闇夜じゃなくてもいいのか？」

「は？」

「月が明るいだろ？」

「……見ればわかるわよ」

肩を震わし、可笑しそうにカナは言う。

打ち上げ花火開始を知らせるアナウンス。

闇夜を切り裂くような、甲高い音。一瞬途切れ、地響きを伴う爆発音。小規模な破裂音と共に夜空へ咲いた大輪の花。

後を追うように、光の柱が空へと駆け上り、花を咲かせる。一つ、二つ、三つ……。やがて数えるのも忘れ、ただ、そのスケールを感じる。

「すごい」

漏れた感嘆の声は波にかき消され、あつという間に第一幕の十五分が終わる。

横を見れば、涙を流しているカナの姿。浴衣の袂で涙をぬぐっている。マサキの視線に気づくと、恥ずかしそうに微笑み、

「どう、感動的でしょう？」

にんまりした笑みを見せる。

無理やりダイブさせられたのではあるが、これを見れたのであれば感謝しなければならぬだろう。

「ああ——」

有難うと言いかけたところで、世界が反転する。

まぶたを開ければ、カプセルの中。ダイブから強制的に戻されたらしい。

不審に思いつつボタンを押す。適当にコード類を取り、カプセルから外へ出る。隣のカプセルに入っているはずのミトの姿は無い。

「ミト？」

更衣室の奥から水の音。蛇口を思い切りひねり、そのまま出しっぱなしにしているような水流音。

「ミト」

周囲に誰もいないことを確認し、半開きの扉の奥へ呼びかけると、低いうなり声。

「大丈夫？」

「ごめん、ちよっと食べ過ぎたみたい」

調子の悪そうな声。

覗きに行きたいが、更衣室の中まで押しかけるわけにも行かないだろう。扉の前でミトが出てくるのを待つ。

少し青ざめた顔をしてミトは出てきた。しかも、着替えている。

「シン、まだダイブする気？」

いつもながらに自分勝手。

「いや、」

「だったら着替えて、ほら、景気直しにゲームセンターでも行こう」

「いや、ゲームセンターは——」

「いいから着替えなさいってば」

促されるまま、更衣室へ入る。

服を着替えて出てきたときには、ミトの顔色はずいぶん良くなっており、機嫌も良くなっているようだった。

「どう、ダイブは？」

ゲームセンターへ歩きながら、ミトは不意に尋ねる。

問われたところで、ダイブしていた時間は実質的に三時間にも満たない。沈む夕焼けを見て、海で花火を見た。ただそれだけ。

「悪くは無いですよ？」

「確かに」

「もう少しすればもっと楽しくなるよ」

ガイドとして、ダイブ先をいろいろ検討してくれているらしい。ミトは花見、紅葉狩

43 朝焼空の色

り、クリスマスに……と、楽しみに行事を指折り数える。

「止めとく」

「は？」

立ち止まり、まじまじとシンの顔を見る。シンはまつすぐミトを見つめ、

「ダイブはリアルな夢だつて——儂いからこそ美しい、そう言った」

シンの言葉にミトはうなづく。

「五感で感じる全てが幻、頭ではわかつていても、全てがあまりにリアルすぎて、切なくなる」

青空。まぶしい太陽。蝉の鳴声。入道雲。夕焼け。鉄橋。星空。黒い海。花火。青々とした木々。

数十年前には失われてしまった自然。スクリーンに映し出される光の粒子ではなく、写真に残されたインクの固まりでもない。ダイブすれば、それらは実際に体感できる。

けれど、それはリアルな夢に過ぎない。

「——虚しいんだ」

シンは暗い笑みを浮かべる。

「……そっか、そだね」

ミトはつられて同じように笑う。

「なんかさ、シンには私と同じものを見せてるはずなのに、いつも違うものを見るよね」

シンは首を傾げる。

「シンは私の知らないことをいつばい知ってて、いろんなことを考えてる。私はさ、シンに言われるまで気づかないで……馬鹿みたい」

ミトはいつも自分の知らない世界を知り、いつでも置いていかれた気になっているのはシンのほうだ。

「シン、私のこと嫌いなら、嫌いだってはっきり言ってよ。今まで引っぱりまわしてゴメンね」

駆けて行こうとするミトの腕をつかむ。だが、体力の差、力の差。シンが数メートル引きずられたところで、やっとミトが止まる。

「手、離して」

口調はキツイ。

「あのさ、また自分勝手に暴走してるだろ？」

シンは逃すまいと、強く腕を握り締める。

「私のこと嫌いなんでしょ？」

「嫌いじゃないよ、別に」

この状況下だというのに、シンは落ち着いている。慌てるとか、取り乱すということ

がほとんど無い人間だ。

「……婚約、解消しよ」

心にも無い言葉がミトの口から漏れる。いつシンに言われるかと、ひやひやしていた言葉。

結婚年齢が高齢化し、出生率が〇・五を下回った頃、国による大規模な許婚計画が行われた。人権やプライバシーなど問題は多かったが、それよりも低迷する出生率の低下を防ぐほうが先決だったらしい。

ミトとシンは物心ついた頃には許婚関係だった。将来は互いに結婚するものだと思われ、常に一緒に行動させられていた。

「忘れてた」

シンが呟く。

「忘れてたって何よ!」

婚約を解消すれば多額の罰則金を支払わなければならない。けれど、押し付けられた格好の婚約はやはり反発も多く、婚約解消は近年の流行にもなっている。

「……ええつと、違うんだ。忘れてたのは別の事で——」

しどろもどろにシンは言う。

「あの、南アフリカで自然回復プロジェクトが進められているんだけど、それに誘われて……行ったら、十年くらいは帰ってこられないんだ」

十年後といえは、お互いに三十歳を越える。二十五歳までには結婚し、結婚後三年以内には是非第一子を……と言われているのに。シンが何を考えているのかわからない。

「あかさ、南アフリカはいいとこだよ」

「そう」

「映画館もさ、いくつもあるらしいよ」

「へえ」

「ゲームセンターだって結構大きなのがあって」

「ふーん」

「食べ物も美味しいって」

「……」

「水族館の大きなものもあるよ、あと、それに——」

シンはミトが興味を持ちそうなことを次々あげてゆく。

じつとシンの話を聞いていたミトは、もしかして、とやつとシンの言いたいことに気づく。昔から重要なことほど婉曲した言い回しをする男だ。そして、友人にも言われることだが、自分はそれに気づかないタイプらしい。だが、わかってしまえばこっちのもの。そして、その予測は外れたことが無い。

ミトは溢れる笑みを押し殺し、なるべく先ほどまでと変わらない様子でシンに尋ね

る。

「なんで急にダイブしなくなったの？」

ミトの誘いを今までことごとく断っていたくせに、今回は自分からダイブのガイドを頼んできた。

「ミトがはまってるって言うから……」

「焼肉屋や、映画館について来たのは？」

いつもならば目を放した隙に帰ってしまうような男だ。

シンは押し黙り、睨み付けるような瞳でミトを見る。自分の感情を表現するボキヤブラリーは極端に低い。

「何で手、握ってるの」

「……ごめん、あのさ、」

いつもながらにシンが申し訳なさそうな声を上げ、手を離そうとする。ミトはシンの腕をつかみ、

「そうじゃなくて、他に言う言葉があるでしょ？」

シンは火が噴出しそうなほど真っ赤な顔で、黙り込み、小さな声で呟いた。長年シンの許婚をしていたミトでなければ聞き取れないような言葉。

ミトは満面の笑みを浮かべ、シンの胸元に飛び込んだ。

眠り姫

「空、青いね」

話すこともなくなった良子は、うつらうつらし始めた真紀に声をかける。街を一望できる展望台。たまたま休みのかち合った二人は、ウインドウショッピングの休憩にとのぼり、そこからの風景を眺めていた。

日差しは暖かいが、まだ三月。吹き付ける風は肌寒い。

目に映るのはどこまでも続く砂漠。コンクリートビル郡の壁と、太陽パネルが設置された屋根の群れ。

「……何？」

真紀はだるそうに、ようよう眼を開ける。良子は不安げな顔で真紀の様子を伺い、「お願いだから、私の前で寝ないでよ。真紀まで……」

ほろり、大粒の涙が頬を伝い落ちる。

「……大丈夫、だよ……」

真紀はうつすらとほほ笑む。だが、言葉とは裏腹に眠りたくて仕方がない。

漠然とした不安と、このまま眠りたいという欲求。安らかで、柔らかな……。

「だから、寝ないで！」

怒る良子も珍しい。一瞬、真紀の眼が冷める。けれどそれも数秒ともたない。

「ごめん、良子——」

搾り出すように声をあげ、真紀は落ち込むように眠り始めた。

眠りは突然妨げられた。

うつすらと開いた隙間。空気はなだれ込むように入り込み、冷凍された空間は時間を取り戻す。

「ぐあ……げほ——」

冷凍睡眠されていた肉体は、急激な変化にも眠る前と同じように生命活動を再開させる。肺へと送り込まれる空気の質はあきらかに異なる。雪解けのように、ゆつくりと巡りはじめる血液。

数日間、彼女は身動きもとれず、小さなカプセルの中でただ独り、地獄を味わう。だが、やがて食欲な生命力は、新たな世界へも適応し始める。

瀕死の状態ながらも、彼女はカプセルを抜け出す。

「いっ、どいっ？」

声にならない言葉。

無機質な部屋、ほの暗い室内。幽かなモーター音。がらんとした十畳ほどの部屋。四方は金属質の壁に囲まれているが、彼女が先ほどまで寝ていたカプセルが接していた壁には太い樹の根。数個のカプセルがその根に取り囲まれている。

自分は運良く助かったと言う事なんだろうか？

ほっとすれば、吐き気をもよおすほどの空腹感。

「……食へ物……」

金属質の壁の中、彼女の真向かいの壁に非常口灯が緑色に光っていた。外開きのドアを押し開ける。吸いなれた空気が満たされた廊下。順路を示すよう、壁、天井、床には一定間隔に矢印マーク。

とりあえずそれにしがたい歩を進めると、数ヶ国語で『食堂』と表示された部屋に突き当たる。整然と並べられた椅子と机。机の中央部にははめ込み式の画面があり、『お早うございます。この画面に触れてください』という文字が流れている。

支持通り、おそろおそろ画面に触れる。数分後、鼻腔をくすぐるいい香りが漂い、画面がスライドし、淡いピンク色のトレーに乗せられた人肌の重湯が目前にせり上がってくる。

飲むように胃へと注ぎ込む。何度かむせ返るが、数日間の地獄に比べればまだ。食へ終ると元の位置へ食器を返す。

胃に入れたことで、体温がずいぶん上昇してきている。それまであまり注目していなかった辺りへ視線を移す。

数ヶ国語で食堂の利用方法が書かれた、パネルが目にも留まる。入ってすぐの場所にあったのだが、目に留まらなかったのだ。重い身体を鞭打ち、近寄ってそれに目を通す。イラストつきで食堂の使い方が説明されてある。

再び席につき、メニュー画面を呼び出し、お粥、コーンポタージュ、日本茶を選択す

る。思ったとおりのものが画面の下から現れる。

「……私が眠った後に作られたのね、ここ」

寝起きは昔から良いほうだ。寝ぼけたことなんてほとんど無い。

久々の好物に舌鼓を打ちつつ、胃へと流し込む。固形物を食べたいが、胃が受け付けないだろう。先ほどよりも時間をかけて、ゆっくりと飲み下す。

今はいつ頃だろう。ここは、たぶん東部地区冷凍睡眠者収容施設だろう。眠る前、自分もソフト面でかかわっていたのだ。あの時はまだ、着工を始めて数ヶ月ほどだったが、完全に出来上がっているところを見ると、軽く二・三十年は経過していると見たほうがいいだろう。

それよりも自分はなぜ目覚めたのだ？ こうやって食事をしてはいるものの誰の姿も無い。無理やり冷凍睡眠からたたき起こされたのだとすれば、自分はなぜ、こうやって生きていられるのだ？

「そっか、」

と、左腕を彼女は見る。注射痕をふさぐように当てられたガーゼ。

何らかの事故などにより、冷凍催眠からいきなり目覚めた場合の予防処置として、眠る直前、実験段階の薬を注射されたことを思い出す。

「被験者に応募して良かったあ」

しみじみ思う。予測されていた事故が起こったわけなのだから。だが、樹によって施

設が壊されるだなんて、誰も予想だにできなかった事態だ。

「それにしても、」

と、不信な声を上げる。

樹が施設を侵食していることに気づかないなんてこと、あるだろうか。また、冷凍睡眠者が目覚めたことに気づかないなんてこと、ありえるだろうか。いつ医者や研究者が現れるのかと思っていたが、どうもそれは起こりそうに無い。

「もしかして、見捨てられちゃってる？」

乾いた笑い声は虚しく響く。

身体は疲労を訴えているが、かまつてなどいられ無い。

「携帯端末どこかに落ちてないかな？」

きよろきよろと辺りを見回すが、無論そんなものは無い。

当初の計画書とは少し、内部構造が違う。後世にもこの施設が引き続き、手を入れられたということなのだろうか。情報を手に入れなければ、何もわからない。あと、完全な施設の見取り図だ。

ふらつく足取りで廊下に歩みだす。

突き当たりだと思っていた廊下には、開き戸があった。目覚めて混乱した人間に対する配慮は思ったより行き届いている。計画当初には無かったものだ。

進んだ先には棚。目指していた情報が溢れている。

印刷された文章に、端末、見たことも無い機器。

機器の手前には西暦と共に機器名とそのバージョン。探していた携帯端末は入り口から数歩の場所に置かれていた。

「何年経ってるんだ〜？」

思わず笑みが漏れる。目移りはしたものの当時でも少々遅れだったものの慣れ親しんでいた携帯端末を手に取り、電源を入れる。いつでも使えるよう、コンセントは差しっぱなしになっていた。

じわり、湧き上がるような社名入りのカラフルなロゴ。数分して携帯端末は目を覚ます。デスクトップ画面には『重要』と文字の入ったテキストが目立つように配置されている。

「重要ねえ」

ファイルがある辺りの画面に触れる。開いたファイルの中には見覚えのある見出し。いくつかは自分が製作に関わったものだ。

眠りにについている人々の名簿。自分が最後に目にした時よりも数十人分くらい増えている。

「時刻は……数千年後——？」

携帯端末内臓の時計はまともにカウントしていないが、別に作成された単純な時刻プログラムは動いている。

「つて、よく動いてたわね。この子」

この施設自体、丸ごと保存されていたと言うのだろうか。よく考えてみれば、塵一つ無い。先ほど食べた料理も、美味しくはあったが、特におかしな味はしなかった。

「ま、深くは考えまい」

せつかく胃に収めたものを吐き出したくは無い。

使い易いよう携帯端末を自分仕様に書き直す。

「入力は音声入力並びにタッチ。パネルの併用。全体的なデザインはこれで、スクリーンセーバーはこれ。とりあえずこいらで再起動つと」

携帯端末を再起動させれば、

『ようこそ、お客様の名前を入力してください。なお、音声認識機能がありますので……』

「野口、良子」

柔らかな女性の声をさえぎり言い渡す。

『認識しました。「ノグチ、リョウコ」様。待機解除は「ノード」でよろしいですか？』

省エネのため、携帯端末は基本的に待機中状態が多い。キーワードをいってやれば、簡単に待機解除できる。

「ホチ」

眠る前に使っていたものと同じ設定。使い慣れたものがよい。

『認識しました。「ポチ」に設定します。パスワードを設定しますか？』

「キャンセル」

『キャンセルします。後日、パスワードを——』

説明はいらない。

「キャンセル」

『キャンセルします。メイン画面起動します』

最初の起動はひたすら煩わしい。デスクトップが現れたのは電源を入れてから一分も経ってからだった。

「ネット、オープン」

『接続します——ページを表示できません』

「ま、数千年も経ちや、当たり前よね」

施設のメインコンピュータへの接続アドレスを唱える。記憶力は衰えていない。

『接続しました』

専用サーバはメインコンピュータのある部屋の隣の部屋に設置したはずだ。メインが生きていなければ、いまだに施設が稼動してるはずない。とすれば、きっとサーバも生きているはずという読みは当たった。

『IDとパスワードを入力してください』

眠る直前まで使っていた個人キーを口述する。マスターキーは定期的に変えられて

いたから、自分の覚えているものは使えないだろう。

『照合しました』

「検索、施設の見取り図」

『十七件ヒットしました。最有力候補をオープンしますか？』

「オープン」

いちいち英語だったのが、ただけでないが、細かい部分まで調整するのは面倒なので当面はこれで使うしかないだろう。

開いた地図はほとんど見たことの無いものだった。自分が知っている当初計画の部分は施設の三分の一にも満たず、周りを囲みこむように増築されているようだ。

「人数の割りに施設の規模が大きいわね」

自分の知らない部屋を周って見ようかと思っていたのだが、どうやらそれは一朝一夕では無理のようだ。

「とりあえずは、体力回復しかないか」

一番近いゲストルームへ向かう。ここも後で作られたらしく、シンプルながらも雰囲気はいい。久方ぶりのベッドへ寝転がる。ずっと眠っていたのではあるが、やはり、本物のベットは違う。いつしか眠り込んでいた。

「……夢じゃないのね」

目を覚ました良子は見知らぬ天井を見つめ、つぶやく。途端、鳴き声をあげる腹

の虫。

よいしょと起き上がり、昨日——かどうかは不明だが、訪れた食堂へ向かう。窓がないので、朝なのか夜なのかかわからない。携帯端末に聞けば教えてくれるだろうが、今が何時なのかなんてことを知る必要性はそれほど無い。とりあえず誰もいないのだから。

同じ席に着き、雑炊に味噌汁、日本茶を注文する。数分して、前日と同じように料理が現れ、胃へ流し込む。

「時間を感じさせない味だわ」

インスタントではあるが、美味しい。食べ終わると、ポケットからコンパクトサイズの携帯端末を取り出し、腕に装着する。まるで子供のころに見た変身戦隊のおもちやのようだ。

「ポチ」

良子の声に答えるように、小さな画面に映し出されるマップ。昨日、開いた画面をそのままにしていたのだ。

食堂は施設に四箇所。ちようど東西南北に面する位置にある。自分が今いるのはどうやら西側の食堂のようだ。

「お弁当はいらないようね、じゃ、探検開始するか」

まず、東に向かって通路を歩き出す。やはり、ところどころは樹々の枝葉や根に侵

食され、壁にひずみが入っている。

ちよこまか動く亀に似た形の清掃機械の姿をたまに見かけるが、清掃場所を指定されているらしく、場所によっては清濁の差が激しい。

「酸素がずいぶん濃いわね」

自動ドアによつて廊下自体もいくつかの区画に区切られているのだが、外へ向かえば向かうほど、空気中の酸素濃度が高くなっている様子。

しつかり眠り、食べたためか、寝起きほど息苦しくは無い。

どうやら施設の端に着いたらしい。透明なドアと窓から見えるのは広大な森。鬱蒼と茂る木々。信じられないことだが、どうやらこの地域は数千年の間に砂漠から森へと変貌したらしい。

一歩外へ踏み出す。

眩しい太陽。青々とした緑。ただ緑一色ではなく、微妙な色使いで草木は混在している。

白い小さな花、青い小さな花、赤い花、ピンクの花、黄色い花。色とりどりの花が咲き乱れ、天国のようだ。だが人為的な手入れはまったく見られない。木々や花々は好きなように、勝手に咲き誇っている様子。

「どうなってるの?」

お昼を東側の食堂で食べ、メインコンピュータが設置された地下へと向かう。

目を覆いたくなるような効果を上げた。
だが、効果はそれにとどまらなかった。

水は、空気は地球を廻っている。

開発者はそれに気づかなかつたらしい。

全世界は今、死に満ちている。

人類は後退する自然の中で、復興ではなく破滅の道を選んだらしい。

世界は――

恐ろしい考えに、頭を振る。考えたくもない言葉が自動的に頭をよぎる。

「そんなはずない」

何のために自分たちは冷凍睡眠されたのだ？

子供たち、成長期の若者たちは死んでしまった。

ゆるりと老化を待つものだけが、

今、世界に取り残されている。

るだろうか。

先ほど見た森を思い出す。人間が数百年で徹底的に壊滅に追いやった自然は、数千年の時をかけて自ら再生していた。

自分は、果たして生きていてもいいのだろうか。本来ならば滅びているはずの人間であるのに。

こんなとき、涙も沸かない自分が嫌いだ。涙を流したのは何時が最後だっただろう。「真紀」

ふと口をついて出た言葉。

真紀が眠った時、私は泣いていた。たしか、あれが最後だ。

「そういえば、真紀がここに収容されてる」

良子が眠りにつく数年前に病にかかった、親友。冷凍睡眠される若者の第一期で選ばれていたはず。

「ポチ、検索、久保田真紀」

真紀はすぐに見つかった。良子が眠っていた部屋の向かいの部屋で眠っていたのだ。

カプセルの中の真紀は凍りついたまま、眠り続けている。最後に見たときと変わらない顔。自分と違い、真紀は年をとっていない。

「真紀」

「」で起こさなければ、きっと何も知らなのまま、この施設が樹々に侵食されつく

すまで眠り続けるのだろうか。

「真紀……真紀を起こすのは私の我侘になるのかなあ？」

平和で幸福な未来。そこで起こされるべく、冷凍睡眠についていたはずの若者達。

「真紀、ごめんね」

唇をかみ締める。

「ポチ、検索。冷凍睡眠の解除」

『三二件ヒットしました。最有力候補をオープンしますか？』

「オープン……何々——冷凍室へ運び入れ、数時間をかけて解凍と睡眠からの覚醒を促す——」

ま、普通はそうだろう。自分の場合が特別すぎたのだ。

解凍室は別の部屋に当るらしい。そこまでどうやってこのカプセルを運べというのか。担架を持ってきたところで、カプセル本体の重さと真紀の体重はどろがんばつても一人で動かせるとは思えない。

どこかに筋力強化服でもあればいいんだけど。

「ポチ、検索、筋力強化服」

『該当ありません』

ま、そうだろう。冷凍睡眠者が眠るっているだけの施設内に筋力強化服なんて物は必要だから。けれど、戦争があり、その後ここで過ごしていた人間がいたとすれ

ば、存在する可能性は高い。

「検索、えつと……」

キーワードをいろいろ変えて検索したところ、やっと筋力強化服の在り処を見つけた。

実物を見て、首をひねる。

「うーん」

一見して被り物の雪男。

「なんでこれが筋力強化服なわけ？」

技術の発展は予想だにできない。長い毛の部分に触れてみる。さらさらと、毛並みの良い猫のような触り心地。

「なんで毛がいるわけ？ ポチ」

胸につけられた国旗ならびに、見慣れない筋力強化服の性能について検索する。

国家は真紀が眠りについて数百年後に誕生したものだとかわかった。まさかあの国とあの国が合併するとは。

この筋力強化服は記録に残っている限り最新鋭のもので、以後開発されたものはないらしい。着用者の思念を読み取り、何倍もの力を発揮できる優れもの。初心者にも優しい圧力感知装置付き。筋力強化服でよく起こる、力加減がわからず握りつぶしてしまうという事故の予防策までもがとられているとはなんとも画期的。

水陸両用、しかもこの毛のおかげで寒冷地、熱帯と場所を問わず使用でき、宇宙での使用も可と、あまりにも何でもござれな多様使用。

「漫画みたい」

早速、筋力強化服を装着してみる。さすがは最新式。着けていても重さを感じさせない上、動きやすく、視界も良好。

「ポチ」

いつもならば続けて用件を呼び出すのだが、それをしない。数秒して、柔らかな女性の声が響く。

『「用件は何ですか？」』

呼び出したポチの声もクリアに聞こえる。

「こりやいいわ」

早速真紀のカプセルを解凍室に運び入れる。シンプルなつくりの部屋だ。一段高くなった台の上にカプセルを置く。

目を覚ました真紀に、まずなんと言おう。いや、真紀は冷凍睡眠なんてもの事態知らないまま寝ているのだ。まずは混乱させないようにしなきゃいけないだろう。

とすると、私の外見は明らかにアウトだ。どんなに言い張ろうが三十路前としか言いようがない。がんばって若作りしようとも十代後半には絶対に見えないはずだ。どうする？ どうしよう。これならばもつと真剣に肌のお手入れしとくんだったと、

数千年前の自分に愚痴をいってもしかたない。

「とりあえずは、この格好のまままで世界情勢について説明しなきゃね」

だが、果たして聞いてくれるだろうか。雪男みたいな格好をしたヤツが述べた事実など。自分ならば——絶対に信用しない。

「そうか」

思い浮かんだのはメインルームでみたテキスト。

携帯端末が置かれていた部屋にとつてかえし、良子が眠る前の時代、最新式だったパソコン一式を運び出す。画面は超薄型。一枚の紙にしか見えないほど薄く、ハードもティツシユボックスほどの超コンパクトサイズ。

早速メインに接続し、必要な記事を纏め上げる。この辺は大学時代のレポート提出で磨かれた腕だ。

真紀は果たして自分のことを覚えているだろうか。第一期の冷凍睡眠者はほとんど人体実験に近い状態だった。覚醒時に何らかの記憶障害、知能障害が起こる可能性があると言われていた。

心配しても始まらない。

良子は覚悟を決め、解凍スイッチを押した。

「真紀——？」

眩しい白光。

朝だ。

動かない頭で、本能的にそれを知る。久々の感覚。泥沼のようにまとわりついていた眠気が波のように引いてゆく。

「真紀」

柔らかなアルトの声。妙に懐かしい響きだと真紀は思う。

でも、誰の声だろう。

「真紀」

愛しむように名を呼ばれる。

「……起きてる、」

軽く右手を上げて手を降つてみせる。まぶたは鉛のように重く、動かない。体は妙に冷え切っている。

「寒い——良子……ごめん、寝ちゃったね」

そばにいないはずの親友に声をかける。眠り込む時、不安げな顔をしていた良子。

言いたい事は山ほどある。良子が心配げにするから、真紀自身も少し不安だったのだ。例の病気じゃないかと。

でも、私は目がさめた。病気じゃなかった。

「もうちよつとじつとしてて、真紀」

知らない声に再び名を呼ばれる。何度も名を呼ばれているところを見ると、知り

合いなのだろうか、と真紀は頭をひねるが、思い出せない。

「誰? —— 良子?」

真紀は親友の名を呼ぶ。良子ならばこの声の主について説明してくれるだろうと思いい、何度も名を呼ぶが答えは返ってこない。

氷が溶けるように、体温が戻ってくるのを感じる。

「……寒い……」

「もうちよつと我慢してね、真紀」

パチ。パチと何かスイツチでも押しているかのような音。息を殺し、何かをじっと見ていた様子だが、ほつと息を漏らし、

「真紀、もう大丈夫みたいだよ」

うつすらと開けた目から、異様な光景を目にする。

「何、これ?」

まるで映画のセット。近未来SFものなんて銘打たれた映画で見たようなカプセル型のベッドに真紀は寝かされている。

そばには木製の机と椅子。その上にキーボードらしきものと、映画のスクリーンを小さくしたようなもの。

「何、なに?」

もう一度声をあげる。

「おはよう、真紀」

先ほどから気になっていた声の主。体長二メートルほどの真つ白な毛むくじやら。……私、まだ寝てるのかしら？」

ベッドにもぐりこむ。

「真紀、起きてよ」

雪男とかイエティとか呼ばれてた生物はゆさゆさと真紀の体を揺さぶる。

「ちよつと、何よ」

しばらく放つていたものの、眠気がまったくしないので真紀は仕方なく起き上がり、夢だから構わないか、という妙な居直りで真つ向から見据える。

全身は五センチほどの毛に覆われているが手に当たる部分は白く、ごつごつとしたグローブのよう。顔は……白く、目に当たる部分に黒い一直線があるのみで、のっぺりとしている。声をどこから出しているのかわからない。

「あんた誰よ、人のこと馴れ馴れしく呼んでるけど……変な被り物なんかして！」
攻撃をする様子が感じられないため、真紀は腕を組み、黒い瞳で睨みつける。

雪男は小躍りせんばかりに嬉しそうな声で、

「肝が据わってるね、真紀」

「だから、人の名前を馴れ馴れしく呼ばないで。あんた誰よ？」

「うーん、」

腕を組んで首を傾げる。

「名前を名乗れないっての？」

「名乗れないわけじゃないんだけど……」

歯切れが悪い。

「じゃあ何なのよ」

「名前はあるんだけど、真紀には発音難しいと思うんだよね——あ、そうだ」

ぽんと手を打ち鳴らす。

「真紀がさつきから口にしてる『良子』で良いよ」

馬鹿にされているとしか思えない。

「良子は私の親友の名前よ」

「じゃ、今から真紀とは親友だね」

「違う、私はあんたに名前を言えつて言ってるの！」

雪男は不思議そうに首を傾げ、

「発音が難しいと思うんだけど——」

と、何とも言いようが無い言葉を発する。長いようできて短いような、聞いたことの

無い言葉。

「発音できないでしょ？ 真紀には」

嫌味ではなく、無邪気に言う。真紀は唸るような声をあげ、

「でも『良子』はだめ。あんたは雪男のユキオね」

「まあ、良いけど……」

ユキオは不満そうに呟いた。

「で、一体何なのよ？ ここのは」

真紀は夢であることは百も承知で尋ねる。SFものの映画は好きだが、この机と椅子とか、シートとか……いまいちいただけない。未来っぽくみせるのであれば、表現の仕方つてものがあるはずだ。真紀は内心この状況を楽しんでいた。

ユキオは不細工な動きでカタカタとキーボードを叩き、

「これ」

と、ディスプレイを指差す。映画のスクリーンだと思っていたのに。

「何なに……『眠り姫計画』？」

真紀に見慣れた文字がディスプレイに表示されている。内容はまるで小説。

二十一世紀の末、あるウイルスが世界に蔓延し、全人類の約半数がその病に侵された――

最初は馬鹿にしたように声に出して読んでいたのだが、真紀の声は徐々に小さくなり、やがて唇だけを動かして読み進める。

「真紀、座って読みなよ。コーヒー持つてくるから」

釘付けられたような真紀を残し、ユキオは部屋を出る。

三十分ほどしてユキオは戻ってきたが、真紀はデイスプレイに魅入られたように張り付いていた。全て読み終わるには三時間はかかると言うのに。

「真紀、」

ユキオが声をかけると、意外なことに真紀はすんなりと振り向いた。不安げな瞳でユキオを見る。

「真紀、どこまで読んだ？」

「……人類は滅んだの？」

真紀の不安を打ち消すように、ユキオは首を振る。

「真紀は人類でしょ？ まだ滅んでないよ」

「私以外は？」

夢だと何度自分に言い聞かせてみても、真紀は不安を消せない。何か引つかかる。

「いるよ」

ユキオは変わらない声色で答える。

「——どこに？」

ユキオは真紀に座るようにいい、珈琲を差し出す。

「人類は滅んでない。真紀が眠る前にあった『裁判』は知ってる？」

真紀は曖昧にうなづく。ニュースに何度も取り上げられていた事件は『裁判』という名で呼ばれていた。

真紀が生きていた二十一世紀の末、「全人類に裁きを下す」との犯行声明とともに、世界中のいたるところで同時多発的に新種のウィルスがばら撒かれた。

感染者は発病すると眠ったまま起きない、それがわかったのは事件が起こつてから数日後。感染者もわからず、発病してもしばらくは気づかれない——難病だった。その頃にはマスコミによつて事件を『裁判』、発病者を『眠り姫』と呼ばれるようになっていた。

「——それが？」

揺れる瞳で真紀はユキオを見据える。

「あの文書に書いてあつた通り、起きない感染者たちを冷凍睡眠させることに政府は決めた。だけど、全員なんて不可能だから、家族の承認を得られた若くて、健康なものが優先された」

真紀は大粒の涙をぼろぼろと流す。

「じゃ、ここどこ？ 今はいつなの？」

「ここは地球だよ。時代は——数千年後つてことになるかな？」

「……」

真紀は顔を覆い泣き始める。

「真紀、泣かないで」

ユキオは真紀を優しく抱きしめる。真紀の涙は止まらない。

良子もすでに死んでしまったのだろうか。ついさっきまで一緒に居たというのに。

「……良子お……」

真紀は泣き続けた。

「おはよう、真紀」

眩しい。

優しいアルトの声に、真紀はうつすらと目を開ける。

「おはよ……」

「おはよう。目が覚めた？」

見慣れた顔に真紀はため息をつく。

「ユキオ——夢じゃないのか」

「夢ってなあに？」

無邪気な声。

「何でもない」

真紀が首を振ると同時にお腹がなる。

「……ごめん」

気まずく謝ると、ユキオは笑いながら、

「昨日も目覚めてから飲まず食わずだったしき、真紀ってお腹減らないのかとちょっと心配してたんだよ」

「こっちに来てと、真紀の手をとる。」

一つ扉を出たところで、ユキオは壁にかかっている宇宙服を指差した。

「これ着て」

「……ここ、地球じゃないの？」

まじまじと宇宙服を見つめながら呟く。胸と腕に取り付けられている国旗は知らない国のもの。

「地球だよ、ここは」

「でも、」

「真紀が生きていた頃とは大気の成分がちよつと変わっているから、そのまま外に出たら苦しくなると思うよ」

それならば食事は外で出来ないのではないだろうか。ふと頭をよぎるが、そばからユキオが、

「早く着なよ。着ないとここから出られないよ」

急かされるまま真紀は、それを着込む。

ユキオは被り物を脱ぎ始める。

「……ユキオ？」

真紀はユキオを正面から見ようとしたが、ユキオは振り向きもせず、真紀の手を引つ張つて歩き出す。

十十十

一面の緑。それが植物だと認識するには数秒を要した。

「これ……」

真紀はユキオを振り向き見る。

そこにあつたのは懐かしい、けれど大人びた笑顔。

「真紀、どう？」

真紀の瞳は涙が溢れる。

「——良子、どうして？」

言葉にならない。

「二十一世紀の終わり、私たちの世界は灰色のコンクリートと砂漠ばかりだった」

良子は小さくジャンプし、草の中へ寝転ぶ。

「植物は偉大だよね。長い時間はかかったみたいだけれど、人類が数百年で破壊した地球を蘇らせた。そして、浸食不可能なはずだった『眠り姫』の施設の壁に穴を開け、私の冷凍睡眠カプセルを開けたの」

良子は大きく息を吸い込む。

「濃い空気をいきなり吸い込んで、私は数日、苦しくて動けなかった。ようようカプセルから這い出して見ればこれでしょ？ ものすごく驚いたわ」

良子は「ごろり」と身体を回転させる。言葉以上の苦労があつたのだろう。真紀が知る良子にはなかった、陰りを帯びた瞳。

真紀は良子が寝転んでいた跡に寝転がる。横に並ぶ親友の顔をみると、同じように真紀を見つめ返していた。

「なんで、良子だつて言ってくれなかったの。変な被り物までして」
涙で言葉がつかえる。

「あれ、筋力強化服なの。真紀のカプセル運ぶの、あれ着ても大変だったのよ」
良子は照れくさそうに微笑む。

「私、嬉しかったんだ。真紀が私のこと覚えていてくれて。それにね、」
真紀の知らない顔で、空を仰ぎ見る。

「——聞こうと思つてたの」
真紀は耳を濟ませる。

「この地球に、人類は必要なのかな？」
ゆつくりと真紀は視界に入る青々と茂る木々、萌える草花を見る。

真紀が知っている二十一世紀の終わりから、人類はどんな歴史を歩んだんだろう。

『眠り姫』として眠っている人は数万人にも及ぶ。

真紀が考えてみてもわからない。考えてみても答えなど出せない、大きな問いかけ。良子と同じように真紀は空を見上げる。

「空、青いね」

「……うん」

空は高く、深い蒼――。

リアルマジシャン

一・中島亮太

連日の残業もようやく今日で終りを迎える。我が家に帰り着いたのは後一時間ほどで今日が終わろうとしている時刻だった。

我が家、とはいっても築二十年のおんぼろアパート。二階へと続く鉄筋の階段を上りつつ、妻と娘の顔を思い浮かべる。再婚したばかりの妻・菜摘とこの間六歳になった娘の朱音。二人が待つていてくれるのだと思うと自然、顔が緩んでくる。こういうのを幸せというのだろうか。

部屋からもれる灯り。寝ていればいいと言つても、菜摘は帰りを待つていてくれる。それが嬉しい。

「ただいま」

ドアを開ける。菜摘は上がりはなに三つ指つき、じつと俺の顔を見ていた。ここまで丁寧な出迎え方をされたのは初めてだ。何事かといぶかしみつつ、

「ただい——」

「あなた、離婚して欲しいの」

「……え？」

何を言われたのか理解できなかった。いや、理解したくも無かった。菜摘はそれがわかっているとばかり、俺を追い詰めるように、

「離婚していただきたいの」

嘘偽り無いと語る真剣な眼差し。

「……どうして？」

なんと返せばいいかわからず、小さな声で問い掛けることしかできない。頭の中を駆け巡る幸福な思い出。今まで、今朝まで幸せに暮らしていたはずだ。そうだ、菜摘が幸せだと言っていたのはつい先日ではないか。俺は薄給取りでしかないけれど、菜摘は不平を言うような女ではなく、本当にできた女で——まさか。

「お、おま、う、浮気か？ そうなのか？」

「違います」

落ち着き払った菜摘の声。自分一人動転しているのがあまりにも滑稽で、おかしいのではないかと思わせるような響き。俺は大きく深呼吸し、

「と、とりあえず飯を食ってからにしよう」

居心地の悪い部屋へとあがり込んだ。

二・中島朱音

高校二年二学期の中間テストも終わり、開放的な気分を味わいながら家路につく。昼食は友達と一緒にファーストフードへ行こうかとも思ってたけれど、いつも通り、顔なじみのスーパーで特売商品を買って込んだ。

家の前には長い黒髪を一つに束ねた、三十代半ばの女性。父さんの妹、つまりは私の叔母にあたる松井優香さんだ。

「優香さん」

声を掛ければにつこりと、満面の笑みで手を振ってくれる。手を振りかえそうと思っただけ、片手に鞆、片手に買った物袋を下げた状態ではそれでもできず、頭を下げる。

「帰りました」

「お帰り、朱音ちゃん。これ、おすそ分け」

手提げを持ち上げる。

「いつもありがとうございます。そうじゃないかと思ってきました」

鞆から何とか鍵を取り出し、優香さんに渡す。優香さんも勝手知ったる何とやらで、家へあがり込む。優香さんにスーパールの袋を渡し、服を着替えに部屋へと向かう。優香さんは週に一度、必ず尋ねてくる。以前は父方の祖母が尋ねてきていたのだが、体を壊してからは優香さんが後を継いだ。用件はただ一つ、父への再婚の勧めだ。着替え終わって台所へ行くと、優香さんは持参した惣菜をテーブルに並べていた。

「ありがとうございます」

言いつつ、優香さん用の食器を手渡す。ご飯を盛って、朝のお味噌汁の残りを温めて注ぎ分ける。

テーブルにつき、食べ始める。優香さんが作った肉じゃがを一口。

「どう？」

「美味しい」

優香さんは本当に嬉しそうな笑みを浮かべる。こんなところが憎めない。

「ところで、兄さんは？」

「海——じゃないかな」

カレンダーにちらりと目をやり、答える。

「……まだ菜摘さんのことが忘れられないのね」

優香さんは私と同じ視線の先、カレンダーにつけられた印を見つめる。そんなとき、優香さんはちよっぴり哀しそうな顔をする。

父さんは満月の日になると、かならず海へ行く。瓶に母さんへの手紙を詰めて、海に流すのだ。

母さんとは言っても私を産んだ人ではない。私が物心ついたころに父さんが再婚した、菜摘さんという女性だ。私も父さんも母さんが好きだったのだけれど、ある日、母さんはいなくなってしまった。

「母さんは遠いところで元気にしてるよ」

母さんがいなくなつてすぐ、父はそう言いながら母に宛てた手紙を書くように言った。幼い私は「私は元気です。母さん、早く帰ってきてね」と結ぶ手紙を書いた。毎月、

満月の前の晩、私は同じ内容の手紙を書いた。

けれど、なんとなくそれに違和感を感じ始めるようになったある日、私は父に問い掛けた。

「手紙はポストにいれるものでしょ？」

父は言葉に詰まった様子で、しばらく考え込んだ後、寂しそうに呟いた。

「母さんはとても遠いところにいるからね、ポストに入れたんじゃ届かないだよ」

母はもう帰つてこないのだ。ぼんやりとした不安がはつきりと輪郭を見せた瞬間だった。私は母への手紙を書くことをやめた。

暖かい海、冷たい海、季節ごとに表情を変える海を何度も見た。

瓶に詰めた手紙はいつまでも海面へ浮かんでいることもあったし、すぐに姿がわからなくなってしまうこともあった。父はそれを見つめながら寂しそうに母の名を呟くのだ。やがて私は海へ行くことも止めてしまった。

「お母さん、つてどんな人だったか覚えてる？」

「さあ、物心ついたところに死んじやったから」

覚えてないと首を振る。

嘘。本当はよく覚えてる。一緒に暮らしたのは短かったし、幼なかつたけれど、大好きだった。

母つて存在に憧れを抱いていた幼い頃、私は父に隠れて毎夜、星に願っていた。なん

て子供っぽい、そして熱い情熱だっただろう。そしてある夜、星のようなきらめきとともに現れた彼女を見た。今ならば車のハイビームにでも照らされているのだろうと思っただけで、幼い私は星が降ってきたのだと思った。だから、あれは母さんに違いない、そう思った。けれど、彼女は私の元には来ず、そのままどこかへ行ってしまった。再び出会ったのは三日ほどして、橋の上だった。

「残っているものも少ないし」

母の持ち物はとにかく少ない。まるで父と結婚するまで、母の存在などこの世界に無かったかのように。そして家族も、親戚も、友人も存在しないのだ。

母が写っている写真も少ない。結婚式代わりに撮った写真。ウエディングドレスを身に着けた母、真中にピンクのワンピースを着た私、タキシードを着た父。みんな幸福そうに微笑んでいる。

そして私が六歳の誕生日のときの写真。よくあるイチゴの誕生日ケーキに立てられた蝋燭を前に、私と父と母、三人で写りこんだものだ。母はそこでもまた、笑っていた。

父さんが戻ってきたのは優香さんと夕食を作っているときだった。

「お帰りなさい」

「ただいま」

「お帰りなさい」

優香さんの顔を見た途端、父さんは不機嫌になる。

「また来てたのか」

「またつて何よ」

「別に」

「もう、喧嘩しないでよ。二人ともいい歳して」

仲裁していて気が付いた。父さんの片手には瓶。海に流すため、持っていったものだ。今までそれを持ち帰ってきたことは無い。

「父さん、どうしたの？」

瓶を指差す。

「ああ、」

父さんは途端、にこやかに微笑む。

「菜摘が帰ってくるんだ」

「は？」

「はい？」

優香さんと顔を見合わせる。

「あの子父さん、母さん死んだんだよね？」

おそろおそろ尋ねる。

「俺がいつそんなこと言った？ 菜摘は遠いところへ行ってるって言わなかったか？」

「いや、確かにそう聞いたけど——」

小さく呟く。確かにそう聞いた。けれど、普通それは死んだって事の隠喩なはずで……。

「じゃあ何のために手紙を海に流してたの？」

優香さんの声に勇気付けられる。

「そうだよ、いくら遠くても、海外でも手紙は届くでしょ？ 何も海に流さなくても

——

「届かないよ。海外じゃないからね」

「じゃ、どこだつて言うのよ。海の中だともいうの？」

「でも無いらしい」

父さんは今までに見せたことの無い、謎めいた微笑を浮かべ、

「わからないんだ。どこだか」

もしかして、母さんがいなくなったショックでいよいよおかしくなってしまったのだからか。

色々問いたげな優香さんを言いくるめ、何とか帰ってもらおう。

「あのさ、父さん大丈夫？」

食後の日本茶を淹れながら、そっと父さんの様子を伺う。

「何が？」

答えた父さんはいつもの父さんで――。

「何がって――母さんのこと」

父さんは思案顔をしていたが、やがて、

「そうだな。朱音には話してもいいよな」

何か重大なことを話しはじめる雰囲気。私は固唾を飲んで父さんの次の言葉を待った。

「母さんはな、本物の魔法使いなんだよ」

言われた意味を理解できなかった。景気付けにもう一杯日本茶を煽り、

「母さんが魔法使いだなんて――いつ思いついたの？」

「信じられないのはよくわかるが、母さんは本物の魔法使いなんだよ」

心外だとばかりの顔。

「あのね、魔法使いなんている訳無いでしょ？」

「そうだな、父さんも最初は戸惑ったからな」

話が進まない。

「わかった。じゃあ、母さんが魔法使いって事で話を進めましょ」

ぶつぶつと呟く父さんを無視し、質問を投げかける。

「どうして海に投げ込んだ手紙が母さんに届くの？ 母さんがいる遠いところってど

い？」

「わからない」

ものすごくシンプルな答え。

「は？」

「わからないけどな、母さんがそうすれば手紙が届くって言ったんだ。それと、母さんがいるのは魔界だそうだ」

「意味がわからないし、魔界ってどこよ？」

「母さんがそういつてたんだ。魔法使いがいるから魔界だつて」

私は大きく息を吐いた。父の事は信頼しているし、とてもじゃないがこんなファンタジーを思いつく人だとも思ったことは無い。かといって、母さんが魔法使いだなんて信じられようか。

「父さんのことが信じられないんだな？」

「うん」

大きく頷き返す。父さんは悲しそうに溜息を一つつき、

「ちよつと待ってろ」

自室から前回の満月の日、海から持ち帰った瓶を持ってきた。

「これがどうしたの？」

「約束したんだ、菜摘と」

「何を？」

父さんは黙ってコルクを抜き、瓶を逆さにした。出てくるはずの丸めた手紙は出てくること無く、小さな、鈴が鳴るような音が響く。

「——え？」

白い欠片、金色の欠片、蒼い欠片。色とりどりの金平糖が湧き出るかのようになり、テールへ落ちる。

「星屑だそうだ」

うつすら光るそれを手にとる。金平糖に似てはいたが、それは宝石のようだった。

三・中島菜摘

親元を飛び出したのは、若気の至りだったのだと今にして思う。

母様は優れた魔法使いで、お婆様は魔界でも名の知れた魔法使いだった。そんな家系に生まれたからには周囲に期待されるのは当たり前のこと。わかつてはいても、当事者には辛いこと。

夏の成人の儀式を前にしてスランプに陥ってしまった私は、何とか脱出しようとして散々努力をした。けれど、蟻地獄。底なし沼。もがけばもがくほど、無力な自分を知るばかり。

儀式当日、プレッシャーに負け、スランプを脱せず、散々な精神状態のまま挑んだ

私は成人に値せずの評価を受けた。前後数日間の記憶が定かでないのは、そのシヨックの大きさからだろう。

ふらりと家を飛び出し、流星に乗ってたどり着いたのは人間界のある街。若い上、何ができるといふわけでもない私は、そこでも己の無力さを思い知らされた。かといつて今更、家に戻るわけにも行かない。

困り果て、大きな橋の真中から川面を見つめているときだった。

「何してるの？」

小さな女の子の声。

「え？」

水色のワンピースを着た、おかつぱ頭の少女が私と同じように欄干の隙間から川面を見つめ、

「何を見てたの？」

問い掛けられる。

「——何も」

首を振る。全てが億劫だった。

「朱音、」

男性の声。少女のいる方向から男性がゆつくりと歩み寄ってくる。

「朱音、何してるんだ？」

父親なのだろう。少女に似た面影がある。

「わかんない」

少女は笑って答え、私を振り返る。

「だよね？」

秘密を共有しているかのように笑いかけられる。

「すいません」

男性はなぜか謝る。

「別にかまいませんよ」

「お邪魔じゃなかったですか？」

「彼女の言った通り、特に何を見てたわけでもないんです」

川面を見つめる私の視線の先を探るように、父娘は目を向ける。

「何もありませんね」

確認するような問いかけ。父娘揃って、なぜ、私の見ているものを知りたいのだろう。

「……ええ」

何だか可笑しくて、笑みを隠し切れず頷く。

「本当に何を見ていたってわけじゃないんです」

ぽつり、にわか夕立。

父娘は嬌声を上げつつ、橋のふもとにある喫茶店へかけてゆく。私は呆然と二人を

見送り——父親が戻ってきた。

「何してるんです、急いで」

「あの、私」

「ほら早く」

「でも、あの——」

お金を持っていない、告げる前に喫茶店へ連れ込まれた。降り止まぬ雨を窓越しに眺めながら、彼が早婚したものの今は独身であり、娘の朱音ちゃんと二人暮らしであることを知り、私は行くあてのない身であることを告げたのだった。

なぜか父娘に気に入られた私はほんの数日、仕事が見つかるまで彼の家でお世話になることになった。けれど不景気なご時世、身元がはっきりしない私の仕事先などなかなか見つからず、父娘の世話になる日々ははずると長引いた。

「結婚してくれないかな?」

「父さんのお嫁さんになつてあげて」

二人に頼み込まれたのはクリスマスの日。運命って言葉は好きじゃない。けれど、彼との出会いは運命だったのだ。そうとしか言えない。私は自分でも不思議なほど素直に頷いていた。

「後継者問題が起こりそうなの」

突然電話があつたのは、朱音ちゃんを寝かしつけ、近頃帰りの遅い彼をうとうとと待っているときだった。どうして私がここにいることが——尋ねようとして、優れた魔法使いである母にとつて、このくらい造作も無いことだったと思ひ当たる。

「菜摘さん、帰つて来られませんか？」

「……無理です」

私は母に今の状況をかいつまんで伝えた。母は黙つて聞いていたが、

「それでもあなたには帰つてきていただかないと。お母様——お婆様はあなたを後継者にしたいとおっしゃられているの」

お婆様の後継者。私が魔界でも屈指の魔法使いであるお婆様の後を継ぐなど、愚の骨頂だ。

「そんなこと——」

「菜摘さん、あなた、あの頃のあなたの状態、本当にスランプだったと思つていらつしゃつるの？」

私は沈黙を持つて答える。

冷静にあの頃を思い出せば、確かにスランプというには微妙に違う感覚が付きまゝとつていたことは否めない。それまでできていた魔法が使えなくなつてしまったことにスランプだと思つていたのだが、魔法を使う際、覚えていた恐ろしさや不安——。

「あなたは、一皮向ける寸前だった。私もお婆様もそう思っていたのですけれど」

自分で制御できないほどの魔法力。私はそれに恐れをなしたのだ。そして、それを克服できないまま目を背け、逃げた。それが真実。

「お母様、私は……」

「修行を積みあげばあなたはお婆様を超える魔法使いになれます。今夜十二時に迎えをやりませう。それで帰っていらつしやい」

母の言葉は絶対だ。見習魔法使いでしかない私に逆らうすべなど無い。

私のことなど母も祖母も見捨てているだろうと思っていた。だから、母の言葉はとても嬉しいものだったし、お婆様から期待を掛けられている事実は小躍りしたいくらいだった。魔法使いになること、それは私が物心ついた頃から願ひ、夢見ていたことだったから。

けれど、二人と分かれることなど……でも。なりたい。願ってやまなかつた魔法使いに。母様、お婆様がなれると言うのなら、私はなれることができるのだ。魔法使いに。

「あなた、離婚して欲しいの」

いつもながらに幸せそうな顔をして帰ってきた彼に非道だとは思ったけれど、決意が鈍るのが怖かった。

「……………え？」

うわの空の彼に繰り返し突きつける。

「離婚していただきたいの」

「……どうして？——お、おま、う、浮気か？ そうなのか？」

回らぬ頭で、あらぬ想像を働かせているらしい。

「違います」

私の言葉にそれでは——と頭を抱えていたが、やがて考えつかれたのか、

「と、とりあえず飯を食ってからにしよう」

「で、なんで離婚なんだ？」

食後の日本茶を啜りつつ、彼が問い掛ける。

「母から戻つて来いと言われたの。私の家はね、地元じや有名な古い家柄なの」
「今まで一度も話さなかつた身の上話。彼は先を促す。」

「相続の問題が起きそうだからって……」

嘘を並べ立てなければいけない自分が嫌になる。彼は黙って茶を啜る。

「——だから私に帰つて来いって……」

「菜摘の実家なら、僕も一度挨拶に行かないと——」

「無理よ」

首を振る。

「とつても遠いところにあるのよ。だから——」

「いや、でも、地球の裏側とかじゃないだろ？」

冗談めかした口調。なんと説明しようか、考えあぐねたものの素直にはなすことにした。彼ならばどんな内容だろうと信じてくれる気がして。

「あのね、私、隠してたことがあるの」

「何？」

不安そうな顔。その顔をしなければならぬのは私のほうなのに。

「私、魔法使いなの。本物の」

彼は不思議そうに首を傾げ、

「魔法使い？」

「そうなの、私、本物の魔法使いなの」

見習いだけど、と小さな声で付け足す。

「……」

「信じてないでしょ？」

大きく頷く。

私は呪文を唱え、星屑をいくつか取り出してみせる。とても簡単でありふれた魔法だけれど、彼はそれで納得してくれた。しげしげと星屑の欠片に見入っている。

「信じてくれた？」

「——ま、ちよつと」

星屑をこわごわ、触りながら頷く。

「私の実家は魔界では——魔法使いのいる世界のことをこう呼んでるんだけど——
—名のある家柄なの」

「……」

混乱した顔で頷く。理解できなくても、理解しようと努力してくれている。本当に私にはもったいない人だ。

「祖母は魔界でも高位の魔法使いのだけれど、私に後を継がせたいって」

「へえ」

感心したって声。

「でも私、まだ一人前の魔法使いじゃないの。一人前の魔法使いになるための試験に落ちてしまつて——あなたと出会つたのはその頃なの」

あの頃の自暴自棄振りを思い出すと苦笑するしかない。

「魔法使いになることは、私の小さな頃の夢だったの」

彼はことりと湯飲みを置く。

「で、なんで離婚しなきゃならないんだ？」

「なんでつて……私、もうこちらの世界には戻つてこれないかもしれないから……」

彼は大きく息をつく。

「もし、かもしれないだろ？」

「でもそれを決めるのは私じゃなくて、お婆様なの。私が一人前の魔法使いになれば、お婆様は私をきつと跡目にされるわ」

「だからって、なんで離婚しなきゃならないんだ？」

彼はしつこく尋ねる。

「一緒にいられないのよ？」

「それだけか？」

彼はほつとした様子で、

「菜摘が単身赴任してると思つて、こつちで朱音と待つてる。君が帰ってくるまで、ずっと待つてるから」

なんと言えばわかつてもらえるだろう。言葉を捜す私に、彼はいつもの優しい笑みで言った。

「初めて会つたときから、ずっと変わらず好きだよ」

口癖のように繰り返し聞かされる言葉。何度聞いても恥ずかしくて、うつむく私の顔を覗き込み、

「菜摘は？」

「——わかつてるでしように」

そつけない言葉を返しても、彼は満面の笑み。

「菜摘は帰ってくる、だろ？」

帰ってきてもいいのだろうか。いつになるかわからないのに。

「菜摘、帰ってくるよな？」

「……ええ」

なぜか涙が溢れてくる。

「連絡はとれる？」

無理だと首を振る。魔法使いがこちらの世界に干渉することはできても、人間が魔界に干渉することはできないから。

「あ、でも、もしかするとボトルレターならば可能かもしれない」

「ボトルレター？」

「手紙を瓶に入れて海に投げ入れてくれれば恋愛ごとの好きな人魚達が届けてくれるかもしれないから」

「人魚？ 人魚って存在するの？」

啞然とした顔の彼。可笑しくて笑える。

「満月の夜はね、魔界との出入り口が開くから」

人魚は物語に何度も登場しているというのに、どうしてその存在を忘れるのだろう。それとも、忘れてしまうのだろうか。胸の中に不安が広がる。

「菜摘、俺は待つてるよ、ずっと」

彼の言葉は力強い。

「ありがとう——」

十二時を告げる鐘の音がどこからともなく聞こえた。

「時間だわ」

さよならの言葉を言う間もなく光に包まれ、私は魔界にある生家の玄関先にたずんでいた。そして、迎え入れるように、扉が開く——。

四・中島朱音

母さんの好きな花を買い、食材、食器を買い込んだ。両手に持ちきれないほどの荷物を持って家にたどり着く。荷物を解きかけたところで、

——ピンポーン

来客の音に、玄関を開ける。

目の前に立つのは戸惑い顔の女性。よく見知った、少し老けてはいるけれど懐かしい顔。

「……朱音ちゃん？」

言葉も無くただ立ち尽くす。どう声を掛けていいものか、どんな言葉を掛ければいいものか思い浮かばない。言いたいことは山ほどある。罵りの言葉、喜びの言葉、どれから言えば良いのだろう。

「誰が来たんだ？」

父さんが顔を覗かせ、

「……菜摘！」

「ひぎゃ」

「痛い、苦しいい」

感涙とばかり私を巻き込んで抱きつく。何度も母さんの名前を連呼し、

「お帰り」

泣き始めた父さんに、母さんは写真同様、極上の笑みを浮かべる。母さんも同じ思いでいたんだってこと、私は初めて理解した。

「お帰り、母さん」

ぎゅつと抱きつく。母さんは泣きながら私達を抱き返した。

「——ただいま」

青のシンデレラ

まるで無骨な針金細工。

銀色、灰色の壁がどこまでも高く、遙かに高く天へとそびえている。

超高層ビルは競いあうように背を伸ばし、建設ラッシュも手伝つてこの辺りの景観は十年もしない間にがらりと変わってしまった。

その中でも一番高いビルの前、喪服を着た私はあまりに場違いで。

「本当に、ハニニ？」

確かめるように手もとのメモを見やる。

+

祖母が天に召されて三週間になる。部屋を整理していたら、弱々しい字で「遺書」と書かれた封筒を見つけた。

おそるおそる開けてみると、中にはいつの間にか書いたのか、

『御誕生日おめでとぅ』

おばあちゃんからの最後の贈り物です』

ちよつとした落胆と、そして喜びと。

愛用していた花柄の一筆便箋には、身構えた遺書的な内容はなく、ただ、私の誕生日を祝う言葉のみ。同封されていたのは簡易な地図とメモだった。

春物の着物の間にそっと。隠すように入れられた便箋には、お茶目な祖母らしさが伺えて、薄れ掛けていた寂しさを呼び戻した。

複雑な気分まま数日を過ごし、今日、私の誕生日を迎えた。

やつと決意し、ビルへと足を踏み入れる。

一年ほど前、世界で一番高いビルが完成したとメディアで取り上げられていたビルだ。今では記録は塗り替えられているけれど、この地区で一番なのは変わらない。

受け付けでメモに書かれていた店名を告げると、一番奥のエレベーターに乗るように言われる。

エレベーターの前には黒い制服を着た男性。

「ようこそ、」

良いタイミングでエレベーターの扉が開き、微かにバラのような甘い香りが漏れる。

「さ、どうぞ」

促されて中に入る。淡いオレンジ色の壁面をした室内は限りなく丸い。床はさすがに平らなもの、天井も壁も全てが丸みを帯びている。まるでかぼちゃの馬車だ。

赤いビロードのソファがぐるり、壁際に設けられている。

「お座り下さい。最上階まで数分掛りますから」

言われて、適当に腰をおろす。

「では、出発します」

厳かに彼は言い、扉が閉まる。私、一人だけになる。

扉が開くと、階下と同じ制服を着た男性が控えていた。

「ようこそ」

階に招き入れられる。

落ち着いたベージュの壁。床には毛足の長そうな赤い絨毯。照明は明るすぎず、暗すぎない。ゴージャスを絵に描いたような感じ。私には一生縁の無い場所——に今いるわけだけども。

「こちらへ」

促されて歩を進める。

側面には大きな花瓶に生けられた花が点々と。華やかだが主張しすぎることもなく、かといって個性が無いわけでもない。まさに完璧。プロの仕事。

普段着で来なくて良かった。祖母の墓参りへ行った帰りなので、たまたま礼服を着ていたのが幸いした。高いと愚痴りながら購入したシンプルなワンピースだ。

「どうぞ」

壁を切り取ったかのように、突然現れた重そうな木製のドア。彼はそれに手を掛

け、私は中へと身を滑らせる。

それまでの静寂が嘘だったかのように、店内に満ちているのは明るいムードのクラシックと、人々の談笑。

「ようこそ、お客様」

きつちりと黒いスーツを着込んだウェイターに声を掛けられる。

……桁が違う。一つ二つ、なんて生易しいものじゃない。今、ここにいる私は何かの間違いでは無かろうか。

なんと答えればいいものやらまともな文章は浮かばず、メモを見せる。

「お席はこちらになっております」

プロらしくスマートに仕事をこなす。動揺する私を丁寧なフォローしながら。

それに気付きはするものの、不安は高まるばかり。おばあちゃん、何を考えてこんな高級店での食事を用意したんだろ？

通された先には、七十代くらいの欧米系の男性が座していた。シルバーグレイの髪を丁寧になでつけ、瞳の色と同じ鮮やかなブルーのセーターが良く似合っている。

おじいちゃんより、紳士と呼ぶべきだろう。絶対。

「……ハル……」

驚愕に見開かれた瞳。

「祖母の知り合いの方ですか？」

私の言葉に、おかしそうに苦笑する。

「お孫さんか……そうだね、いや、なんともおかしなものだ」

一人で笑い、片手を挙げてウエイターを呼び寄せる。

「好きな物を頼みなさい」

「あの、」

祖母の手紙を見せる。そこには紳士の事など書かれていない。

「あなたは誰ですか？」

紳士はまじまじとその手紙を見つめ、懐から同じような便箋を取り出す。

『もうすぐ、あなたに一番近い場所へ行きます』

「ハルは遅れてくるのかね？」

自分の台詞に違和感を覚えたようで、さっと顔をこわばらせる。

「そうか……これはそう言う意味か」

肩を大きく落とす。

外人さんは身振りが大げさでわかりやすい。そんなことを感心しつつ、

「あの、あなたと祖母はどのようなご関係なんですか？」

「私は……いや、無粋な事は語らないでおこう。それがハルのやり方だからね」

いたずらめいた瞳でウインク。それがまた似合っている。そして、この紳士は祖母のことを良く知った人だ。粹か無粋か——祖母の生き方、価値基準はそこにあった。

「ハルはそこにいるんだ」

窓の外に視線を向ける。私達のいるテーブルから三メートル程のところに大きな窓がある。いや、壁面と言うべきか。ガラスの外に広がる絶景。

青一色の世界。

薄い青、濃い蒼が見事な層で折り重なり、白い雲が彩りをそえる。

「ハルと君と私と、」

私は紳士の横顔を見る。

「二人での食事も素敵だね。それに、君はバーズデーだし」
瞳には既に陰りは無い。

コース料理なんて物を始めて口にした。崩すのが惜しいほど綺麗に盛り付けられ、しかも頬が落ちそうなほど美味しい。

食後に登場したザッハトルテには、ホワイトチョコプレートで『Happy Barsday』と書かれ、ロウソクが一本立っていた。高い店はサービスが違う。

さてその後。私は名も知れない紳士と年に一回食事をしている。日時は一番最初

と同じ。場所も同じ。私は彼の名前を知らないし、彼もまた同じだろう。

あれから七回目の私の誕生日。彼の席に座っていたのは、穏やかなこげ茶の髪をした男性だった。

「あの、あなたは？」

戸惑う私に、彼もまた同じような表情で懐から一枚の手紙を出す。

『私からの最後の頼み

彼女の誕生日を祝うこと』

「先日、祖父からこの手紙を受け取ったのですが……あなたは？」

目は紳士と同じ澄んだ青色。

「自己紹介なんて無粋な事は止めませんか？ こんなに空が青いんですから」
あの日と同じように、外を見つめる。

一番最初、紳士に会った時と同じ空がそこには広がっている。
空の高みは限りなく深い蒼。

地平線の近くは、限りなく白い青。

混ざり合い、溶け合いながら、蒼から青へ。

「……無粋、ですか」

彼は苦笑し、

「あなたは祖父を知っているらしい。今はただ、名も知らぬあなたの誕生日をお祝い
しましよう」

その後、私と彼の間の物語は語るまい。数年後にもう一人、誕生日会のメンバーが
増えた事だけをお伝えして。

あなたの好きな人

プロローグ

夕日が沈んでゆく。世界を黄昏色に染めあげ、名残惜しそうに、光を雲に投げかけながら、ゆっくり、確実に。

この町で一番大きな川の河原。一級河川ではないけれど、両岸は整備され、芝生と歩道用のタイルが張られている。所々にベンチ。先ほどまであった犬の散歩をする人や、ジョギングする人たちの影はすでに無い。取り残されたような、二つの人影。

染め上げられた赤銅色の川面に少年——大介はどこから見つけてきたのか、足元に石山を築いている。一つ手にとり、思い切り川へ——。水面に三つの円を描き、石は川底に沈んでゆく。

「今度は良く飛んだじゃん」

ベンチに座り込み、ぼんやりした表情の女子高生——絵里。

「さつきより少ないよ」

大介は絵里の顔を見ることなく、すねた口調。

「そうだったっけ？」

いつもならばまだみんなで遊んでいる時間だったが、今日は週に一度の塾の日。みんなは塾に行ってしまった。だから、塾に通っていない大介は絵里を独占でき、とても嬉しかった。

けれど。最初は二人で遊んでいたのだけれど、何をやっても二人だけだと面白くな

い。絵里は飽きてしまったのか、座り込んで動かない。時折大介に茶々を入れるものの、立ち上がる様子はない。だから大介も一人で遊んでいるしかない。

大介は石を拾ってまた投げる。

強く投げすぎたのだろう。石は大きな波紋を一つ作るとそのまま沈んでしまった。

「ストライク」

「違っつて」

足元の石に手を伸ばしたところで、母・久子の声が響く。

「大介、ご飯よ。帰ってらっしゃい」

「わかったー！」

ベンチに座り込んだ絵里を見る。沈んでゆく夕日を見つめたまま、大介に目もくれない。

歩き出した大介だったが、

「絵里ちゃんはいつ帰るの？」

不安になって振り向く。このまま夕日とともにいなくなってしまうような気がして。

「もうちよつとしたら」

絵里は夕日を見つめたまま。

「もうちよつとつてどのくらい？」

「大介、ご飯だって言ってるでしょ！」

久子の声が近づいてくる。大介は慌ててリュックから目覚まし時計を取り出す。

「これ、あげる」

ベンチの端に置き、駆けてゆく。

青い縁の目覚まし時計。今日こそは久子が呼びに来る前に帰ろうと、腕時計を持っていない大介はリュックにいれて来たのだ。

水音にかき消されそうな小ささだが、正確に時を刻む音。大介の気配が消えると、絵里はそつと振り向き時計を手にとった。

一・

「月日が経つのは早いもんね」

母が帰ってくる、急に家の中は慌しい空気が変わる。回覧版を持つていっただけの母・久子が出かけて、ゆうに一時間は経過している。声に嬉しそうな気配があるから、いつもの井戸端会議で花を咲かせていたらしい。

「私も歳をとったもんだわ、嫌になる」

お茶とおせんべを手早く用意し、ソファに腰掛ける。チャンネルを替えながら、誰に言い聞かせている風でも無いのに、井戸端会議で仕入れたニュースを披露する。

母がいないことを良いことにリビングのソファに深々と腰を掛け、テレビをつければ

なしにしたまま、雑誌を広げていた大介は自室へ引き上げようかどうか迷いながら、適当に相槌を打っていたが、

「今、何て？」

いつもなら完全に聞き流してしまうところだったが、聞きなれた名前に反応し、顔を上げた。

「草上さんちの絵里ちゃん。もう二九歳ですって」

「へー」

当然の事と言えば当然。絵里は大介より六歳上なのだ。わかつてはいても、他人の口から聞くと妙な焦りを覚える。

「早くいい人見つかればいいのにねえ」

「あんな男女、一生無理だろ」

無関心を装って、再び雑誌に目を落とす。

大介が小さな頃、絵里は遊び仲間の一人だった。小学生に混じって、当時女子高生だったはずの絵里は探検ごっこや昆虫採集に参加していた。

だが、大介が小学六年になる頃、彼女は遊ぼうとしなくなつた。受験勉強をしている、と聞いたのは誰からだったか。当時は意味がわからず、ただただ彼女がなぜ突然勉強などやり始めたのかに戸惑いを覚えたものだ。仲間内で一番木登りが上手く、昆虫採集もお手の物。草木、虫の名前にも詳しい、絵里はそんなヤツだった。

「あら、そんなことないわよ。絵里ちゃん、今度お見合いするんですって。話がまとまればあつという間よ」

我がことのように嬉しそうな母の声。頷きかけた大介は顔色を変え、引きつった表情を隠せないまま、

「み、見合い？ 絵里が？」

「お見合い写真見せてもらったけど、なかなかの男前だったわよ」

母は相手の男の特徴、職業、趣味などをあげつらう。

「——こんな条件のいい相手、今時いないんじゃない？」

「絵里は、なんて？」

大介は平常を装い尋ねる。煎餅とテレビに夢中な久子は息子の様子に気づかず、器用に言葉を返す。

「喜んでるんじゃない？」

「……」

「ちよつと大介？」

不意に部屋を出て行く息子に声をかける。

「どこいくの？」

「部屋」

「夕飯には降りて来なさいよ」

男の子は成長すると何を考えてるんだかわからない。久子はそんな事を思いつつ、時計に目をやり、洗濯物をしまわなきゃと立ち上がった。

大介は自分の部屋に引き上げ、パソコンの電源を入れる。

パソコンデスクの背後には天井まで届く本の背表紙の壁。部屋には机とベット、大きな本棚が押し込まれ余分なスペースは無い。けれど、本は増えつづけている。

下で読んでいた雑誌をもう一度開いてみるが、読む気にはならない。目を上げると、まだ起動中の画面。表示速度は遅い。いつも以上にイライラする。三年前にアルバイトしつつ一年ローンで買ったパソコンだから、仕方ない。

ようやくデスクトップが表示され、続いてメッセンジャーが起動する。

マックス：こんにちは。今日は早いね

彼女は偶然画面の前にいたらしい。彼女を示す画像は、いつもながらにふてくされた顔の犬。絵里の家で以前飼っていたブルテリアのマックスだ。

ds：こんにちは

マックス：この間言ってた本、面白かったよ

ds：良かった

ds：でも、良く見つけたね。あの本、なかなか手に入らないと思うんだけど
マックス：友達に貸してもらった

絵里に本を勧めたのは大介。そして、貸したのも大介。絵里は「ds」の正体に気づいていない。

大介がメッセンジャーを始めたのは二年ほど前。話し相手を探し、相手の公開プロフィールを見ていた時、偶然、見知った犬の写真が目に入った。チャットしてみて、それが絵里であるとすぐにわかった。

最初はすぐに正体をばらす予定だった。けれど、なんとなく、ずるずると正体を隠したまま大介は絵里とチャット友達になってしまっている。

マックス：他にもオススメある？

ds：あるけど……手に入りにくい

マックス：教えて！

マックス：探すから

タイトルを三、三列挙する。どれも絶版か、廃盤で入手困難な物ばかり。しばらく絵里の書込みは無く、時間が過ぎる。

マックス：本当だ、無いね

マックス：あつても取り寄せ……

ネット上の本屋で検索をかけたのだろう。いつもながらに行動が素早い。

ds：友達に当つてみたら？

マックス：そうだね。そうする

マックス：持つててくれると良いな

絵里が『友達』に寄せる信頼。自分自身の事なのに、何故だか大介は腹立たしい。今すぐ、全てを暴露してしまおうか？ ダメだ。そんな事できない。

マックス：ds？

マックス：いない？ ds？

しばらく返事を返さないでいると、絵里が呼びかけていた。

ds：ごめん

マックス：忙しいの？

ds：いや、別に

マックス：忙しいんだつたら落ちるよ？

ds：大丈夫

ds：ちよつと話あるんだけど、いい？

マックス：いいよ、何？

絵里は面倒見が良い。人の相談にはすぐ乗ってくる。

片想いの相手がいる、と絵里には言っている。去年のクリスマス。勇気を振り絞り、でも絵里が混乱しない程度にゆつくり、自分の正体を匂わせつつ、自分の好きな相手は幼馴染で、年上で……語ってみたのだけれど、言葉が遠まわし過ぎたのか、絵里はそれが自分のことだと気づかなかつた。今では良き相談役となってくれている。哀しいやら、嬉しいやら。

ds：彼女結婚するかも

マックス：え？ 告白しようかって言つてた相手？

マックス：ds結婚するの？

ds：そう

ds：違う。結婚するのは彼女

マックス：彼女が誰かと結婚するつて事？ 告白したの？

ds：そう。告白はまだ

マックス：まだ告白してないの？ 早く言ったほうが良いよ

出来ればしてる。

どんなに時が経とうと絵里との年齢差は縮まない。絵里は常に年上で、自分は常に年下。その関係も変わらない。

自分はまだ若い。比べ、絵里は二九歳。自分が告白して、良い答えが返ってくる率は低い。その上、良い答えが返ってくるとしたら即結婚を迫ってくる可能性は限りなく高い。好きだけど結婚は早いと思う。だから言えない。

どうすれば良いか。どうすれば最善なのか。

このところ、頭の中をフル回転させている問題は、当人には重大でも、他人にはたいした事の無い話なのだろう。アドバイスはやたら「告白しろ」しかない。

マックス：男は当って砕ける

ds：わかってるけど、いざとなると言えない

ds：ストレートな方が好き？

マックス：告白はストレートな方が成功率高いと思うよ

マックス：って、もしかして私に聞いている？

ds：そう

マックス：時と場合によるかな。あと、相手

相手。相手による……大介は頭を抱える。何度頭の中でシミュレーションしてみても答えはでてこない。

マックス：彼女、結婚するって誰と？

ds：結婚と言うか、見合い

マックス：じゃ、まだわからないじゃない？

ds：いや、こっちの分が悪過ぎ

マックス：彼女が見合い相手を気に入ってるの？

わからない。どうなんだろう？ 好条件だと母は言っていた。そして、

「喜んでるんじゃない？ ……喜んでる……喜んで……」

母の声が脳内に響く。絵里は、昔の絵里ならばそんな事はありえないと言いきれるけれど、現在の、三十歳目の絵里はどうなのだろう？ 見合いをするって事はやはり結婚願望があるって事で……。

ds：条件良ければ結婚するよな、見合いだし

マックス：いや、相手と会って見なければわからないでしょ？

ds：マックスはどうする？

マックス：どうって？

ds：見合い相手が好条件で、特に相手もないとき

「晩御飯出来たわよ〜！」

母の声が家中に響き渡る。

「わかった！」

早く食卓へ向かわなければいけない。マックスはまだ応答のメッセージを入力していない。じりじりとした焦り。

「大介、早く降りていらっしやい！」

「わかったって！」

「ダイスケ〜♪」

母が歌い出した。一歩ずつ、踏みしめるように階段を上ってくる音が聞こえる。

夕食は全員そろってが唯一の家訓だから、守れない場合はかなり強制的だ。

ds：ごめん、落ちる

挨拶もそこそこにパソコンの電源を切る。

「夕飯出来たって母さん言ってるのよ〜♪ 聞こえないの〜♪」

「わかってるって」

大介が部屋のドアを開ければ、そこには母の姿。

「まったく、呼んだらさっさと来なさい。何してたんだか知らないけど」

「わかったって言っただろ？」

「聞こえませんか♪」

「自分が歌ってるからだろ」

見せ付けるようにため息をつくが、母には効果が無い。

一一・

「あ、」

草上絵里は思わず声を上げた。パソコンの画面には相手の不在を告げるメッセージ。

「ds落ちたか……」

軽い落胆と共にメッセージを閉じ、メールの確認を行う。たまたまメールチェックをしようとしていたところにdsがやってきたのだ。

絵里がネットを始めたのは大学生の頃。進学した大学は他県にあり、一人暮らしを始めた絵里にとって、友達はいほど良かったからだ。

その頃は趣味の合う人とチャットやメールのやり取りをしていたのだが、大学卒業

と共に離れ離れになった友人とやり取りをするだけになってしまった。仕事でパソコンを使っているのに、家に帰ってからパソコンに向き合う気にはなれなくて。

メッセージを始めたのは数年前、友人に勧められてだ。d.sと知り合ったのはその後、二二年くらいになるだろうか。彼の方から突然、絵里に話し掛けてきたのだ。最初は戸惑っていた絵里だったが、相手がただ犬好きで、自分と趣味の話以外しようにしない事がわかると、友達以上に彼との会話が楽しくなっていた。

そして、冬くらいから彼の恋の相談を受けている。d.sが好きなのは幼馴染の年上女性。彼は告白することが不安らしく、まだ出来ないと言う。

d.sがどこの誰だか絵里は知らない。わかっているのは、彼とは趣味が合い、話が合い、片想いの彼女がいるってこと。

そして、その彼女は今度、自分と同じように見合いをするらしい。彼の気持ちなど知らないまま。

『条件良ければ結婚するよな、見合いだし』

彼の言葉が頭に引つかかる。まるで自分の事を言われているみたいで。

「いい人が見つかるまでのんびり探せば良いのよ」

「運命の人が早く見つければいいわね」

「今は晩婚が流行りついているのかしら？ だから大丈夫よ」

そんな決り文句を聞きはじめたのはいつからだっただか。何度も聞いているうち、現
状で満足しているはずの絵里も三十歳目前に焦らなければならぬような気にな
る。

結婚願望がないわけじゃないけれど、今すぐ結婚したいわけでもなく、相手もいな
い。それに「いい人」なんでものが道端にころころ転がっているわけでもなく、店先でワ
ゴンセールをやっているわけでもない。どこでどう見つけなければいい物やら絵里には皆目
検討がつかない。

「お見合い結婚か」

声を出してみても、おかしくなる。自分が結婚して、子供を育ててるなんて未来図が
思い描けない。

両親に言わせればいつまでも子供っぽいせいなのかも知れないが……お見合いは、
結婚を前提としてお付き合いする相手を選ぶのだ。相手は真剣、だからこちらも真
剣に。自分に言い聞かせてはみるものの、やはりどこか滑稽さを感じずにはいられな
い。

『マックスはどうする？ 見合い相手が好条件で、特に相手もいないとき』

dsの言葉が頭の中に響く。

「そりゃ結婚すると思うわ」

なんて簡単に返せなかった。自分が今、その立場にあるから。

『どうする?』

どうすれば良いんだろう。条件が良いから結婚する? 付き合っているうち、相手を好きになる?

母に言われ、品書きは穴が開くほど目を通した。それは相手も同じだろう。相手のデータは持っているが、肝心の本人には会った事が無い。いや、明後日には国際ホテルで会食をする事になっている。

手元にある見合い写真を開く。写真の中の相手はお見合い用の妙に優しげな笑みを浮かべ微笑んでいる。

奇妙な事だ、と絵里は思う。相手のデータは知っているのに会った事が無い。会った事の無い相手に向かつて、こうやって好意的な笑みを浮かべているのだから。

「この人と結婚するの? 私」

何だか妙だ。妙な具合だ。そう思うとクスクスと笑えてくる。

「何笑ってんの、絵里」

母が奇妙な顔で部屋の中を覗き込む。

「何?」

「夕飯、手伝って」

「はいはい」

パソコンの電源を切る。

三：

「あ、篠田君」

バス停の前に佇んでいるスーツ姿の人影に絵里は元気良く手を振る。篠田大介は絵里の姿を見とめはするものの、はにかんだような笑みを一瞬浮かべるだけですぐ硬い表情に戻る。

「おはよう！」

「……はよ」

通勤時間のバスは込み合うから、絵里は早起きして一つ前のバスに乗ることになっている。大介も同じ考えのようで、良く一緒のバスに乗り込む事になる。

絵里がやってきて数秒し、バスが滑り込んできた。今日もぎりぎり間に合った。絵里は胸をなでおろし、大介に近い席に陣取る。

「あのさ、篠田君。またまたで悪いんだけど小説貸してくれない？」

「何？」

大介はいつもながらにぶつきらぼうだ。けれど、大人びた仕草をしようと努力して

いることが伺え、小学校に入る前から知っている身としては成長したなあと感慨深い。近所の子供達の中で誰よりも絵里を慕っていたのが大介だった。常に絵里の後を歩いて歩き、絵里が何かするたびにキラキラしたまなざしを向けていた大介。絵里が大学へ進学し、一人暮らしをしている間に大介は変わってしまった。

見下ろしていたはずの絵里が逆に見下ろされ、どちらかと言うと可愛らしい容貌をしていたのに、すっかり男らしくなってしまった。かわいらしい声で「絵里ちゃん」と呼んでいたのに、生意気にも「絵里」と低い声で呼びはじめた。成長したというべきなのだろうが、昔を知る絵里にとってそれはちよつと寂しい。

「えーと——」

鞆から手帳を取り出し、昨日書きとめた書名を見せる。大介はさつと目を通し、

「ああ、ある」

「じゃ、貸して」

「わかった」

ちらりと絵里の顔色をうかがう。

「何？ こないだみたいにアイス奢って欲しいの？」

「いや、」

「好きでしょ？ チョコミント」

「好きだけど……」

何故かすねたような口調。

「何？。パフエ？」

「違う」

「じゃ何？ ケーキセット？」

大介は昔から甘党だ。

「違うって。もういい」

「いいって何よ、お姉さんに言ってみなさい。こっちは社会人なんだからね」

言つてから、ふと気づく。大介も今年から社会人だった。

「いいって」

「良くないわよ」

年上としての体面つてもものがある。一度言った言葉をそうやすやすと引っ込めるわけにもいかない。

終点の駅前に到着する。ぞろぞろと、他の乗客に続いてバスを降りる。その波に流されるように二人は駅へと向かう。

改札を抜けたところで絵里が大介を呼び止める。

「あ、そうだ。今日の六時に駅前の広場で待つてるから」

「え？」

「夕食奢つてあげるわ。高くないのを」

「本当にいいんだけど」

「待つてるからね」

一方的に宣言し、絵里は二番ホームに向かう。

四・

絵里の姿を見送った大介の頭は半分。ニック状態だった。

まさか夕食に誘われるとは思ってもいなかった。絵里が奢るといふのがちよつと難点だが……。

今朝、大介は告白しようと思っていたのだ。時と場所を選ぶべきだというのはわかっているが、時間がない。それに彼女と会うのは朝しかない。彼女の顔を見るため、彼女と会話するために早起きしているのだ。お見合いがいつなのか知らないが、とにかく日数が無い。

『男なら当って砕ける』

覚悟を決め、いつも以上に早起きしてバス停で絵里を待っていたのに、絵里はギリギリにやってきた。バスの中でもいつもながらに絵里が一方的に話していたため、何も言う事が出来なかった。どうしようかと思っていた大介だったが、絵里の方から誘ってくれるとは思わなかった。

二人で夕食つてどこで？ 何を？

期待と不安の波が交互に大介を襲う。

高くないところ……ファミレスはダメだ。蕎麦屋、うどん屋も却下。居酒屋はもちろんだめだろう。じゃあどこで？

ああ、まるでデートみたいだな。スーツ良いやつ着てくれば良かった。二日前と同じスーツだし、これ。着替えに戻るか？ いや、それは不自然か。でもちよつとばかりこれは……。

大介が乗る電車がまもなく到着すると言うアナウンスで、不意に我に返る。電車が入ってくるのは一番向こうのホームなのだ。急いでも間に合わない。一本電車を遅らせるしかない。

こんな状態で仕事出来るのか、俺？ でも仕事休めないしな……。大介は頭を抱えつつホームへ向かった。

五.

「ごめん、待った？」

絵里は遅れてやつてきた。十七分の遅刻だ。待っている間、大介の心臓は緊張と不安で止まりそうだった。

朝と同じ薄い水色のスカートにフリルのついた白のブラウス。ジャケットはブラウスと同じ白。アクセサリーはシンプル。化粧はあくまでナチュラル。朝と違うのは髪をアップにまとめていること。いわゆるきれいなお姉さん、だ。全体的に清潔感があり、清涼感があり、何より良く似合っている。自分のこの格好はつりあいが取れているのだろうか。悩む大介のことなど絵里は気づきもせず、

「どこ行く？ ファミレス？ 居酒屋？」

チエーン展開している店の名前を数店あげる。

「いや、えっと——」

昼休みを半分つぶして探した店の名前を告げる。南欧風家庭料理を食べさせてくれるという、写真で見ると限りこじやれた雰囲気のお店だ。赤レンガに深い緑色のツタの概観。内部は黒い木製テーブルに、ランプの落ち着いた灯り。カントリー風の手作り雑貨が壁を彩り、家庭的な雰囲気醸し出す、欧風の田舎の一軒家。料理の値段もお手ごろとあったから、そう高くも無いだろう。

「どこそれ？」

「ここから歩いて五分くらい」

「へー知らなかった。彼女とデートで行ったの？」

「違う！」

思わず声が大きくなり、ギクリと大介は固まった。絵里は不自然な笑みで大介を

伺う。

「ええつと……ごめんね……」

触れてはいけない過去に触れたのだと言うような気遣いで、絵里が無難に天気の話を始め、大介はパニックしかかった頭で相槌だけを打つ。

相手を先導する道すがら、大介には拷問のような時間が流れた。

写真で見たよりも、建物は少々くたびれていて、大介は見逃して通り過ぎてしまい、絵里に指摘されてそれが目的地だったことを確認する。

「始めて？」

「……写真はもつと雰囲気良かった」

「雑誌でも見たの？ より良く写すのがプロつてもんよ」

絵里は笑つて店内に入る。

店内は写真よりも味のある——悪く言えば古びていた。田舎の一軒家というのは確かに。だが、その雰囲気はお洒落ではなく野暮っただけだ。

「なんか違う」

不満顔で呟く大介に絵里は笑みを漏らす。

「過度の期待は禁物よ、何事も」

黒いエプロンを羽織っただけのウェイトレスの案内で道に面した席に通され、二人はメニューを覗き込む。

「……こじゃれてるわね、味が想像出来ないわ」

メニューに並ぶ料理名は聞いた事の無いものばかり。材料や調理法が日本語で書かれてはいるものの、いまいち味の想像はつかない。

「とりあえず、『店長オススメ』っていうこれでいい？」

「こっちの『今日のオススメ』は？」

「じゃ、それもね。後は飲み物だけ——」

居酒屋顔負けのラインナップ。ワイン中心だが、チューハイやビールなども取り揃えられている。

「篠田君、飲む？」

「えーつと……」

呑みたいところだが、呑みすぎて羽目を外しかねない。しかもメッセンジャーにて聞くところによると、どうやら絵里はザルみたいだし、こちらが先につぶれる事は目に見えている。

「ウーロン茶」

「わかった」

絵里は通り掛かったウェイトレスを呼び止める。彼女は商売用の笑みを浮かべ、注文した料理名を復唱すると下がって行った。

「妙だよね」

絵里は頬杖をついて外を見やる。日が長いため、外はまだ明るい。商店街でも呑み屋街でも無いから、人通りは多くない。日本の、どこにでもありふれた路地。店の霽囲気とのギャップが酷い。

「何が？」

イライラと氷を噛み砕いていた大介が飲み下してから尋ね返す。

「何ていったらいいのか……すづくく久々じゃない？　こういう感じ」

「うん」

小学生の時以来、実に十数年ぶりになるか。あの頃は母が夕飯だと呼びに来るまで遊びまわっていた。いや、絵里と二人きりの時はただ時間をつぶしていただけの事が多かったか。

あの頃の絵里の家庭事情など子供だった大介にはわからなかったが、絵里がいつまでも家に帰ろうとしない事だけはわかつていた。

「篠田君の顔見ると、いっぱい話すことがあるような気がしてたんだけど、改めてこうしてみると話すこと無いんだよね」

しんみりと語る。大介は何も答えず、新たな氷を口に放り込む。

「あ、」

不意に、絵里はにつこりと微笑み、

「私、お見合いするのよ」

「知ってる」

「もしかしておばさん経由？」

「そう」

「なんだ、知ってるのか。つまらないなあ」

机に突っ伏す。絵里からその話を聞くとは思っていなかった大介は平静を装い尋ねる。

「相手、いい人だつて……」

絵里は視線をまた外へとむけ、

「そうなんだけど——」

はつきりしない返事を返す。

「だけど？」

「変なんだよね」

「変？」

「あ、でもすつごく良い人なのよ」

むつと大介は顔をしかめる。会つてもいない相手にどうしてそこまで言いきれるのだろう。

「私も結婚願望がないわけじゃないんだけど……いざとなると何だか妙な気がしてね」

変だ、妙だが並ぶ日だ。大介は腹立たしさを抑えつつ、相槌を打つ。

「妙って何が？」

「母さんは始めての事だから不安になつてただけなんじゃない、なんていうんだけど」

「うん」

「お見合い写真見ててね、本当に私、この人と結婚するのかなって考えちゃって」

ため息をつく。

条件が良いのに考え込むって事は、見た目――

「不細工なのか？」

「全然」

絵里は即座に否定する。

「男前よ。優しそうな感じ。いい人っぽいオーラが出てる」

オーラなど写真に写らないだろうに絵里は昔から妙なことを言う。

「すつごく条件いいの。私が見ても」

「へー」

腸が煮え練り返る。それが嫉妬だと気づき、大介はますます崖っぷちに立たされ

た気分になる。絵里に告白する以外、もう道は残っていない。でも……告白できない。

「あ、料理来た」

そこで会話を打ち切り、絵里は話題を変えた。

美味しいと絵里が何度も口にしていたから、味は良かったらしい。その後の会話も、味も大介の記憶に残っていないのだが。

六・

ds：こんばんわ

マックス：こんばんわ

家に帰りつき、大介がパソコンの電源を入れメールチェックを始めると、マックスがメッセンジャーにつないだと表示される。同じバスで帰ってきたからなのだろうが、妙に嬉しい。

マックス：告白したの？

ds：まだ

しようとはした。朝、覚悟も決めていた。でも出来なかった。タイピングが合わなかったのだ。言い訳かもしれないが。

マックス：早く告白しないと。相手お見合いするんでしょ？

マックス：あ、そうそう

マックス：「わからない」つてのが答え

ds：何？

マックス：昨日、私ならどうするって言ってたでしょ？

マックス：見合い相手の条件が良くて、恋人がいなくて結婚するかって

マックス：相手に会って見ないと、結婚するかどうかなんてわからないし、

マックス：相手が私を気に入ってくれるとも限らないからわからない

マックス：答えになつてない？

ds：いや、ありがとう

マックス：頑張りなよ。私、応援してるから

応援？……違う。自分が告白したいのは絵里なのに、絵里に励まされたんじゃ意味が無い。

ds：好きです

画面に表示された文字を見て、大介は慌てた。違う、絵里に直接告白しなければ意味が無い。

マックス：そうそう、そんな感じ。ストレートが効果的よ
マックス：あとはシユチュエーションね

絵里は告白の練習だと勘違いしたらしい。

ds：マックスはどう言う状況で告白されたら嬉しい？

マックス：……考えつかないなあ

ds：プレゼントとかした方が良いかな？

マックス：相手によりけりじゃない？

ds：何もなかったら嬉しい？

マックス：相手の好みさりげなく聞いてみたら？

マックス：あ、もう九時だね。私落ちるね

ds：バイバイ

マックス：頑張つてね、またね

大介はベットに仰向けになる。絵里にどう告白すれば良いか。
「大介、お風呂入っちゃいなさい。お湯が冷めちゃうわ」
母の声が響く。

「わかった」

答えて風呂へと向かう。とりあえず、対策はまた明日だ。今日は精神的に疲れた。

七.

大介はいつも通り会社に出社した。

今朝、絵里はバス停には来なかった。きっと寝過ぎたのだろう。三日に一度くらいはこういう日がある。待ち合わせしているわけじゃないから、文句を言うことも出来ない。

「おはようございます」

すでに入社している人に声をかけていると、妙な怒鳴り声が事務所奥から聞こえてきた。

「だから、無理だつてば——母さん、俺は仕事があるんだよ」

いつものごとく、部長の江藤修と副社長である母親の江藤静香がやりあっているらしい。しばらく言い争いは続いたが、盛大なため息の後、叩き付けるように電話はきられた。

タイミングを見計らい、大介は顔をのぞかせる。

「おはようございます。また、おうちからですか？」

この会社、重役はほとんど出社しない。実質的に会社を動かしているのは、三十歳過ぎの部長。若いながらも貫禄は十分ある。

「お、篠田か。ご苦労さん。まったく、こっちは仕事してるってのに突然言われても困るんだよな」

副社長への嫌味を言われても、平社員の大介には愛想笑いを返すしかない。

江藤は困りきった顔で頭をかきむしる。

「お、そうだ！」

江藤にとっては名案、周囲にとっては迷惑が閃いたらしい。そろりと逃げようとした大介だったが、すでに遅すぎた。

「篠田、俺のかわりに行って来てくれないか？」

「どこへですか？」

露骨に嫌な顔も出来ず、愛想笑いを浮かべたまま尋ねる。

「十時に国際ホテルのロビー。俺は出張だつて伝えてくれ」

「俺がですか？」

江藤の母親はとにかく押しが強く、誰もが苦手とするタイプ。

「もう時間がないな」

慌てた様子で江藤は事務所を後にする。手には大きなトランク。

「ついでに福社長の機嫌とついでにくれ、じゃあ頼んだぞ」

無理難題を押し付け、慌しく出て行く。

「ええつと——」

未練がましく部長に声を掛けようとする大介に、事務を一手に引き受けている古株の中野が声を掛ける。

「ほら、行った行った」

「中野さん、俺は——」

「部長命令」

「でも、」

「部長が仕事とつてこなきや何もやることないんだから、おとなしく行つて来なさい。これも仕事」

しぶしぶ大介は会社を出た。

静香という名前のわりに、方言混じりの大きな地声で副社長に罵倒されることをわかっていながら。

八・

「修は？」

相手の方が先に見つけてくれた。深い緑色の毛足の長い絨毯。高級そうな雰囲気

があたり一面に漂う国際ホテルのロビーは、平日の為か人が少なくない。探す手間は省けたが、死刑宣告が迫っているようで大介は落ち着かない。

副社長は何故だか和服姿。普段動きやすそうな洋装姿しか見かけないので、妙だということにこの時気づくべきだった。

挨拶もそこそこに、

「部長は出張です」

「嘘。会社は仕事のおて暇やるに」

福社長の口からは聞きたくない言葉。しかも、本人は嫌味だとはこれっぽっちも思っていない。

「そんな事ないですよ」

ぶすりと言い返す。

「ま、ええわ。で、修はいつ来るん？」

「出張なんですけど」

「はあ？」

「本当に今日から三日ほど出張なんです、部長」

副社長の笑みが消える。

「何でそれ早く言わんの！ 見合いはどうしたらええねん？」

「み、見合い？」

「相手さんにはなんて言うん？ もう私、泣けてくるわ」

本人の予定も考えずにお見合いを組み立てた方が悪いと思うのだが……何だかんだと理由を付けてお見合いをボイコットしている部長も悪いのか。

「あんた、一緒に謝ってくれる？」

どうしてそうなる？

「あ、江藤さん！」

灰色のスーツ姿のおばさんが現れる。

「湯沢さん……あの……」

副社長はしどろもどろ、何と説明しようかと大介を見やる。

「息子さんは？ こちらは……違いますよね？」

じろりと大介を見る。お見合いとなれば、仲介者だろうか。

「部長、出張なんです」

「は？」

「ええつと——」

副社長が言葉を搜していると、

「あら、相手さんが来られましたね……どうしましょうか」

尋ねられても大介には何も出来ない。

「あれ、篠田君？」

声に振り向いて見れば、若草色のツーピース姿の絵里と、着物を来た絵里の母・詩子の姿。

「あら、お知り合い？」

湯沢と呼ばれてたおばさんに耳打ちされ、大介は頷く。

地獄に仏とばかりの顔をする福社長。

「じゃ、あんたが説明しね」

「え？」

「あの、すみません」

福社長は打つて変わって丁寧な物腰で詩子に対峙する。

「修はちよつと急用ができて来られなくなつたつて、たつた今、この人から聞いた所なんですよ」

『たつた今』がやたら大きく聞こえたのは大介だけじゃあるまい。責任を押し付けられていることに気づき、大介は胃が痛くなってくる。

「申し訳ありませんが私どもは失礼させて頂きます。では」

「すみませんが私も失礼を——」

副社長に続いて湯沢さんもそそくさと逃げるように去っていく。残された篠田は啞然とした顔の絵里と母を残すわけにも行かず、

「あの、とりあえず座りましょう」

近くのクリーム色のソファを指差す。

「今回はすいません」

誰の為なのか知らないが、大介は二人に深深と頭を下げた。

「部長、出張だつて事をこの家族に伝えてなかつたようで……福社長は部長に相談なく見合いを段取りしたようで——」

「ま、彼女ならありえるわね」

詩子は簡単に納得する。助かつたと大介は胸をなでおろす。

「私ね、中学の同期なのよ、彼女とは」

江藤静香の性格はわかっているとばかり、詩子は話題を変える。強引だけれど、どこか憎めない人なのだ。

「それより大介君、せっかくだからお昼一緒に食べない？」

いえ、と断りかけた大介だったが、副社長の機嫌取りをしない為の良い口実になると思ひ直し、

「いいですよ」

「じゃ、行きましよ」

詩子先頭に、エレベーターに乗り込む。

「一度この展望レストランで食事してみたかったのよね」

ほくほく顔の詩子が指差すのは、このビルのテナント名がずらりと並んだ案内板の

一番上。名前からも高級そうな雰囲気か漂ってくる和風レストラン。

テレビや雑誌で見かけた事がある。和と洋の融合した新感覚のレストランだと。確か、お昼のランチでも二千円くらいはしたはず。給料日前の事もあり、ここでその出費は痛い。

そんな思いが顔に出ていたのか、

「心配しなくても大丈夫よ、おばさん奢ってあげるから」

「いや、でも——」

「備えあれば憂い無し」

と、懐から茶封筒を取り出す。

「ヘソクリは有意義に使わないとね」

「お母さんいつの間……」

絵里は目を大きく見開く。自分の親がヘソクリしているとは思ってもみなかったのだろう。

「でも——」

「若い子がぐだぐだ言わないの。おばさんが奢るって言うてるんだからそれで良いじゃないの」

昨夜の絵里に続き、詩子にまでご馳走してもらうのは気が引ける。だが、断るのも失礼に当るだろう。

「じゃ、ご馳走になります。すいません」

「ええ、たつぷり食べてね。軍資金はあるんだし」

九。

「大介君みたいな息子、いてもいいわね」

帰り道のタクシーで、母・詩子はポツリと漏らした。

「作れば良かったじゃない」

意味を理解しない娘に、どうしてこういうところに疎いのかしらこの子は……なんて思いつつ、

「子供は神様からの授かりものよ」

絵里の幼い頃を思い出す。

生まれてしばらくは死にそうなくらい元気がない子だった。小学校にあがっても、背の順で並べは一番前。しかも病気で休みがち。だから友達にも学校にも馴染めず、勉強も出来ず、朝になったら調子が悪くなる。悪循環の連鎖。繰り返し。

この子の将来は絶望的ではないだろうか。そう思い込み、ノイローゼ状態だったあの頃。夫は単身赴任中、相談相手もおらず、ただただ、毎日が地獄だった。

そんな絵里が変わったのは公園で小さな子供達と遊び始めてから。絵里よりもず

いぶん小さく見えた彼らだったが、数年で絵里の肩まで追いついた。子供の成長は早い。そして時が経つのも。

「今になってみるとあつという間だったわね」

「何が？」

「娘が嫁に行く歳だったこと」

本当ならば孫がいてもおかしくないのだが……欲を言っていないのは切りがない。

絵里と将来こんな会話ができるだなんて予想だにしていなかったのだから。むしろ、あの頃はかたくなに未来などないと信じ込んでいた。

「大介君とどうなの？」

食事中の大介の様子を見る限り、絵里のことが好きらしい。そんな気持ちを隠そうと一生懸命なぶん、絵里に合わせようと大人ぶった態度をとろうと努力しているぶん、可愛らしい。

周囲にはわかりやすすぎるくらいの大介の想いなのだが、どうやら絵里は何も気づいていない様子。大介君が気の毒で応援したくなる。

「どうって？」

何を言いたいのかわからないといった表情で絵里は尋ね返す。恋愛に疎いから、婚期を逃して来たのだろう。確実にそういうタイプだ。

「小さい頃仲良かったじゃない」

「ああ、朝、バス停で話するよ」

「それだけ？」

「あと、小説借りたり——」

「他には？」

我が娘ながら、大介君、厄介なのに惚れたものだと同情する。

「他つて？」

「デートとか」

「あのね、こっちは七つも歳が上なのよ。付き合ったりなんて——」

遺憾だとばかり声を上げた絵里だったが、

「そういえば昨日、大介とご飯食べたよ」

「そうなの？」

「いつも小説借りて悪いから、奢ったのよ」

だから今日、奢るっていうと遠慮していたのか。

何かを思い出したらしく、絵里がにやりと笑う。

「私はファミレスか居酒屋でいいかと思つてただけど——」

にやつきは強くなる。

「大介、雑誌で見た店が良いつて。でね、探してたどりついたんだけど、『なんか違う』つてむくれてんの。こじやれた感じの、結構雰囲気の良いところだったんだけどね」

その時の様子を思い出したのだろう。絵里はケラケラ笑う。大介君、本当にごめんなさい。惚れる相手は本当に絵里で良かったの？

「大介君、絵里のこと好きなんじゃない？」

直接的に言ってみる。絵里はきよんととしていたが、やがて大きな笑い声と共に、
「それはないよ、絶対」

「そうかしら。でも、今、年上女房つて流行りじゃない？」

「母さん、良く考えてよ。私は三十路前、あの子は二十二歳よ」

大介は早生まれだから学年よりも一つ、年下になる。

「そんなに気にするほどの歳の差？」

「いい加減にして」

「母さんの感、外れてないと思うけど」

「今回は外れてるわよ。きつちり、かつちり」

家に帰りつく。タクシーから降りた絵里は、家ではない方向に歩き出す。

「どこ行くの？」

「ちよつと散歩」

若草色のツーピースを来たまま絵里は歩き始めた。これ以上母の話に付き合つてはられないとばかりに。

平日の昼過ぎ。近所に人気はない。母からあんな話を聞いたからか、懐かしい場所を求めて足は動く。

公園、河原を過ぎた辺りで靴擦れを起こしたのだろう。履きなれない靴で散歩はまずかった。

家へと足を向ける。家から数十メートルまで帰って来たときだった。前方からやってくるのは――。

「篠田君」

大介は慌てた様子で逃げようとする。

「ちよつと待って――」

呼び止めれば観念した様子で立ち止まる。

「靴ずれしたみたいなの。悪いけど、肩、貸してくれると嬉しいんだけど」

「……わかった」

ようよう家までたどり着く。ストッキングの上からもわかる赤く腫れ上がった跡が痛々しい。道すがら、大介もずいぶん心配してくれていた。

「ありがと。助かったわ」

玄関を開けかけた絵里に、大介は口を切る。

「あのさ、」

「何？」

「俺のイニシャル知ってる？」

「イニシャル？ 篠田大介だから——SD？」

「普通は反対だろ？」

「そっか。じゃ、DSか——……ds？」

なぜそんな事を言い出すのか、なんて疑問は衝撃に打ち消された。

「好きです。付き合ってください」

「……え？」

大介は絵里が見た事のない真剣な顔をしている。決意に満ちた瞳の大介。数秒が流れ、絵里が何も言えないしていると逃げるように駆けて行く。

「え？ ええつと……え？」

「馬鹿娘」

事態を把握できず戸惑う絵里に、玄関から顔を出した詩子が呆れ顔で呟く。

「お、お母さん」

狼狽のあまり泣きそうな顔の絵里。

「母さんが言った通りだったでしょ」

「い、いつからそこに？」

詩子は絵里が帰ってくるのが遅いので迎えに出ようとしたところ、肩を組むようにして歩く二人を目撃し、玄関で待機していたのだ。大介に「おめでとう」を言おうと思つて。だが、扉一枚隔てた所で展開された出来事に詩子も驚いていた。

「そんなことより、どうするの？」

野次馬根性で尋ねる。

「何が？」

「わかつてる癖に」

「……」

「どうするの？」

「……どうしたら……いい？」

「まずは家に入りなさい。ハーブティー入れてあげるから着替えてらっしゃい」

十一.

絵里は部屋着に着替え、リビングルームのソファに座り込む。キッチンからは気分を落ち着かせるハーブティーの良い香りが漂ってくる。

「大介君の事、どう思つてるの？」

カップにつきわけながら、詩子は尋ねる。

「どうつて……わからない」

「はい、熱いわよ」

カップに注いだハーブティーを渡す。冷ましながら、絵里は一口啜る。

「ただの友達？」

戸惑いながらも頷く。

「でも、告白されてわからなくなつた？」

同じように頷く。

「年上女房も悪くないと思うけど？」

「でも、あの子若いのよ。ただの憧れかもしれないし、一時の気の迷いかもしれない」

「大介君の気持ちも否定するわけ？」

「そんなわけじゃ——」

「そうなるでしょ？ 今の言葉だと」

答えようもなく、絵里はハーブティーを啜る。

「もつと簡単に考えてみたら？」

詩子はハーブティーを啜り、自分のいれたお茶に満足げな息をつく。

「でも——」

絵里は小さな声を上げる。

簡単に考えられないのは、絵里の優しさだろうか。それとも本人が気づいていない

大介への想いがあるのだろうか？

「嫁に行く気だけじゃなく、恋愛する気もないの？ 若い娘さん」

「もう若くなんてないわよ」

反論するところを見ると、気分は落ち着いてきたらしい。

詩子はくすりと笑う。

「母さんに比べれば十分若いでしょ」

「……ご馳走様」

答えは出ないまま、絵里は部屋へと帰る。

十二

部屋へ入ってすぐ、パソコンを立ち上げる。いつもの習慣は変えられない。メールチェックをし、目的もないままネットニュースに目を通す。

しばらくしてdsがネットにつないだと表示される。一瞬戸惑いはしたものの、いつも通りメッセージを送信する。

マックス：こんばんわ

返事は返ってこない。接続を切られるだろうか？

ds：こんばんわ

マックス：今日はありがとう

ds：別に

マックス：助かった

ds：うん

マックス：いろいろ考えた

『何て言ったら良いのかわからない』

入力した文字を消去する。

これじゃ逃げてる。

私を好きだと言う大介の気持ち。一時的なものかもしれないし、ただの迷いかもしれない。でも、本物。私が逃げちやダメだ。

でもどうして？ 答えてあげなきゃ可愛そうだから？
違う。

気の毒だから？

でもない。

ともかく、私の気持ちをはっきりさせよう。

大介の事、好き？

たぶん。どちらかと言うと好き。嫌いじゃない。

じゃあ、大介は私にとつて何？ ただの友達？

ちよつと違う。

親友？

近い……かも。

じゃあ、何？

……わからない。

大介の『好き』と私の『好き』とは全然違う。いつか、同じ『好き』つて気持ちになるなんてこと、あるだろうか？

ds：答えは？

絵里はゆっくり入力する。

……ここで逃げたとしたら、それは大介からじゃない。自分自身からだ。

マックス：好きだよ

ds：本当に？

マックス：大介の好きとは違うかもしれないけど

ds：あの、でも結婚はまだ

友達としての好きだと書き込んだほうが良かっただろうか。絵里は慌てて書き込む。

マックス：いや、全くそこまでは考えてないんだけど……

ds：え？

数秒の沈黙の後、大介は言葉を返す。

ds：とにかくめっちゃくちゃ嬉しい。言葉にならないくらい
マックス：うん

ぽつと火が心の中に火が灯る。大介が喜んでいる、その事が嬉しい。

マックス：あ、借りた小説、ちよつと読んだ。面白かった

ds：だろ？

今まで通りの会話。それがたまらなく嬉しい。

十三.

それから数週間後。

「絵里ちゃん、若い男の子と付き合ってるんですって！」

玄関を開けるなり、久子は目の前にいた息子に怒鳴りつける。買い物帰りに聞いたばかりの探れたてピチピチな新鮮ニュース。話さずにはいられない。

次男の大介は恐る恐ると言った様子で尋ね返す。

「誰に聞いたの？」

相変わらずノリが良くない。そんなことで社会人としてやっていけるのだろうか。

そう思いつつ、誰から聞いたか思い出そうと頭をひねる。

シヨッピングセンターでいろんな人といろんな話しをしたのだ。誰と話した時にでた話題だったか。

「誰だったかしら——ああ、絵里ちゃんと同僚の娘さんが、お隣の奥さんのパート先で一緒なのよ。そこで聞いたって言ってなかったかしら？」

明らかにホツと胸をなでおろす大介。

もしかして、絵里ちゃんに気がある？

ふいに頭に沸いた疑問を即座に否定する。それはありえない。相手は大介より六つ、いや七つも年上なのだ。

大介は妙なもので、数えで歳を言うからついつい間違えてしまう。

「そう言えば、あんた何してんの？」

掃除機を手に行っているから掃除をしていたのだろうけれど、大介は自分から進んで掃除をするようなタイプじゃない。散らかしはしないが、大雑把にしか片付けしない。息子二人で打ち止めるんじゃなく、もう一人女の子を産んどけば良かったとつくづく思う。

それにしても掃除機をかけるとなると、どこかを壊した？ 何かをひっくり返した？ 二十歳も越えたのだし、家の中でくらい大人しく出来ないのだろうか。

憂鬱のため息をはく。

後できちんと掃除しとかないと後後えらい事になる。勝手に無駄な家事労働を増やさないと欲しい。

久子の心配をよそに、大介はあきららかに動揺した声で、

「ちよつと……友達、来るから……」

なんとも嘘臭い。友達が来るからなんて理由で今まで掃除した事はない。とすると始めて来る子。しかも、男じゃないと見た。

久子にはにんまり笑う。

彼女だ。これは恋人に違いない。毎週末おしゃれして、いそいそと出かけていく様子から彼女が出来たのだろうとは思っていたが、彼女がうちにやってくるらしい。

「彼女？」

「……ええつと……」

「もう、そう言うことはあらかじめ言いなさいよ。母さん綺麗な格好してないし、お菓子も用意してないじゃない」

「そんなこと別にしなくても——」

「で、どんな娘なの？」

追求しようとした久子だったが、遮るように玄関が開き、

「こんにちは、回覧版です」

先ほど話題に上っていた絵里が顔をのぞかせる。

「あら、ありがと」

回覧版を受け取るが、絵里は帰ろうとはしない。

「どうしたの？」

「あの、大介君に本棚見せてもらう約束してたんで……」

ついでに回覧版を持ってきた、と絵里は心の中で付け足す。肝つ玉母さんのイメー
ジが強い久子のが苦手なのだ。

「あ、そう？」

大介の彼女が来ると思ったのに、相手は絵里ちゃんだったのか。張り切って掃除なんかしているから勘違いしてしまった。まったく。

「それより、絵里ちゃん。彼氏ってどんな人なの？」

「え？」

目を白黒させながら絵里は大介を見やる。

「同僚の人が見たって」

大介が言葉を補う。

「ああ、そういうこと……」

「そう言うことじゃなくて、彼氏は？」

「ええつと……」

アイコンタクトをとるかのようになり、二人は見つめ合う。妙な沈黙。その雰囲気には首をかしげる。

「あの、」

言葉を発したのは大介だった。

「付き合ってるんだ」

「誰と？」

指差す先には絵里。

たつぷり三十秒ほど二人の顔を見比べた久子は素っ頓狂な声を上げた。

「嘘お！」

「いや、本当」

「ごめんなさい、おばさん」

大介が罰の悪そうな顔をし、絵里が申し訳なさそうに謝る。

「いや、だって——」

反論しかけた久子だったが、次々と記憶の奥底から浮上してくる大介の妙な言動。絵里が好きなのだと思えば納得できるものがいくつもあり、やがて混乱は自己完結する。

「で、結婚はいつ？」

納得すれば次の一手は素早い。

「まだそこまでは……」

大介と絵里は顔を見合わせる。

「だって、絵里ちゃん二九歳よ？ 責任取らなきゃだめよ」

「あの、おばさん」

絵里が慌てる。

「あの、大介君まだ若いですし」

「絵里ちゃんは若くないでしょ」

「でも、他にいい人が現れるかも知れないし——」

「絵里、何言い出すんだよ」

大介が激昂する。

おお、久々にみる。

久子は内心ほくそえむ。妙に大人ぶって感情を表に出さない子だが、もともと小さい頃は泣き喚くのが趣味みたいな手の掛かる子だったのだ。

「ごめん、大介。でもね、大介若いんだし——」

大介の気持ちを一時のものだと考えているのならば完全なる間違い。いつから絵里に惚れていたのか本人もわかつてないだろうが、とにかく大介の人生の半分くらいは、ゆうに絵里を想い続けてきてるはず。

「いい加減にしろよ。俺は半端な気持ちで付き合ってるんじゃない」
「でもね、」

絵里の態度は煮え切らない。息子の何が不満だというのだろう。親の最良目じゃないが、悪い物件じゃないはずだ。

久子を完全に無視し、二人だけの世界で投げつけるような会話のキャッチボールが続く。

「あ、そっか」

久子はニヤリと笑う。不機嫌な顔の大介と、不安そうな顔の絵里が久子を見る。「三十歳を目の前にして絵里ちゃん不安なのよ。大介がいつ若くて綺麗な子に目が

「いっちゃん、自分が捨てられるかって」

「いや、その……」

ギョツとした所を見るとどうやら核心をついたらしい。周りから見れば本当に些細な事だけれど、年下の彼氏に不安になるのはわかる。

「わかった。じゃあ結婚しよう、絵里」

「ちよつと大介」

絵里が慌てる。『じゃあ』って何？ 顔に書かれた憤りの文句は大介には見えないらしい。

大介、完全なアホだ。どこの世界にこんな雰囲気のへつたくれもない玄関先で『じゃあ結婚しよう』なんて言う馬鹿がいるんだ。って目の前にいたよ。しかも私が生んで育ててるし。

「母さんに言われたからじゃないからな」

ただの言い訳にしか聞こえない。みつともない。

「あのね、大介。私の話聞いて？」

絵里のこめかみが引きつる。

「何？」

不機嫌の骨頂つて顔をした大介。両腕を組み、絵里を睨み付けている。プロポーズした男の様子じゃない。

「私ね、結婚しない」

「は？」

「ゆつくり付き合おう？」

絵里ちゃん、ここまできて優等生のお姉ちゃんをやる必要性はないんだけど。

久子は考え込む。

絵里は三十路前。結婚を焦っているはずなのに、結婚を渋るとはどんな理由があるというのだ？

「——もしかして、料理下手なの？」

「絵里の料理は上手いよ」

大介が自慢げに言う。惚気ですか、ご馳走様。

「レパートリー少ないとか」

「品数は母さんより圧倒的に多い」

「そうなの？ って何であんた知ってるの？」

ギクリと大介は絵里を見やる。

毎週末にデートしてるとはいえ、絵里ちゃんの手料理を食べている回数がそんなに多くあるとは思えない。

いや、前から疑問に思っていたことがある。

「大介、あんた朝食と昼食いつもどうしてるの？ 駅前のファーストフードで食べて

るってわりに、お金使つてる様子ないけれど？」

大介は助けを求めるように絵里を見つめ、居たたまれなくなった絵里は白状する。
「あの、うちで——」

以前よりも早起きするようになったと思えば、草上さんちで朝食を食べ、昼食の弁当を作ってもらっていたとは——完全に養ってもらつてる状態。結婚していない方が不自然だ。

「絵里ちゃん、熨斗つけて婿にあげるから、どうかもらつてやつて」

「は、はい」

久子の迫力に押されるように、絵里は頷いた。

エピソード

数カ月後。

誰かの予想通り、結婚はとんとん拍子に決まり、大介は草上家に婿入りした。

「これ何？」

厳重な梱包で送られてきたダンボール箱を運びながら、大介は新妻にたずねた。

「いいものよ」

絵里はにこりと笑い、鼻歌交じりに梱包を解いてゆく。

中から現れたのは年季の入った振り子時計。しかもゼンマイ式らしい。

「なんでこんなものを？」

「ネットで見つけたの」

「ふーん」

絵里は変わったところがある。前前から思っていたことだったが、付き合い始め、結婚してからも大介が性格を掴みきれない所がある。

「そういえば、大介も昔、私に時計くれたよね」

「そうだったけ？」

「そうよ、目覚まし時計もらったのよ」

「そうだったかな……」

大介は頭をひねる。記憶にない。というか、何故目覚し時計なんだ？

「次の日、朝起きれなかったって怒ってたから、すぐに返したけど」

「そんなことあったっけ？」

「あつたわよ——」

幼馴染の上、年上。大介の記憶にない事でも絵里は覚えている。

「あそこはどう？」

リビングに掛けられたカラクリ時計を指差す。定時になると、オルゴールが鳴り、

人形達が踊りだす。絵里の同僚達が結婚祝にとくれたものだ。

「いいけど……あれはどうする？」

「玄関に飾るの」

「わかった」

踏み台を取り出し、カラクリ時計のかわりに振り子時計を掛ける。

ネジを回し、時刻を合わせようと針を回すと、途端鳴り響く鐘の音。重い音でもなく、可愛らしいものでもない。年月を感じさせる、古い、懐かしい響き。

「懐かしい」

絵里がうっとりとはやく。

始めてその音色を聞く大介だったが、確かに絵里いう『懐かしい』がピッタリ来るよ
うな、田舎を感じさせる音だ。

「時計の音を聞くと、あの日の河原を思い出すのよ」

「あの日？」

「夕日が綺麗だったあの日——」

そう言われればそんなことが合ったかもしれない。大介は絵里を抱きしめる。何故
だか急に不安になって。

あの日のことを今でも絵里はありありと思ひ出せる。

本当に夕日が綺麗だった。

名残を惜しむように投げかけられた光が美しく、絵里は夕日と共に世界から消えてしまおうかと思っていた。

そんな幻想を抱くくらい、あの頃の絵里は疲れていた。いろんな事に疲れきっていた。他人にとつては取るに足りない些細な事だったのかもしれない。けれど、あの時、あの瞬間の絵里にとつて、頭にあつた問題はとても重要で重大なものだった。

時は移ろいゆくものだけれど、あの頃の絵里には永遠に続く不変のものとしか感じられなかった。だから、余計疲れていたのかもしれない。

部屋に響く時を刻む音。絵里は大介の顔を見やる。

「ちよつと煩い？」

「それでもない」

優しい微笑み。だから絵里も同じ笑みを返す。

大介が目覚し時計くれたとき、絵里は日が沈みきつてしまふまで針の音を聞いていた。

ゆつくりと、でも確実に進んでゆく小さな針。

そのときやつと、時は過ぎさつてしまうものなんだつてことに絵里は気づいたのだ。当たり前前事だけれど、当時の絵里にはとても衝撃的なことだった。

抱きしめる大介の腕を解き、ソファーに座り込む。大介も絵里の隣に腰を下ろす。

あの頃の絵里には前に進む勇気がなかった。でも、望む望まないにかかわらず、時は過ぎてしまう。だから——頑張って前に進んで、進んで——。

絵里は自嘲気味に笑う。

でも、頑張りすぎたのだろう。いつしか自分以外が、周囲が見なくなっていた。前に進んではいるけれど、決して立ち上がって進んでいたわけじゃないことに気づかせてくれたのはds——大介だった。

「私はダメな人間だわ」

「そんなことないよ」

「いいえ」

絵里は文字版を見つめる。大介の視線が、自分に注いでいることを感じつつ、振り向かない。

仕事だけが生きが이었다のに、いつしか大介の存在が絵里の中で大きなものになっていった。大介と付き合い初め、絵里自身、気付いていなかった気持ちを眼前に突きつけられた。

私は大介に依存している。

私は大介がいないと生きていけないのではないか？

もし、大介がいなくなった時、もし、大介が他に好きな人が出来たとき、もし、大

介に捨てられたら私はどうなる？

ただの杞憂と人は笑うかもしれない。けれど、絵里にはとても怖いことだった。大介と一緒になれたら——そう思う反面、そうなれなかった時の事が余りにも恐ろしかった。

「私はちつぽけな存在なのよ」

「そんなことないよ」

「いいえ、実際の私はそうなのよ」

大介がいないと、不安で仕方ない。

なんて不安定な心理状態だろう。昔の私はこんな人間だっただろうか。

「大介は、私と結婚して幸せ？」

何度繰り返した質問だろう。大介の答えは決まってる。

「幸せだよ。絵里は？」

「……いじわる」

のぞき込んでくる大介の視線から逃れようと顔を背け、絵里は戸口にたたずむ母の姿を認めた。

「お邪魔だったわね」

詩子がにやりと笑う。

いつからそこにいたのだろう。二人は茹蛸のように顔を赤くし、絵里は慌てて声を

かける。

「な、何、どうしたの？」

「角のお店でラズベリータルト買って来たんだけど、お茶にしない？」

「ああ、そうね。いいわね」

顔を手で仰ぎながら、そそくさと台所へ逃げ込む。

「ごめんね、大介君」

むくれた顔をわずかに見せた大介に、小さな声で詩子は謝る。

「……いえ」

「まさか昼真つからいちやついてるとは思わなくて。あの子の性格的にも」

「……」

そうでしょうね。

大介は胸の奥で呟く。

絵里は誰にでも優しい。けれど、自分には厳しい。自分を決して甘やかさない。妥協しない。でも、大介といるときは片意地を張らない。それに気付いているのかいないのか、大介と二人でいるときの絵里はリラックスした表情で、結構天然。

そこもまた可愛いんだけど。

「楽しそうね？」

詩子の声に大介は我に返る。

恥ずかしい所ばかり詩子に目撃されていると思うのはこちらの思い過ぎだろうか。

「絵里、手伝うよ」

詩子の視線から逃げ出すように大介も腰を上げた。

本編

別名・恋人の樹伝説

1：出合い

降るように散る桜の花があまりに綺麗で、岸田美代は食べかけのサンドイッチを口元に運びかけたまま、頭上を見上げていた。

「美代、桜食べる気？」

「へ？」

間拔けな返事を返す美代の口の中へ、ふわり、花びらが迷い込む。思わずむせ返るが、暗に反し飲み込んでしまう。涙目になりながら声を掛けてきた友人——高藤望美を見やると、

「ぼーか」

意地悪い笑みを目元に浮かべながらも、済ました顔で小さく俵握りされたおにぎりを食べている。誰もが『お嬢様』と称する容姿をした彼女の性格が、ずいぶんひねたものであることは親しいもの以外知らない。

「あ、そうだ——」

望美は周囲にはわからない程度に邪悪な笑みを顔に浮かべ、

「この桜にはね、あるまじいことしやかな噂があるのよ」

低い声で笑う。

「な、何？」

恐い話がまったく駄目な美代はすぐみあがりつつも尋ねる。

「恐い話じゃないの。お婆様にお聞きしたのだけれど——」

望美の叔母はこの学園の理事長をしている。しかも、ここの出身者でもあるから、入学したばかりだというのに望美は妙にこの学園のことに詳しい。

「この桜の樹はね、別名・恋人の樹と呼ばれていて、」

「こゝ、恋人っ？」

美代は食べかけのサンドイッチを思わず口から噴出しそうになり、再びむせ返る。望美はむつと表情を険しくするも、そのまま話を再開させ、

「——この桜の花びらを飲み込んだものはきっちり一週間以内に恋に墮ちるらしいの」

そう言つて自分の腕時計に目をやる。入学祝に買つてもらつたという黒いベルトに、白のアナログ文字版というシンプルなもの。だが、特注らしく、ところどころ妙に仕上がされた細工がされている。

「今、十二時四十三分三十五秒過ぎ、美代が桜を飲み込んだのが二分前だとして、来週のこの曜日、十二時四十分頃には美代から恋人との惚気話を私は聞かされるのか……」

望美は両手を胸の前で握り締め、美代を見つめる。

「そのときは存分に語つてね、変人の話」
ニヤリ、極悪な笑みを見せる。

「へ、変人？ 恋人じゃなくて？」

尋ね返す美代に望美は先ほどの笑みを貼り付けたまま、

「この桜の木はね、別名・変人の樹って言って、できる恋人は変人なの。だからみんなこの樹の近くには寄り付かないの」

言われて美代は周囲を見やる。確かに立派な桜なのに、この桜の下でお弁当を広げているのは望美と美代だけ。皆遠巻きにお弁当を広げ、いや、何か二人を興味津々と言った表情で見ている。

「何でみんな見てるの？」

「何でつて、あなたさつき桜の花びら食べたじゃない」

望美はなんでもないことのように言い、お弁当を片付けはじめる。

「じよ、冗談よね……？」

「観念なさい」

ぴしゃりと言いやり、

「私は教室に戻るけど、あなたはここでまだ食べてる？」

「ううん、一緒に帰る」

美代はサンドイッチを三口で食べ、ジュースで流し込む。

「いつ見てもその下品……いえ、豪快な食べ方には呆れるわ」

小さな声で望美は吹き、美代が片付けているのを横目で見つとも歩き出す。

変人、変人——と小さく口中で呟き、望美の頭をよぎったのはあの男の顔だった。妙な自信に溢れた瞳、悪魔じみた嫌味な笑みを浮かべた口元。そのくせ、それらはバランスよく配置され、どちらかといえれば悔しいことに整った顔立ち——つまりは美形。学園であの男の本質を知らない馬鹿な女達から黄色い声を浴びている科学部部长の安達泰英。

望美はぶるりと身震いする。

「ま、美代とは接点無いから大丈夫だろうけど……いや、念には念を入れよう、アレは美代には気の毒すぎる」

「アレ？」

ようやく追いついた美代が望美に声を掛ける。

「え、あ……いや、なんでもないわ」

望美の慌てる姿だなんて珍しいものを目にし、美代は不思議そうに首を傾げる。

「何？ アレって」

「何でもないわ」

話は終わりとばかりに言われ、美代はそれ以上尋ねることが出来なくなった。

*

美代と望美のクラスである一年A組は三階にある。トコトコと階段を上り、ようよ

うたどり着けば教室の前には妙な人ばかり。二人は互いに顔を見合わせ、首を傾げる。

「何、アレ？」

「さあ、何かしら？」

一歩二歩と近づくとつれ、さつと望美の顔色が変わる。

「……美代、私、ちよつと忘れ物したから……」

「え？ 望美？」

美代は妙なことを言い出した友人を見やる。忘れ物などするタイプじゃない。どちらかといえば、完へき主義者。

望美はすでに階段へ向かい、そろりそろりと退いている。美代に声を立てるなどでも言うように、口元に人差し指を当てながら。

「何？」

首を傾げる美代の後方で、ニヤリと微笑む男の姿があったことを二人は知らない。

*

五時間目の始業チャイムぎりぎりになり望美は教室に戻ってきた。

「どうしたの？」

「ちよつと……ね」

望美は曖昧に答え、窓際の席へつく。数学のテキストやノートの準備をする。ガラリ、扉が開き担任・樋口沙織が現れる。彼女は現代国語表現の担当をしているため、教室内にざわめきが起こる。

「今から数学の授業ですが、その前に——」

廊下に立っていた男子生徒を教室内に招き入れる。

「今朝、皆さんに紹介するはずだった本宮秋也君です。本宮君、授業の前だけけれど簡単に自己紹介してください」

紹介された本宮秋也は、両手に抱えていた荷物をその場に置き、ぶきらっぽうに一言、

「本宮秋也です。特技は——」

と、蛇の目傘とサッカーボールをセカンドバックから取り出す。妙なものを持っているものだ、と眺めていたクラスメイト達だったが、一部は期待を込めた熱い眼差しで本宮を見る。

「染之介・染太郎やります！」

無表情に宣言し、あきれ返る多くのクラスメイト達などお構いなく、本宮は一人黙々と傘を回し始める。はっと我に返った担任・樋口が、

「本宮君、自己紹介済んだら席についてください。……傘回しはもういいから——止めなさい。危ないから止めなさい。止めなさいったら！」

切れ掛かりながらも、傘の上で回るボールを取り上げようとする。

(何で一人染之介・染太郎なわけ?)

美代がありえないと頭を抱えていると、窓際に座る望美の視線に気づく。望美は邪悪な微笑とともに音無く、ある言葉をつむいだ。

『お・め・で・と』

思い切りしかめつらを返してやると、望美はふふんと笑いを返す。いつも通りの望美だ。美代は机に突つ伏す。嘘か真かわからない桜の伝説。そして、目の前で中年親父じみた宴会芸を披露している変人。先ほどの望美の妙な態度。いろいろな思いが美代の脳内をめまぐるしく回り、それらを処理しきれず、

「あんたさつさと席に座りなさいよ！」

本宮へ八つ当たりすることにした。教室内は一瞬静まり返ったが——女子中心に黄色いざわめきが巻き上がる。

「キヤー」

「やっぱり」

「本当なのね」

「応援するわ」

「噂通り！」

どうして昼食の時のことを皆知っているんだ、なんてふと頭をよぎったが、逆上して

我を失った美代は、

「うるさい！ 私はアイツなんか——」

と、ここで壇上の本宮を真つ向から指差す。取り残されていたクラスメイト達が美代を見る。

「好きにならないわよ！」

美代の爆弾発言に、静寂だった教室内がどつとざわめき立つ。望美は自爆する友人に助け舟を出すでもなく、両肩を小刻みに震わせ、笑いをこらえるのに必死だった。

突如見知らぬクラスメイトから告白された形の本宮は、ただぼかんと、美代の顔を見つめていた。担任・樋口はうつすらと目に涙を浮かべ、

「皆さん、今は授業中ですよ」

消えそうな声で呟く。美代は我に返り、自分の犯したあまりの失態に顔色を失う。本宮はむっと顔をしかめ、自分へ注がれていた注目をかつさらつていった美代を鋭い瞳でにらみつけた。

2：効果は続くよどこまでも。

「鈴音え、いる？」

妙に間延びした声をあげながら理事長室に入ってきたのは、河村瑠璃子。

「ノックくらいしなさいよ。ノック」

高藤鈴音は眼を通していた書類から顔を上げ、勝手に応接ソファアに腰をおろした友人に声をかける。二人は小学校時代からの腐れ縁だ。

「あ、お茶は良いわよお、淹れてくれないから持ってきたの」

持参のバスケットから食器を取り出し、魔法瓶からコーヒーを注ぐ。用意の良い事に、鈴音の好きなケーキまで。

さつさと帰れ、の意を込めてお茶を出さなかった翌月から瑠璃子はバスケットを持参するようになった。

大好きなケーキの誘惑に負け、鈴音はソファアへ移動する。

「ほら、見て見てえ。またお見合い写真持ってきてあげたわよ。私って友達思いよねえ」
鈴音がケーキに口をつけると、途端はじまるのが瑠璃子の漫談。

大学在籍中に結婚・出産した瑠璃子は、来月には三十路に手が届く親友の鈴音が結婚していないことに、妙な危機感を抱いている様子で、飽きもせず毎月、お見合い写真を抱えて突然鈴音の元を訪れる。

だが、瑠璃子は何を考えているのか、お見合い写真の相手は見事に鈴音のタイプじゃない男性ばかり。しかも断りきれずに一度した見合いでは相手はすでに結婚しているというジョークのきついものだった。

「あのね、そんなものはもういらないうっていったでしょ？ 私は結婚する気は無いの」

ケーキに免じて、なるべく角を隠しつつ断る。

「嘘ばかり。私、知ってるのよお」

瑠璃子はケーキに口をつけず、怪しい笑みを浮かべる。瑠璃子は甘いものが苦手なくせに、なぜだかいつも甘いお菓子を持参する。甘党の鈴音はいつも喜んでご相伴にあずかっているのだが。

「アレとはまったく、これっぽっちも、針の穴ほども瑠璃子が妄想しているような関係じゃないの」

瑠璃子が何を知っているのか肝心なところはいつも言わないが、大体のところ鈴音は見当がついている。

「またまた、とぼけちゃつてえ……」

額に青筋が浮かぶのを見ると、瑠璃子はやっと口を閉ざし、話題を変える。子供のこと、姑のこと、旦那のこと、近所のこと、親戚のことと、他に話題は無いのか、と言いたくなるほど、いつも話題は代わり映えしない。

一通り自分の近況を吐露すると、

「じゃ、仕事の邪魔になるから帰るねえ」

立ち上がる。

「本当に。今度から来るときは電話入れなさい」

「だって、電話入れたらいつもないじゃないのお」

一度だけだろうが、と鈴音は咽元までこみ上げてくる怒りを抑える。悪意が一欠けらも無い瑠璃子に怒ったところで自分が疲れるだけだ。

「あの時はゴメンって言ってるでしょ？ 私も仕事があるんだから、来るときにはアポイントメントを取る。それが社会の常識、ルール、最低限のマナーつてもよ」

「そんなにガミガミ言わなくても良いのに……博史さんの会社に行くときはきちんとしてるわよお」

今、何と言った？

鈴音の額の青筋が増える。

博史というのは瑠璃子の旦那の名前。

「社会常識あるんなら私にも同じようにしなさいよ！」

「私と鈴音の間じゃないのお」

のほほんと返す瑠璃子。しつかり扉のノブを握っている辺り、世渡りが上手い。

「あとね、結婚するんですってえ」

時々、瑠璃子は主語を抜かす。こういうときは大抵、重要な話であることが多い。

「誰が？」

鈴音は手近にあったボールペンを投げつけようとしていたフォームのまま固まる。

「誰って、川上拓真よお」

瑠璃子がうつつすらと微笑んだのは気のせいではないだろう。

「……へえ、あんな変人と結婚したがる女が地球上にいただなんて驚きね」

「……本当にねえ。じゃあねえ」

含みのある笑みを浮かべつつ、瑠璃子は扉の向こうに消えた。来たとき同様、帰るのも突然だ。

「そうか、アレが結婚するのか」

一言呟き、鈴音は自分の心に問いかける。嬉しい、ものすごく嬉しい。それは間違いない。けれど、同時に湧き上がってくるこの絶望感というか、妙な不安感。これは何だ？ どうしたことだ？

考えれば考えるほど、何か嫌なことが起こりそうな気がしてくる。アレに関する嫌な予感はまだ外れない。だが、今回はアレが結婚するって話だ。自分とは関係ないはず……。

あまりの嬉しさに感情が空回りしているらうと自分自身を落ち着かせ、鈴音は早退することにした。

駐車場につき、車のキーを解除する。あと三步で車の運転席のドアの前。そこで嫌なものを視界に入れてしまった。

「……見間違いであればどんなに嬉しいか」

「僕の顔を見るたびにその発言するよね」

傷ついた、といった風など一つも無く、満面の笑みで鈴音の車へと歩み寄ってくる力

ジアルな、しかし高級な品を身にまとった男。この男こそ鈴音が世界中で一番嫌っている川上拓真である。

「あなた、こんなところで何してるの?」

「何つて……ちよつと通りかかつて」

普段、運転手つきの車で移動しているはずの男が、なぜ駐車場を歩いているのか。しかもこの駐車場自体、たまたま通りかかれるような場所には面して無い。

「——運転手は?」

「帰らせた。ちよつと買い物に付き合ってくれないか?」

最終目的地はやはり自分の元だったらしい。先ほどまでの喜びが、反比例するように下降していく。

「なんで私があなたの買い物に付き合わなきゃいけないのよ」

「指輪を選ぶのに、女性の君が居たほうが良いと思つて」

「指輪?」

一瞬、顔をしかめるも、すぐに満面の笑みを浮かべる。

「ああ、結婚指輪ね」

「——なんで知つてんの?」

あつけにとられた様子の拓真。鈴音が拓真の前で笑みを見せること自体珍しい。「瑠璃子に聞いたの」

鈴音は車に乗り込み、助手席のドアをあける。

「……そう。有難う」

拓真は不信そうな顔で乗り込み、じつと考え込む。

「瑠璃子ちゃん、他には？」

「別に何も。あ、相手ってどんな女性なの？」

拓真が見たことも無いほど鈴音は機嫌が良い。それもそのはず。高校在学中、あの桜の伝説のおかげで、鈴音は一つ年下の拓真と恋人同士などといわれる関係に陥っていたのだ。

鈴音が大学に進学したことで関係は解消されたと思っていたが、恋人同士の主要な行事の日は、何故だか妙なところで拓真に出会う。しかも、二人きりとしかない状況に陥る。

拓真が運命の赤い糸で結ばれている関係だと言えば、鈴音は呪われた関係だと言いつける。周囲からはひたすら仲が良いのねと言われ、それを躍起になって鈴音は否定してきた。

その苦労もやつと、十数年もかかったが、やつとのこと解消されるのだ。そう思うからこそ、心が弾んでしかたがない。拓真が結婚するのであれば、自分もまともに結婚相手を探すことが出来る。今まではどこからか妙な妨害工作が働いていたが、それもなくなるだろう。やつと。

「瑠璃子ちゃん、もしかして僕が結婚するってことしか言っていないの？」

拓真は何故か念押しするように声を上げる。

「他には聞いてないわよ。で、相手はどんな人？」

「……いや、ま、素敵な人だよ」

「素敵だけじゃわからないけど？」

拓真はしぶしぶといった様子で、

「知的で可愛いらしくって、真面目で、女性的。たまにヒステリックなときもあるけれど、基本的にすごく優しい人だよ。たまに、天然入ってるけど」

「うわあ、惚気てるわね」

拓真は本気で惚れているらしい。

「どこで知り合ったの？」

「え、いや、学校で……」

拓真はなぜか言葉を濁す。大学で知り合ったのだろうか。高校では自分を追い掛
け回していたことだし。

「名前は？」

「えつと——」

歯切れが悪い。

「私が知らない人？」

「そんなことも無いけど」

無いけど、なんだというのだ。名前を言えないとは。

だが、昔から拓真は変わっていた。変なところで照れているのかもしれない。

「——ま、別に良いけど」

ハンドルを切り、信号を右に曲がる。

「どこで指輪を買うの？」

「……どこかオススメある？」

「なるほど」

鈴音はにんまりと笑う。

「ま、男性はあまりジュエリーショップなんて行かないわよね」

「ああ」

照れたような返事。

「ところで、結婚指輪なんて大事なものを、婚約者と選ばないでいいの？」

「吃驚させようと思って」

「なるほど」

鈴音は高校時代を思い出す。校庭で体育をしていたらリボンを頭につけたセントバーナードが乱入してきたり、授業中に蝶ネクタイをしたコモンリスザルが進入してきたりと、それらがすべて拓真のプレゼントだったことを。

瑠璃子相手だったか、可愛らしい、飼いたいなんて言ったのを地獄耳で聞きつけたのだろう。『高藤鈴音様へ 川上拓真より』なんてプレゼント用のメッセージカードを動物達が持っていたところをみると。

それらプレゼントを家に連れて帰って大事に可愛がっていた、なんてことは拓真には伝えていないが。

「何？ 思い出し笑い？」

「にやつく鈴音に拓真は問いかける。」

「いえ、何でも無いわ」

鈴音は顔を引き締め、ジュリーショップの駐車場へ車を入れる。店内は静かな音楽に満ち、平日とあつて他に客の姿はなかった。

「あのさ、鈴音だったらどんな指輪が欲しい？」

「ブライダルジュエリーコーナーのショーケースにはさまざまなタイプの指輪が並ぶ。」

「どれもオリジナルデザインの一点もの。」

「……私が選んで大丈夫？」

「言いつつも、鈴音は嬉しそうに微笑む。」

「いいよ。鈴音、センス良いし」

「そう？」

鈴音は一目見て気に入った指輪を指差す。どうせ、自分が結婚指輪を求める頃に

は売れてしまっているだろう。人気のある店だから。

「これ、包んでください」

拓真は店員に声を掛ける。

「ちよつと、他のは見なくていいの？」

「いいよ」

拓真はあつという間にカードで支払ってしまい、嬉しそうにラッピングされた品物を受け取った。

「あ、サイズは良かったの？」

自分の指のサイズで指輪を選んでいたことに思い当り、鈴音は尋ねる。

「別にいいよ」

拓真はあつさりと答える。

婚約者は自分とおなじサイズなのだろう。

特に不自然なことではないのだが、鈴音は妙に引かかるものを感じた。だが、拓真が結婚するという喜びのあまり、深く考えようとはしなかった。

3：過去を知る男

ふと窓の外を見た望美は大きいため息をついた。嬉しそうな顔をした河村瑠璃子

の姿を見かけて。

(また何か企んでいるわね……)

叔母の高藤鈴音はすっかりしたキャリアアウーマンタイプなのだが、どこか抜けていて、瑠璃子をなぜか全面的に信用している。誰もがクセモノと評価する女に丸め込まれ、人生、かなり操られている。

しばらくして、笑みを浮かべた鈴音が帰ってゆく姿を見かける。そのずっと先、校門のあたりには川上拓真の姿。

(瑠璃子さん、今度は何をやる気だ?)

授業中だというのが口惜しい。それも瑠璃子の計算上かも知れないが。

どうやらキヤスティングは完璧らしい。拓真は何気なさを装って鈴音に近づき、何があったか(この辺が瑠璃子にまるめこまれたんだろう)鈴音は彼を車に乗せた。しかも満面の笑みで。

「チェックメイト」

チエスの得意な瑠璃子の嫌味な声が聞こえた気がした。

それから三十分もしてようやく授業終了の鐘がなる。誰にも聞かれないよう屋上に上り、携帯から鈴音を呼び出す。コール音が数度響き、ようやく通話状態になる。

「叔母様、瑠璃子さんに何を言われたの?」

「……相変わらず元気だねえ」

その声は川上拓真。

「なんであんたが叔母様の携帯に——」

「鈴音は今、運転中で出られないからね、授業は終わったの？」

叔母が近くにいるときは瑠璃子も拓真もいつも完璧ないい人を演じる。鈴音には何度かそれを訴えたが信じてもらえない。

「どこに行ったの？ それともまだ向かっている途中？」

「ジュエリーショップに行つてたんだよ。結婚指輪を買いに」

望美は落としそうになった携帯電話を慌ててつかみなおし、

「ちよつと冗談でしょ？」

「いや、本当」

瑠璃子はどういう罨を張つたんだ？ 鈴音がおとなしく拓真とともに結婚指輪を買いに行くなど……まったくもって考えられない。鈴音が大嫌いだと胸を張つて言うほどの拓真と一緒に結婚指輪を買いにいかせる言葉——暗示か催眠でも掛けたか？

考え込んでいた望美はそつと近づいてきた人影に気付かなかつた。

「誰に電話しているの？」

身の毛もよだつ声が真後ろからした。慌てて振り向き見れば、予想を違わぬ顔。

「……な、なんでこんなところにいるのよ？」

「なんでつて——」

考え込むそぶりを見せるが、それはただのジエスチャーに過ぎない。答えはいつも決まっている。

「望美の姿が見えたから」

しれつとした顔で安達泰英は答える。頭に血が上るのを感じ、必死に冷静を取り戻そうと深く息を吸い込む。

「じゃ、私は教室戻るから」

脱兎のごとく離れた望美に、

「あ、部活のことなんだけど——」

思い出したといわんばかりの口調の泰英。嫌な予感に、眉間に寄せた皺を隠すこともできず振り向く。

「入部届受理しておいたから」

「……何のこと？」

「科学部への入部届」

もう一度大きく息を吸い込む。頭に血を上らせたままでは勝負に勝てないどころか、泥沼に引きずり込まれる。

「私、入部するだなんて一言でも言った事あった？ それどころかここ数ヶ月まともに顔を合わせていないし、口もきいていなかったわよね？」

「おばさんに頼まれたんだよ。あの子は人見知りするから、くれぐれもよろしくつて」

あの母親ならば言いそうだ。数年前、望美の父と再婚し後妻として入ってきた今の母。いい人なのだが、いい人過ぎて人を疑うということがない。

「どう言いくるめてそういう発言を引き出したのか知らないけれど、私が人見知りするタイプじゃないって事くらいよおく分かっているはずよね？」

嫌みつたらしく言ってる。

「人見知りはしなくても友達がいらないことに変わりないよね」

望美がとても気にしていることを言い放つ。望美はもう一度深呼吸した。熱くなつたらそこで負けだ。

「望美の過去を知る人間は絶対に近づかないんだから」

「……言うな」

腹の底から絞り出すようなうなり声。望美の脳裏に甦る忌まわしき思い出。

二ノ宮金次郎の銅像には時限式の発火装置を巻きつけた。校長先生の写真にも同じように発火装置を設置した。そのせいで校舎の一部が炎上したが、望美が当時、理事長だった祖父の孫ということでもみ消した。自分としてはいつもしている悪戯に毛の生えた程度のつもりだった。

まさかあれほど大騒ぎになるなど夢にも思っていなかったのだから。

「当時を知っていて、なおかつ話をする人間は僕しかいないだろ？」

哀れみを含んだ口調。当時もその件について庇ってもらったのだが、それもこれも元はと言えばいじめられっこだった泰英を守ろうとして望美が幼いながらに考えた結果だったのだ。

数年前に戻れるならば、あんな悪戯など絶対にしない。やらせない。そして泰英になど関わらない。

不意にチャイムの音が響く。

「六時限始まっちゃう！」

慌てて望美は早足で教室へと急ぐ。泰英はそんな望美の後姿を嬉しそうに見守り、ゆっくりと歩き出した。

「雨、降るかもしれないな」

空を見上げてつぶやく。空にはどんよりとした雨雲が徐々に増えてきていた。

一日はようやく終わり、帰りの帰途につく。

「雨降ってる……望美、傘持ってる？」

美代が下駄箱から靴を出しつつ尋ねる。目線はグラウンドに降る雨を見つめている。激しい降り方をしていないから、走れば駅までそう濡れないだろう。

「持つてるわけないでしょ」

望美は答え、ちらり泰英の顔を思い出す。たぶん、傘を持つている上、確実に貸し

てくれるだろう。だが、あの男には関わらないと誓っているのだ。その考えを頭から振り払う。

「木下さんは？」

美代も最近ちやっかりしてきた。

「父の出張についていつてるから、二日ほど前からいないのよ」

「そうなんだ」

お抱え運転手の木下さんは、中年のベテランの運転手で、車は道の上を滑るように走る。車に酔いやすいと言っていた美代だったが、一度木下さん運転の車に乗ってからは車に乗りたがるようになった。

「——つてことは今日はおば様運転の車？」

「ええ」

美代は鞆を抱えさつさと雨の中に飛び出す。

木下さんと違い、母の運転は天災的だ。今日のような天気の日、母が代わりに迎えにきてくれたのだが、生まれて初めて望美は車酔いというものを体験した。

「ごめん、先に帰るね」

言いつつも走り出している。マイペースな母に顔を合わせたら最後。強引な親切心を發揮し車に連れ込まれることは目に見えている。

「また明日ね」

手を振つて見送る。

一緒に帰りたいところだが、迎えにくるとせつかく言ってくれている母の親切を無下に断ることもできない。仲は良いのだが、やはりどこかに遠慮しているのかもしれない。

望美は大きいため息を尽き、しだいに雨脚を強める空を見あげた。

4：効力発動

いつもより少々遅れて登校した望美は、教室に入つてすぐ、そこに妙なものを見つけた。いつもならば遅刻ぎりぎりですぐ美代がすでに席についており、アンニュイな視線をどこか空中にさ迷わせている。春、ではあるが、美代の周りだけ異常に春めいた空気が立ち込めている。

意を決したように望美は美代の席に近づき、真正面から声をかける。

「おはよう」

妙に幸福そうな笑みを浮かべた美代は気づいていない。

「お・は・よ・う」

美代は望美の顔をしばらく見つめ、

「……あ、望美か。ごめん、気づかなかった」

「——みたいね。何かあったの？」

「え？ 何が？」

困惑した顔。

「何があったの？」

いつも以上に話にならない。

「うん……えっとね、」

泣きそうな、嬉しそうな、不安そうな、それでいて幸福そうな。一人で百面相をしながら、美代は言葉を濁し続ける。

「ま、言いたくなったらで良いわ」

席につこうとする望美をとめ、

「違うの、あのね、」

話したくないわけではないらしい。望美はそつとため息をつき、美代の話の聞こえと向き直る。

そこへ、ドン、と戸口から壁にもものがぶつかった音。振り返った望美はあからさまに顔をしかめた。

元宮秋也が大きなダンボール箱を抱えてそこにいた。狭い戸口にダンボールをぶつけたのだろう。ダンボールからはミイミイと小さな鳴き声が聞こえる。

その鳴き声につられるように数人の男女が秋也の周りに集まり、ダンボールの中

を覗き込む。

「猫！」

「可愛い！」

「どうしたの？」

声を聞きつけた周りの人間も集まり、すでに人垣ができています。

「昨日転校してきたばかりの人間とは思えないわね」

望美が迷惑そうに言葉を漏らす。いつもならば同調なり、反論なり何らかの言葉を美代は返すのだが――。

「ごめん望美、後でね」

言うのと、元宮秋也の元へ駆け寄っていく。昨日の宣言もあり、ざわめく教室内。美代はそんなことにはかまいもせず、元宮が運んできたダンボール箱から子猫を抱き上げる。

幸福そうに語らいながら、猫をかまっている二人。誰が見ても恋人同士にししか見えなく、猫好きな面々は近寄るに近寄れない顔で周囲を取り巻いている。

望美は納得がいかない顔で自分の席に座り、眉間にしわを寄せて二人を見る。

「あれは……ただの伝説のはずなのに」

不愉快そうにつぶやく。

「――きちんと説明してもらわなきゃ」

休み時間も美代は元宮のもとへ猫を可愛がりに行ったため、望美が説明を聞く時間はなかった。

昼休みによろよろ彼女を捕まえ、お弁当片手に屋上に連行するように連れて行く。他にも数人生徒がいたが、話を聞かれることはない程度の込み具合。

「猫ちゃんに餌をやるうと思つてたのに……」

残念そうにつぶやく美代に鋭い視線を投げかけ、口元だけはあくまで穏やかに望美は微笑む。

「ちゃんと説明してくださるかしら？」

「……あ、あのね、」

美代の背中に冷たいものが流れる。席が前後だったので仲良くなつたのであるが、『人間、見た目じゃない』つて言葉の色濃く友人は体現してくれている。

お嬢様らしい、ふわりとした物腰。黒髪はあくまで艶やかにストレート。白く、きめこまやかな肌。大きな瞳、長いまつげ、唇は可愛らしく、リップが薄く塗られている。

絵に描いたような清楚可憐なお嬢様。が、中身はまったく違う。望美と同じ出身中学の学生が遠巻きに彼女を見ているわけが最近わかった。友達としても一癖、二癖あるのだが、敵に回すとても恐ろしい人間だということが――。

「あのさ……恋、したかも」

「は？」

「あの、ね」

美代の声はだんだん小さくなる。

「昨日ね——」

「間違いよ」

望美はきつぱり断言する。

「美代が思っているのは間違い。それは恋じゃない」

「でも、」

「でもない。いい？ 昨日桜を食べて、私が変人に恋するなんて妙なこと言ったでしょ？ 美代は暗示にかかっているのよ。だからそれは恋じゃない！」

「違つよ」

美代はきつぱりと否定する。

「これは恋よ。望美は恋をしたこと無いからわかんないのよ」

望美の胸に突き刺さる言葉。

確かに、恋はしたことがない。それ以前に、望美は誰も信用していない。祖父の手による英才教育の賜物か、人と見ればまず疑う。そして相手を手駒とした場合、どのように使えば良いか、次に、どのように手駒にするかを考える。

美代はそんな望美にはじめてできた友達で——最初は義理の母に心配を掛けない

為に仲良くし始めたのだ。学校の友達の一人として紹介するために。

「——じゃあ、どこがいいの？」

わからないと全面的に言われれば元来負けん気の強い望美は悔しくなる。書物で得た知識はあつても確かに経験がない。人との駆け引きは上手いが、相手に対し敵か味方か、有能かとるに足らない相手か、という見方しかしたことがない。

ほんの一ヶ月前の望美であれば、美代のような平凡な人間と仲良くしている今の現状を予測することさえ不可能だった。まして、昨日はつきりと宣言した美代の口から「恋した」なんて言葉を聞こうとは……。

世界は不思議に満ちている。いくら駆け引きが得意でも、その心情が伺えない人間が「まん」といる。

望美はタコさんウインナーにぶすりとフォークをつき刺し、

「昨日は『好きにならないわよっ！』って宣言してたじゃない」

あのときの美代の口調を真似る。美代は照れくさそうに一口大のコロッケを口に放り込み、

「昨日ね、見たの。捨て猫達に傘差し掛けて、頭なでてたのを」

「で？」

「でって……こう、ビビビつと来たのよ」

その時の猫たち（今朝、元宮がダンボールに入れてつれてきた猫達）が、いかに可愛

らしかったか、また動物の可愛らしさについて熱い口調で語り始めた。将来の夢は第二のムツゴロウ王国を作ること、なんて公言してはばからないだけのことはある。

望美は絶望的にため息をついた。

美代も変人だったのね――。

望美は弁当を食べながら、壊れたラジオのように言葉を流しつづける友人の声を聞き流していた。

5：時効はない

「鈴音え、今からお昼？ よかつたら食べない？」

瑠璃子が三段重ねの重箱片手に理事長室を訪れたのは、鈴音がちょうどお昼を食べようかと椅子から立ち上がったときだった。

タイミングが良過ぎると望美であれば胡散臭く思うところだが、鈴音はそんな風に思わない。昔から、瑠璃子は妙な具合にタイミングが良い、とは思っていても、それを深く疑ったことがない。すべてを『瑠璃子だから』の一言で済ませている。いちいち天然な瑠璃子の言動を疑っていたら、精神的に疲れきってしまうからだ。

勝手知ったるなんとやらで、瑠璃子は来客用の机の上に弁当を広げ、

「鈴音の好きな鰯の照り焼きにい、出汁巻き卵もあるのよお」

「じゃあ、いただくわ」

立ち上がったついでにお茶を用意する。

「——今日はどうしたの？」

「何があ？」

「何がって——お弁当までこしらえて何か用なの？」

瑠璃子からは妙に浮かれた気配が漂っている。今日は何の日だっただろうか。瑠璃子の旦那が関連していれば、そちらに出向くはずだし、こんな風に念入りな昼食を作って持つてくるともなれば自分に関連したこと。でも……。

「私、誕生日じゃないけど？」

狐につままれたような顔をした鈴音を瑠璃子はおかしそうに見つめ、

「たまにはお昼、鈴音と食べたいなあと思つてえ」

言われてみれば、菓子を一緒に食べることはあつても、昼食をともにするのはずいぶん久しい。

お茶を一口すすった瑠璃子は感慨深げにつぶやく。

「ここに在学していた頃を思い出すわねえ」

「そうね」

相槌をうった鈴音だったが、嫌なものが脳裏を横切り、笑みは曖昧なものになる。あれは拓真が悪いのであつて、私は悪くない——いくら自分に言い訳しても、罪の意識は消えない。

「それにしてもお、旧校舎はなんで燃えちやったのかしらねえ？」

嫌な汗が一滴。鈴音は料理と黙々と口に運ぶ。

大変おいしい料理なのだが、あまり美味しく感じる事ができない。今すぐその話題をうやむやにしたいが、そのような事をすれば妙に勘のいい瑠璃子のこと。気づかれる可能性がある。

「学園祭、焼け跡でやったでしょお？ 焼け残った木材やらは撤去されたけれどお、地面が真っ黒でえ——だから妙に頭に残ってるのよねえ」

その原因を知るのは拓真と鈴音だけ。だが、瑠璃子は何かとその原因を鈴音に尋ねてくる。瑠璃子が何か知っているのではないか、とも勘ぐってみるが、そんなはずはないと鈴音は自分をなだめる。目撃者はいなかったし、その後、誰にも咎められなかったのだから。

あの火事のあつた日はちようど鈴音の誕生日だった。

「鈴音え、これえ」

七限目の授業が始まる間際、瑠璃子から小さな紙片が手渡された。

「何？」

「忘れないでねえ」

先生が教室に入ってきたこともあり、瑠璃子は小さく手を振って席へと戻る。鈴音は紙片に書かれた文字を見て、首をかしげた。

『放課後、旧校舎へ。大事な話がある』

大事な話とは何だろう？　そもそも、始終一緒にいるのだからいつ話してもよさそうなのに、なぜ放課後なのだろう？

授業を終えてから問いただせば良いかと思っていたのだが、その日はなぜか、瑠璃子はすばやく教室から姿を消していた。いつもはどちらかといえば鈴音がいなければ何もできないようなタイプなのに、時々、妙に行動がすばやく、鈴音が捕まえきれないところがある。

仕方なく、授業が終わってから旧校舎に足を踏み入れる。つい先日まで倉庫代わりで使用されていたのだが、解体間際の今では物が少ない。妙な居心地の悪さ、薄気味の悪さが漂う。

「瑠璃子」

声をかけながら、教室一つ一つを覗いてゆく。旧校舎なんてアバウトな場所なので、どこに彼女が潜んでいるかわからない。

二階の一室、妙に赤い、ほんのりとした光が漏れてくる部屋を見つけた。

「瑠璃子？」

覗き込んだ鈴音に向かい、頭上から紙ふぶきが舞った。頭上には割れたクス玉。

事態が飲み込めず、目を白黒させていた鈴音だったが、目の前にいる川上拓真に気づき、眉間に皺を寄せる。

「何であんたが！」

「お誕生日おめでとう」

「……は？」

一瞬何のことかわからず、首をかしげる。

部屋は綺麗に飾り付けられ、ロウソクの明かりがともされたそこは雰囲気の良いレストランの一角といった様相。旧校舎の一室だとは到底思えない。

部屋の奥にそびえる巨大なケーキ。ロウソクと花火がいつそう派手にケーキを彩っている。手前には白いテーブルクロスが掛かった机が置かれ、美味しそうな料理が並んでいる。

「すごい……綺麗……」

「鈴音、おめでとう。喜んでもらえて嬉しいよ」

嬉しそうな拓真の声。大きなバラの花束を抱えながら近づいてくる。そこで我に返った。

「瑠璃子の名を語って呼び出すなんて卑怯だわ」

「え？」

拓真は一瞬戸惑いの表情を浮かべたが、すぐに、

「これ、プレゼント」

いつもながらに鈴音の嫌いな拓真の笑顔。単純に嬉しそうな、けれど何か裏があ

りそうな顔。

「いらない」

教室を去りかけた鈴音を拓真は熱心に引き止めようとす。

「受け取ってよ」

「いらないうたら」

「他のもののほうが良かった？」

「何もいらない。ついでに、あんたがいなけりやもつと嬉しいわよ」

「鈴音」

「気安く人の名前を呼ばないで」

「待つてよ、鈴音」

「人の名前を呼ばないでつてば。ついでにこないで」

走り出す。

が、旧校舎を出た辺りで腕をつかまれる。押し問答を繰り返していた二人が火事に気づいたのは、ずいぶん経つてからだった。ケーキの火が引火したらしいことは目に見えて明らかだった。

「ええつと、私も詳しくは知らないわねえ……」

冷や汗を流しつつ、瑠璃子の作った出し巻き卵に手を伸ばす。口に入れると、ふわりと溶ける。甘すぎず、辛すぎず、卵の風味が生かされた味。何度食べても最高。

「美味しい。出し巻きは瑠璃子の作ったのが一番ね」

「いっぱい食べてね」

しばらく無言で食事を楽しんでいたのだが、お腹が良くなってくるとやはり、瑠璃子の来訪目的が知りたくなる。二日続けて、しかも弁当まで持参など今までにない展開だ。

「今日は何の日なの？」

瑠璃子は楽しそうに微笑むだけ。

「何かあったの？」

尋ねても、首を傾げとぼける。

「何かあるの？」

「ヒント、いるう？」

「そりゃ……あるなら」

「ヒントはねえ、鈴音」

「私？」

鈴音の顔にクエスチョンマークが増える。

「私のこと？ 何のこと、一体？」

「うふふ……」

答えを言う気はないらしい。

手早く重箱を重ねると、

「あんまり長居してたらあ、しゃべりたくなつちやうから今日は帰るねえ」

瑠璃子が入ってきた時同様嬉しそうなオーラを撒き散らしている。

「ちよつと、何なのよ？ 私に関係することつて」

ドアに手を掛けた瑠璃子に、すねた顔で鈴音は尋ねる。

ちらりと後ろを振り向いた瑠璃子は仕方がないといった表情で、

「川上拓真が日取りが決まったつて」

「……本当に？」

鈴音は右手の茶碗を落としそうになり、慌てて机の上に置く。嬉しさのあまり声も出ないとはまさしく今の状態。

「相手は天使？それとも女神？よくもまあ、あの川上拓真と——婚約したつてだけでも凄いのに、結婚するだなんて——」

「本当にねえ。拓真ちゃん、世界中で一番好きな相手とやつと一緒にになれるのねえ」

瑠璃子の囁きは舞い上がった鈴音には届かない。

「じゃ、帰るわねえ」

「またね」

うつつな鈴音は適当に返事を返し、部屋の中を居ても立つてもいられない様子でぐるぐる歩き回る。

(拓真が結婚！拓真が結婚！拓真が結婚！)

頭の中をその単語が何度も巡り、午後からの仕事は手につきそうにない。急ぎの用事もないから、連続になるが早退しても差し支えないだろう。とにかく気を落ち着けなければ仕事を手につかない。

6. 地獄巡り

「瑠璃子さん」

正面玄関の前で瑠璃子呼び止めたのは安達泰英だった。授業はすでに始まっている時間帯――。

「泰英ちゃん、何か御用お？」

嬉しそうなオーラ全開の瑠璃子に、泰英は眉をしかめた。普段、高遠鈴音が近くにいる時、彼女はおっとりしたしゃべり方はしない。見慣れない振る舞いを見せる彼女が気持ち悪い。いつものように本心を隠した瞳に、含みのある笑みを浮かべた善人ぶった顔の方がまだましだ。

それを悟ったのか、瑠璃子は顔に浮かべていた笑みを純真なものから裏のあるものに変える。一瞬の、ほんのちよつとした変化だが、まるで別人。

泰英は睨まれてもしたかのように、目に力を入れる。

「拓真さんと鈴音さんをついに結婚させるんですか？」

「……人聞きの悪いこと言わないでくれるかしら？ 鈴音は、自分で自発的に拓真ちゃんと結婚するのよ？」

「裏であなたが手を引いていること、知らないのは鈴音さんだけですよ」
「むう」

可愛らしく膨れてみせる。

「それより、望美ちゃんの方はどうなの？ あなたの手には余ってるんじゃないの？」
「関係ありません」

「あら、鈴音の親族は私の親族も同じ。関係ないことないわ」

「……鈴音さんに全てを話しますよ」

「鈴音が信じると思っているの？」

「望美が望んでいないことなら、僕は望美の願い通りの形になるよう努力するまでです」

その言葉に瑠璃子はぎろりと泰英を睨み付ける。

「私の敵に回る気？」

「望美の為なら」

真剣な瞳の泰英から視線をそらし、瑠璃子は息をつく。

「——話にならないわね。お子ちゃまの一存で鈴音の一生を台無しにしようだなんて」

「でも、あなたにも鈴音さんの一生を決める権利はない」

「いいのよ、私は」

瞳の奥に怪しい光を浮かべ、笑う。

「私は鈴音を幸福にする義務があるわ。あなたが望美ちゃんに恩義を感じているように、私も鈴音に恩義がある。だから、なんとしてでも鈴音には幸福になってもらわなきゃならないの」

「あなたの描く幸福と、鈴音さんの描く幸福が違ってもですか？」

「違わないわ。何をすれば一番いいのか、私はわかっている。当人には見えなくても、周囲の人間には見えることがあるのよ」

「それはあなたの我侷に過ぎない」

「何とでも言いなさい。青二才にはわからないことよ」

身をひるがえし瑠璃子は立ち去る。

泰英はその後姿が完全に見えなくなつてから、ようやく重い息を吐き出した。

悪魔とも鬼とも言われる瑠璃子を敵に回すだなんて大それた事をしてしまった自分が信じられない。いくら望美の為とはいえ、無茶し過ぎた。

教室に戻ろうと歩き出した泰英は誰かにぶつかりかけた。瑠璃子との会話で気力を使い果たし、前をきちんと見る余裕がなかった為もある。

「すいません」

誤りの文句を言いつつ顔を向けた泰英は大きく目を見開き、固まった。

鈴音はたつた今立ち聞きしてしまった話の内容と、見たことのない瑠璃子の言動に驚き、啞然としていた。

「……………どういうこと？」

喉の奥から搾り出したような声。

疑問符だらけの顔をした鈴音に、泰英はどつと疲れが沸きあがるのを感じた。
(完全に、瑠璃子さんの敵になってしまった…………)

*

放課後。

帰宅しようと席を立った望美は嫌な予感にさつと机の下に隠れた。だいたい感は良
いほうだ。不信な顔をする美代に、唇に人差し指
を当て、ゼスチャーで伝える。

『私はここにいないことにして、お願い』

『わかった』

美代も慣れたもので目で同意の意を表す。周囲にいるものには二人が会話してい
るようにはちらりとも伺えない。

『私、先に帰るね』

『え?』

戸口のほうをうかがうと、帰ろうとしている元宮秋也の姿。追いかけるように出てゆく美代の姿。

(美代……)

泣き言を言いたい気持ちになる。だが、それ以上に考えなければならぬ問題が教室前の戸口から現れた。

「高遠さん、いる?」

男の声にざわめく女生徒の声。

(やつぱり……)

嫌な予感的中した。何の用事があるというのだ……? もしかして昨日言っていた部活のことだろうか。

泰英は周囲にできた人垣に笑顔を向け対応しているが、それが本心じゃないことは望美が一番よく知っている。感情を隠し、他人とコミュニケーションとるのが何よりも得意な男だ。

一人が熱心に話し掛けているのだろう、泰英の目が教室内から削がれた一瞬をつき、望美は後ろの戸口から廊下へ飛び出す。忍者も格やと言うべき行動力。

それに気づいたのか泰英も動き出す。とりあえずは囲んでいる女の子達が泰英の行く手を遮ってくれるだろうが、やすやすと下校することはできないだろう。

それより問題は、泰英に協力者がいるかどうかだ。

望美がそう考えるのと目が合うのは同時だった。目の前にいた数人の学生が望美の顔にあつと驚く表情を浮かべる。

「ちっ」

無駄な人望を使って、私のこと拘束する気か。

そうとなれば……階段を駆け下りる。一階まで降りると見せかけ、二階の階段近くに隠れる。数人が走るように階下へ降りてゆく足音を聞き、じつと気配をうかがう。

この校舎にある階段は四箇所。今の階段を下りるのが下駄箱への近道だが、畏が張られているだろう。ほかの道を選んだほうがいい。

階段を下りる連中の仲に泰英の気配はない。裏を読んで他の階段へ回ったのかもしれない。

とりあえず、一番近い音楽室に飛び込む。練習していた吹奏楽部の面々が不信そうな顔を向けるものの、部活見学の多いこの時期、すぐに興味ない顔になる。

音楽室からその横にある音楽準備室へ入る。中にも練習している上級生がいたが、気にした様子はない。開け放された窓から外を見る。

隣の窓は開いている。確か、パソコン室だっただろうか。

すばやく窓の外に身を乗り出す。練習している上級生は壁に向かっていて、望

美の行動には気づいていない。

足幅ほどしかない足場をたどり、隣の部屋へ。中にはパソコン部と思われる面々がいるが、窓から乗り込んできた美代に気づく様子もなく画面に張り付いている。

そつと廊下の扉を開け、外の様子を確認する。幸いなことに誰もいない。静かに抜け出し、女子トイレに入る。

この学校には正面玄関の他に、北側に裏門と、その外れに獣道のような通路がある。下駄箱は正面玄関側にあるが駅が北側にあるため、多くの学生は裏門を使う。そして、寮生たちは獣道を使う。

泰英のこと、頭数をそろえて重要個所に見張りを立てているだろう。正面玄関前の下駄箱、そして、北門。この二箇所は泰英の手のものがあると見て間違いない。人数を確認しておいたほうがいいかもしれない。

廊下に出て、二年生の教室を二つ過ぎたあたりで、ちょうど中庭越しに正面玄関が伺える。

下校時間を少々過ぎ、生徒は少ない。きよろきよろとあたりを見渡している生徒が数名、待ちぼうけのような顔をしてたらずんでいる生徒が数名。泰英の手のものと思われるのは七名ほど。泰英自身の姿はない。

彼らがこちらの顔を知っているとは思えないから、泰英が特徴を教えているか、写真を見せられているかのどちらかだろう。それならば勝機もある。

女子トイレに取って返し、いつもは垂らしたままの髪をツインテールに変える。スカートも腰で折り返し、少々短めに。美代からもらった大き目のキーホルダーをかばんに取り付ける。顔見知りでもない限り、気づかれまいだろう。

「これで良し」と

美代の歩調を思い出しながら歩き出す。胸は不安で高鳴っていたが、態度には表さない。堂々としていればしている分だけ確立は低い。

泰英は首をひねった。望美の姿を見かけてからすでに十五分が経過しようとしているが、一向に望美を捕まえたという連絡が入ってこない。

（倒されたか、拘束されたか……）

いや、と首を振る。そんな暴力的な行為はしないと誓ったのは自分の前だ。今は嫌われているとはいえ、以前の自分にずいぶんなついていた望美が約束を破るとは思えない。

計画的な行動をしているようで、好戦的な性格から望美はずいぶん安易な道を取る。彼女の考えを読むなら単純に考えるのが一番だ。

「……下駄箱だな」

望美の性格上、靴を履き替えずに帰るとは思えない。協力者には礼とともに終了を伝える。

正面玄関まで下りた泰英は思ったとおり、そこに目的の人物を見つけた。変装して

いるとはいえ、望美がどんな格好をしていようとも泰英には見分ける自信がある。

「望美」

声をかけられるなど思ってもいかなかった様子で、望美は慌てふためき逃げようとする。

「鈴音さんのことで話があるんだ」

「叔母様のこと？」

くると振り返る。望美が懐いている数少ない人間の一人、鈴音さんのことになる
と態度が変わるのはいつものことだ。

「場所を変えよう」

泰英は説明もせず歩き出す。振り向かなくても望美はついてきているだろう。

7. 彼女の本心

「失礼します」

泰英がソックの音とともに扉を開けると、中では疲れきった表情の鈴音がソファ—
にもたれかかっていた。

「叔母様、ご気分が悪いの？」

走りよろうとした望美に鈴音は苦笑めいた笑みを返す。

「大丈夫。ちよつとショックなことがあっただけで——」

額に手をやり、何とか考えをまとめようとするが、鈴音はまだ立ち直れない顔でゆるく頭を振る。

「お茶、してくれる?」

誰にともなく言い、大きく息を吐く。

「叔母様どうされたの?」

望美はそつと泰英に尋ねる。泰英は望美の目を覗き込み、苦笑する。

「瑠璃子さんの本性を見たんだよ」

「え?」

尋ね返さずにはいられない。瑠璃子の演技は完璧で、鈴音の前でひとかけらも本性を見せたことはない。他人がどのように言おうと、鈴音が瑠璃子を疑ったことなど一度もないはずだ。

「瑠璃子さん、鈴音さんと拓真さんを結婚させようとしてるだろ?」

泰英は小さな声で話しながら備え付けのカップを取り出す。望美はティーパックや砂糖を取り出しながら、

「日取りはいつ?」

「わからないけど、近い時期だと思うよ。瑠璃子さんのことだし」

「……そうね」

『チェックメイト』

瑠璃子の声が頭に響く。瑠璃子のチェスは戦略家らしい駒使いをみせる。だから、好戦的な望美は彼女に一度も勝つた事がない。子供相手だとわかっていても、絶対に手を抜かない人だ。

紅茶を机に並べる。鈴音はその香りを吸い込みようやく落ち着いたのか、口をつける。

「美味しい」

しみじみしたつぶやき。ティーパックで出した紅茶なのだからたいしたことはないだろうが、鈴音にそういわれると望美は笑みを隠せない。

「叔母様、何があつたんですか？」

鈴音の対面のソファーに望美と泰英は腰をおろす。不安そうに尋ねる望美に泰英が言葉をつなぐ。

「僕が説明するよ」

昼にあつた出来事を簡単に説明する。望美の為ならば云々という部分を省いて。

「鈴音さん、瑠璃子さんが感じている恩義って何ですか？」

「たぶん——」

はつきりしない様子で鈴音は声をあげる。一人ですいぶん考え込んでいたらしいが、はつきりと思ひ当たる節はないらしい。

「高校に入学してすぐ、瑠璃子があまり性質の良くなさそうな連中に絡まれてたの。

それを止めに入った事じゃないかなあと思うんだけど」

「叔母様、剣道の段持つてましたよね？」

「ええ。だから相手を全員のしちゃったんだけど……あれ、絡んでたんじゃないのよね」

「え？」

望美が不信な声をあげるが、泰英は納得顔で、

「瑠璃子さんが絡んでたつてことですか？」

「そう……そうね、そうともいえるわ。その後も何度か瑠璃子が絡まれてるのを見てかけて助けに入ったし。最後は卒業式のときだったかしら？ 体育館裏に瑠璃子が呼び出されたつて聞いて、駆けつけたのよ。最後だからかかずいぶん人数集まつてね、ぐるりと囲まれて、この人数相手にするのは結構骨が折れるなど思ったの。最後だし、今までこちらがたたきのめしてきた仕返しをされると思ったの」

そこで鈴音は不思議そうに首をひねる。

「だけど、みんな手に小さな花束持つてたのよ」

息を呑んで聞いていた望美は目を瞬かせせる。

「瑠璃子さんが頭だったつて事ですか？」

鈴音は泰英の言葉に、頭を抱え込み、

「考えたくないけど、そうよね。そう都合よく、毎度毎度絡まれてるのもおかしいも

のね」

「でも、だとすると瑠璃子さんのいう恩義って？」

泰英は首をひねる。鈴音の今の話は関係なさそうだ。

「他に思い当たる事なんて無いんだけど……？」

「拓真さんなら知ってるんじゃないですか？」

望美の言葉に鈴音はあからさまに嫌そうな顔色を浮かべるが、泰英は大きく頷きながら、

「そうだね、僕もそう考えていたところだよ」

「ちよつと二人とも、それだけはやめましょうよ」

「瑠璃子さんの恩義がはつきりしないと、打つ手も打てませんよ」

「でもね、拓真なんかに借りを作るのは何があるうと嫌なの」

鈴音の言葉を見無視し、泰英は備え付けの電話から拓真の携帯を呼び出す。

「ちよつと、本当にやめて。会いたくないし、関わりたくないの」

眉間にしわを寄せ、怖い顔をする。

「ねえ、やめなさいったら。いいかげんにして」

ぴしゃりと言いつ放つ鈴音に恐れをなしたのか、泰英は受話器を降ろす。

「拓真さん呼ばないの？」

望美の声に、泰英は微笑む。

「携帯の電源を切つて下さい」

不信そうな顔をしつつも、鈴音は言われたとおり電源をオフにする。それを見届け、泰英は時計を見上げる。

「……二十分くらいかな？」

「ちよつと、来るつてどういうことよ？」

慌てて鈴音が問いたです。こちらからの言葉は一切無く電話を切ったようにしか見えなかった。

泰英はソファーに腰をおろし、

「いきなり電話がかかつてきて、受話器から鈴音さんの慌てた声が聞こえ、唐突に電話が切れば不信に思うでしょ？ その上、携帯はつながらないし——」

「学校に電話かけてくるでしょ」

当たり前とばかり言い返すと、泰英はにっこり微笑み、

「鈴音さん、早退したことになるてますよね？」

「……そうだったわね」

あまりにシヨクな光景を見て引き返してきたのだが、ちよつと授業中ということもあり、誰も理事長室に引き返す鈴音の姿を見ていないはず。電話で尋ねても、事務所の方で昼過ぎに早退したと告げるはずだ。

「じゃ、確かめに来るつてこと？」

望美が泰英に尋ねる。

「拓真さんならそう思うけど？」

「仕事あるだろうから無理だと思おうわ」

願うばかりの顔で鈴音は言う。

「無理でも来ますよ、鈴音さん事となれば。じゃ、拓真さんが来るまで待ちましようか」

泰英の予想より二分半も早く拓真はその場に現れた。乱暴に開けられた戸口で、肩で息をしつつ立ち尽くす。のんきにお茶をしている鈴音の姿を認め、大きく息を吐くと、安堵の表情を浮かべゆつくりと近寄る。

鈴音は、というと眉間に皺を増やし、これ以上無いくらいの不機嫌顔。

「お早にお着きで」

嫌味にも遠慮がない。

「良かった、鈴音。何か事件に巻き込まれてるんじゃないかって気が気じゃなかったよ」

「おあいにく様。私の強さは知ってるでしょうに」

拓真も何度か相手をさせられ、一度も勝つたことがない。だが、何でもありの喧嘩、取っ組み合いではその強さなど問題にはならない。

何度も注意しているのに鈴音は自分の強さを過信しているところがある。瑠璃子

がそう仕向けているためもあるが、良くない兆候だと拓真は常々思っている。

「そんな問題じゃないだろ？」

「じゃあ、どういう問題なのよ」

「二人とも落ち着いてください」

剣呑とした雰囲気になり始めた二人を泰英が止め、連携プレーのように望美が拓真に紅茶を差し出す。

もともと仲の良かった泰英と望美は、言葉がなくても相手の行動を読み、動くことが出来る。泰英を犬猿している今の望美には歯がゆいことだが。

「すいません、こんな方法でお呼びだとして——」

泰英が人のよさそうな顔で拓真に謝る。

「こういうところが曲者だと望美は横目で睨む。

「瑠璃子さんのことをお聞きしたかったのぞ」

「瑠璃子ちゃんのこと？」

拓真は幾分身を強張らせ、鈴音から泰英に視線を移す。

「何だい、聞きたいことって？」

「瑠璃子さんが鈴音さんに固執している理由です」

「……ああ」

拓真は頷き、

「小さい頃によく助けてもらったから、どんなことをしてでもその礼をしなけりやつて言つてたよ」

鈴音は首を傾げる。

「何のことかしら？」

「それに、互いに互いのことを守るって誓いを立ててる、だから鈴音のことは何としてでも守るって」

「まったく覚えがないわ」

大きく首を振る。

8. 恋人の桜

「もしかして——」

望美はある言葉を思い出す。

「私が小さい頃、おば様に可愛がっていただいていたでしょ？ あの頃、叔母様がいなくなる」と瑠璃子さんが決まってまじめな顔して、『私は鈴音を幸せにするって誓いを立ててる。だからあなたが鈴音を悲しませるようなことをしたら許さないわよ』って言つてたの」

「ああ、」

合点がいったとばかり鈴音は大きくうなづく。

「だから望美、瑠璃子を怖がってたのね」

「今でも十分怖いですけど、あの頃感じてた瑠璃子さんの怖さ、異常さってないですもの」

「ごめんなさいね。何度も言っただのに信じなくって」

「いいえ、信じなくて当然ですよ。瑠璃子さん、叔母様の前では完璧にいい人演じてたから——」

「瑠璃子ちゃん、義理と人情にはやたら厚いし、策略家だからねえ」

拓真が思い当たることが山のようにある顔で頷く。

「そうね」

鈴音は疲れきった顔をする。泰英、望美の問い掛けるようなまなざしに、

「瑠璃子、生まれてすぐに事故で両親亡くして、祖父母の元で育てられたの。でもその頃、まだ二人は現役で働いてたから、瑠璃子の面倒見たのはその上、明治生まれの曾祖母なの」

そこで大きく息を吐く。

「その曾祖母——千代さんって言うんだけれど、もう本当にすごい人で……瑠璃子の本当の性格、あのままの人だったのよ。自分にも他人にも厳しく、人を使い慣れた策略家で、まさに女傑。その上、女性らしいきめ細やかさを併せ持ち、料理や裁縫も得意で……」

「パーフェクトな人なんですわね」

感嘆ともつかない声を漏らす泰英。

「でも、周囲の人間は疲れるわよ。千代さんがいると空気がピリピリ張り詰めて、絶対に間違ひなんて犯せない雰囲気になるんだから」

「僕は会ったことないけど、会わなくて良かったよ」

「そうね。あんたはみっちりお小言頂戴して、その性格を矯正をさせられてたわね……それより、用が済んだんだからさつさと帰ってくれない？」

「何で？ 僕も早退したから暇だよ？」

鈴音も暇でしょ？ と付け加えるのを忘れない。

「瑠璃子の計略で付き合うのはごめんだわ」

「それは違うよ」

「何が違うのよ。瑠璃子に言われて求愛してんでしょ？」

「どうしてそう思うの？ 僕は鈴音を愛してるよ？」

「どうだか」

鈴音は取り合わない。

拓真は成り行きを見守っている二人に視線を走らせ、

「じゃ、二人は証人ね？」

「え？」

「ちよつと——」

泰英、望美があきれ返る中、

「鈴音、ずつと好きでした。結婚して下さい」

「……」

「ほら、証人もいる。僕は心からの真実を述べていることを誓うよ？」

「嘘臭いのよ、あんたが言うのと。何でもすべて冗談にしか思えない」

「でも、これは本当。僕は一目惚れしたんだから」

鈴音はそっぽを向いたまま、拓真を見ようともしない。だが、沈黙に耐え切れなくなつたのか、ちらりと拓真を見やり、その真剣な眼差しに観念したようにつぶやく。

「それっていつのことよ」

「それって、鈴音を初めて見たとき？」

「そうよ」

「入学してすぐ。満開の桜があまりに凄くて、現実のものとは思えなくて——」

そのときの光景を思い出そうと拓真は瞳を閉じる。

「時間が経つのも、周囲の喧騒も、何もかも忘れてじつと見つめてた。不意に誰かの気配に気づいて振り向いて見れば、そこに鈴音がいた」

探るように鈴音の瞳を見つめる。

「僕は最初、桜の精じゃないかと思って思った。鈴音の出現が不意だったし、本当に綺麗で

……」

「——思い出した。私、桜を飲んだときだ」

「え？ 叔母様も？」

「そうだね、吸い込まれるように花びらが君の口の中に入っていったのもなんだか一枚の絵のようだった」

「むせ返って苦しい思いをしたのに、人のことボーっと眺めてたのはそういうことだったの」

「そういうこと」

拓真は邪気なく微笑む。

「君がむせ返ってるのが不思議だったんだよ。いきなり人間じみた行動とられてね。哑然としてたつて言うべきかな」

「はいはい、悪かったわよ。あんたの夢壊して」

「いや、逆に良かったよ。君が現実の人間だつてことがわかって。桜の下にいればまた君に会えるかもしれないって思つてしばらくあそこに通つてた」

「へー」

冷めた声。

「でも、君は現れず、現れたのは瑠璃子ちゃんだった」

「何で？」

「噂が立つたらしい。君が桜を食べた、でも恋人が現れないって」

「……つてまさか」

「瑠璃子ちゃんは僕のことだつて思つたらしくてね、取り巻き連中引き連れてやつて来たよ」

あの時は怖かつたなあと、怖がる表情なく笑う。

「ぜんぜん怖そうじゃないじゃない」

「本当に怖かつたつて。いきなり、『死ぬか、目の前から消えるかどちらを選ぶ？』つて言われたんだよ？」

「怖いですむ問題じゃない」

望美が恐ろしげにつぶやく。

「今のほうがまだましなんだ。あれでも」

泰英は頭を抱える。瑠璃子に敵と認識されている以上、何とか手はないかと二人の話を聞いているのだが、話が広がるにつれ、考えていた以上に瑠璃子という存在の恐ろしさに身を包みこまれる。

「なんて答えたの？」

幾分、青い顔をした鈴音が拓真に尋ねる。親友として疑つた事のない瑠璃子の本性は鈴音の想像に及ばないものであるらしいことがわかつてきて。知りたくないが、知りたいというジレンマ。

「普通だよ。』どちらも嫌です。それよりあなた誰ですか？』ってね。ずいぶん話し合いつていうのかな——お願いして、瑠璃子ちゃんから鈴音に近づいてもいいって許可もらうまで大変だったんだよ？」

あの頃は愛娘を可愛がる頑固親父に頭を下げている気分だったと拓真は内心息をつく。

「わかります」

望美が深く頷く。叔母、姪の関係にあつてさえ、瑠璃子はずいぶん警戒していたのだから。

「やつと鈴音に近づけるようになって——鈴音にしたら僕がいきなり求愛行動はじめたようにしか思わなかっただろ？ だからずいぶん引かれちゃったね」

「まったく知らなかったもの」

苦笑交じりの拓真の言葉に鈴音は大きく頷く。

「手紙出したり、プレゼントしたりしてたのが瑠璃子ちゃんに握りつぶされてるなんて、あの頃の僕は知らなかったからさ」

「元凶はやはり、瑠璃子さんなんですね」

泰英はため息をついた。瑠璃子への対抗策としては鈴音を見方に引き入れるしかないようだ。だが、諸刃の剣になる可能性はある。

考え込む泰英に望美はそつと袖口を引っ張る。

「——？」

望美は一人を見ている。視線の先にある光景を見て、泰英はそつと立ち上がる。

「すみません、遅くなると家のものが心配するので——」

「叔母様、また」

二人は理事長室を後にする。

軽く二人に挨拶を返しながら、拓真と鈴音は昔の話、瑠璃子の話を尽きることなく続けていた。

*

半年後。

計画されていた日取りに二人は式を挙げた。瑠璃子の策略通りに事は進んでいるが、どこまで彼女が計画していたことなのかは今となつてはわからない。

瑠璃子は名前と同じ瑠璃色のワンピースドレスに身を包み、終始柔和な笑顔を浮かべている。

あの後、鈴音にばれたことを知った瑠璃子は毎日のように弁当持参で昼時に押しかけ、鈴音は出し巻き卵で三日も経たないうちに機嫌を直していた。実際、瑠璃子が鈴音に害をもたらしではないのだから、鈴音はそれほど思うところはなかったのだらう。

式の最中、瑠璃子は問題など起こさなかったが、ただ一つ。

「鈴音を泣かせるようなことがあつたらあ、琢磨ちゃん許さないから」

親友を代表してのスピーチの席上で、可愛らしく宣言した言葉が瑠璃子の本性を知る人間を青ざめさせた。

シンプルなウェディングドレス姿の鈴音の手にはアレンジメントフラワーで作られた丸い、小さなブーケ。白い花、薄い青、薄い紫の花の中に、小さな白い花、そして季節はずれの桜が散りばめられている。

滞りなく式が終わり、二人は表に姿をあらわす。参列者は満面の笑みを浮かべ、祝福の言葉を告げる。ライスシャワー、花の雨、カメラのフラッシュ――。

一瞬、ベール越しに拓真は桜の下で出会った鈴音を見る。まるで夢の中の出来事のように。

視線に気づいたのか、鈴音は振り向き、にこりと微笑む。それが夢ではないことを告げる合図のように。

式も順調に進み、残すセレモニーはブーケトスだけ。司会者のが女性陣を一角に集める。

鈴音は背を向け、ブーケを硬く握り締める。投げる瞬間、

「叔母様」

望美の声が右の後ろの方からする。目をつぶり、息を吸い込むと、鈴音は天へ向

249 朝焼空の色

かつて大きくブーケを投げた。宇宙まで届けとばかり、高く――。

別名・恋人の樹伝説番外

片想い

「疲れた」

仕事から帰り、発泡酒片手に定位置であるテレビ前にへたり込みながら言う台詞はこのところ決まっている。

とりあえずテレビをつけ、垂らしていた髪を頭の上のほうでお団子にまとめる。

それからチャンネルを回し、好きな番組を探す。いつも良い番組が見つかるわけでもなく、今日も適当なクイズ番組で妥協する。

発泡酒をのどに流し込みつつ、郵便受けからとってきた手紙の束をより分ける。相変わらずダイレクトメールや広告ばかり。だが、今日は同窓会の通知書が紛れ込んでいた。

差出人は大学時代の友人で同じ部活の仲間だった新山明海。卒業して三年。仲の良かった部内のメンバーで一度食事でもしようという内容で、携帯の番号とメールアドレスが書かれていた。

早速了承のメールを送る。

出来合いの惣菜で夕食を済まし、シャワーを浴び終わるところようやく返信がきた。

『都合の良い日、悪い日ある？』

しばらく考えてみるが、思い当たらない。

『土日祝日だったら大丈夫』

送信し、今度はすぐ返信がきた。

『今、調整してる。来月の三週目くらいになりそう』

『了解』

カレンダーを見上げる。

三週目というと、ちょうど春休みの時期にあたる。新学期の準備で忙しい時期ではあるが、たまには気晴らしもいだろう。

日程が決まったとメールが入ったのは翌日の昼頃だった。

*

「こんばんわ、久しぶり」

少々早いくらいかとも思っていたが、指定された店内には沙織の見知った顔がいくつもあった。

「沙織、ここに」

明海が手招きするので、隣の席に腰を下ろす。

「変わらないわね、明海」

「あんたもね」

前回会ったのは夏だっただろうか。大学時代はほぼ毎日顔を会わせていたのに、卒業してからは顔を会わせる頻度は急速に落ちている。

「髪、切らないの？」

明海に言われ、沙織は恥ずかしげに髪に手をやる。何の手も加えていない髪は黒く、ストレート。前髪は短く切りそろえているが、せっかくなこまで伸びた髪を切るのはもったいない気がしてそのままにしている。

「切ろうとは思うんだけど、なかなか決心つかなくて」

伸ばし始めたのは願掛けだった。だが、それほど髪が伸びもしないうちに沙織の願いはたたれ、以後は惰性で伸ばしているに過ぎない。

そんなことわかっているが、まだ、自分の中に未練があるのか沙織は髪を切る事ができない。

「そう——それより、今日はスペシャルゲストがあるのよ」

明海はにんまりと顔いっぱいには笑みを浮かべる。あまり大きな声ではなかったのだが、「ゲスト？」

「誰？」

近場にいた数人が明海の発言を聞き取ったらしい。やがてそれは全体に伝わり、誰だろうと推測する声がささやかれ始める。

「ゲストがについてのお楽しみ。さて、時間過ぎたけど……来てないのが二・三人いるわね」

「放つとけ、放つとけ」

あのことと変わらない合いの手を入れる山崎にどつと笑い声が起る。

「じゃ、富山君音頭お願い」

明海は慣れた様子で司会進行を務めている。

「おっしや」

山崎の隣に座っていた富山がわざわざ立ちあがる。山崎に負けないくらい体格が良いので、立ち上がると迫力がある。

「長い前置きはまた今度ということ——」
懐かしい決まり文句。

「乾杯！」

「乾杯！」

口々に交わされる声と、グラスのぶつかる音が幾重にも響く。

「懐かしいわね」

沙織はビールに口をつけながら、集まった顔ぶれを見る。三年の年月が流れているが、みな変わらない。社会人になり、それなりに落ち着きは出てきているがあこのころのままだ。それがとても嬉しい。

飲み会が始まって三十分ほど経ったころ、席に一人の男が現れる。明海は待つてましたとばかり顔を輝かせ、沙織は顔をこわばらせる。

「スベシャルゲストの小川先輩がいらっしやいました！ みんな拍手！」

パチ。パチ手を打ち鳴らす音が響く。小川先輩は面倒見の良い、とても優しい人で、

誰からも慕われていた。

「ごめん、連れがいるんだけどいい？」

相変わらず困ったような表情を浮かべ、後輩たちを見やる。誰も反対しないだろうことがわかつていつつも一応伺いを立てる。

「どうも」

嬉しさを隠し切れず、それでもふて腐れた顔を作った男が顔をのぞかせると、悲鳴と歓声が入り混じる。

「河野先輩、呼んでませんよ？」

言いつつも、明海は嬉しそうな顔。そして、それはみんなも同じ。口では嫌そうなどとを言いつつ、顔は嬉しそうだ。

小川先輩と河野は大学時代から仲が良く、たいてい二人一緒にいた。小川先輩に声をかけるといことは、自動的に河野にも声をかけるといこと——あたりまえのことだったのに、なぜか今回、明海は小川先輩だけを呼んだように振舞う。

沙織は不思議に思うが、アルコールの入った頭は考えるのを嫌がる。

先輩たちは富山、山崎コンビとともに酒を飲み始める。誰からともなく注がれるビールに困った顔をしながらも文句をいわない小川先輩。注がれたら注ぎ返し、言われたら言い返す河野先輩。性格の違う二人だが、後輩たちからは同じくらい慕われている。

一時間ほど経ち、酔った連中が始めると、明海は二次会に移るべく店を移動するよう告げる。次はカラオケらしい。

沙織は明日早くから用事があるから、と引き止める明海に断りを入れ、駅に向かう。

「樋口」

いきなり肩を叩かれ、沙織はギョツと振り向く。

「——河野……先輩」

「話がある」

「ありません」

立ち去ろうとするが、無理やりファミレスに連れて行かれる。

ウェイトレスにコーヒーを注文し、沙織は対面に座っている河野を睨み付ける。

「なんの話ですか？」

河野は言いにくそうに視線をそらし、やがて、

「まだ髪、伸ばしてんのか？」

飲み会の最中もちよくちよく沙織の方を見ていた。沙織は気づいていたが、気づかないふりをしていた。

「別に」

「まだ未練、あるのか？」

「……」

何も言えない。

大学時代、沙織は穏やかな雰囲気を持ち、いつも優しい言葉をかけてくれる小川先輩が好きだった。願掛けに髪を伸ばし始めたのだが、それを知っているのは明海と河野。

小川が他の大学に通っている女性と学生結婚し、それを知った沙織が飲み会で無茶に呑んだとき、胸に秘めていた思いを吐露してしまったからだ。

言葉を待つように、河野はじつと沙織を見詰めている。

「いえ。ただ、なんとなく……」

未練がないとはいえない。けれど、小川先輩のことを考えることなどこのところはなかった。忘れていた。

小川先輩を久々に見て、あの頃と同じように胸は高鳴り、苦しくなった。けれど、幸福そうに家族について語り、嬉しげに娘の写真を見せていた姿に、沙織はほっとした。

大好きだった小川先輩が幸福そうにしている、その姿が嬉しかった。

あの頃、もし自分が告白していたら何かが変わっていただろうか？

ビールを飲みながら自問してみた。けれど、いくら考えてもあの頃の自分には告白する勇気など少しもなかった。

もしかしたら、小川先輩に対する想いは憧れだったのかもしれない。純粹に、純真にただ、ひたすらに。恋と勘違いするほど強烈に。

願掛けで伸ばし始めた髪を切らないのは、小川先輩に未だに恋心を抱いているからじゃない。それは確実なこと。

考え込む沙織に河野は寂しげな微笑を浮かべる。

「そうか……なんとなく、か」

沙織は視線を手元に移す。

河野はいつも騒ぐメンバーの中心にいて、それをただ見つめているだけの沙織とはあまり接点がない。なのに、沙織が失恋してからは時々話かけてくるようになった。

河野は優しい。憎まれ口をきくけれど、みんな頼りになるお兄さんとして慕っている。小川先輩とは違う優しさを持っている。

私に優しいのもきつと、そういう理由からだ。

「なんとなくです」

沙織は居たたまれなくなり、小さな声で繰り返す。

他にどういえば言いのだろう。切ろうとは思うのだが、せつかくここまでは伸ばすもったいない気がして切れない。そう言えば納得してくれるだろうか。

「ま、その頭も樋口似合ってるしな」

そう言った河野の顔には不敵な笑みが浮かんでいる。先ほどまでと空気が変わり、

沙織はほつと胸をなでおろす。

「そういえば——あれ、使つてくれてる?」

河野の言うあれは、あれしかない。

「捨てました」

沙織は即答する。

捨てたというより、捨てるのも恥ずかしいので押入れのどこかにしまいこんだはずだがそこまで丁寧には教えない。

「何で?」可愛かったじゃん」

「猫、大嫌いだつて言いましたよね?」

意地になって言い返すと、河野は腹の底から可笑しそうに笑う。

失恋してしばらく、沙織は無茶に酒を飲むばかりしていた。そんな折、酔った沙織のカチューシャを河野が勝手に猫耳のついたカチューシャに変えてしまい、沙織は気づかず、居酒屋から家まで猫耳をつけたまま帰ってしまったという消し去りたい過去がある。

そのときはよほど髪を切つてしまおうかとも思つたのだが、いざとなるとやはり切ることができず、沙織はカチューシャがいらぬ前髪を短く切り、酒を控えた。

「ま、樋口が元氣そうで何よりだよ」

ポツリと嬉しそうに呟く河野。小川先輩に似た、穏やかな空気——河野も不意

にそんな空気をまとうことがある。そんな時、沙織の心の奥がちくりと痛むこと、知っているのだろうか。

「先輩もお元氣そうぞうで」

「ハハ、先輩か」

「……先輩です」

猫耳カチューシャの件もあり、沙織は在籍中「河野」と呼び捨てていた。

「樋口も成長したな」

「おかげさまで」

駅に向かって歩き出す。

懐かしい大学時代の思い出話に花を咲かせていたのだが、別れ際になってまた河野は話を蒸し返した。

「髪、本当に切らないのか？」

酔っ払いはしつこい。

結婚した相手に横恋慕するほど、私は馬鹿じゃない。いいかげんにして欲しい。沙織は澄ました顔で、嫌味を言う。

「先輩、髪の長い人がタイプじゃありませんでした？」

言い返したとたん、河野の顔が赤くなる。

「お、おま、お前——」

激しく動揺している。言葉になつてない。

「知つてたのか！」

「知つてましたよ」

「くううう……すごい悩んだ俺は馬鹿か？」

「なんだか知らないが、相当ダメージを与えたらしい。嬉しくなつて沙織は言葉を続ける。

「馬鹿ですよ、大馬鹿です、先輩は」

「何だよ、知ってるなら言つてくれよ」

「何ですか？」

「性格悪いな」

「先輩ほどじゃないですよ」

「まあいい。改めて言わせてくれ」

「何をですか」

「付き合つてくれ」

「どこに？」

「……そうだな、早速だが明日あたりに映画にでもつておい」

「ハイ？」

「漫才か？ 漫才をやりたいのか？」

「何がですか？」

「俺は交際してくれつついてんだ！」

「ハイ？」

「交際、わかるか？ 恋人になってくれつつ言ってるんだが」

「……」

「わかってくれ、頼むから。俺が間抜けみたいじゃないか」

泣きそうできて、怒った、真剣な顔。

沙織はなんと答えていいものやらわからず、

「え、映画くらいなら……」

「よし。明日の十一時にここで待ち合わせだ。忘れるなよ」

捨て台詞を残して逃げ去る子悪党のように河野は立ち去っていった。

沙織が言われた言葉を理解したのはアパートにたどり着き、定位置に腰をおろして
てだった。

「……告白された」

自分で呟いた声に、ぎよつとする。そんなわけないと思うが、あれはどう考えても
「告白」以外には考えられず、

「明日の十一時に駅前——だったっけ？」

時計を見上げるとすでに深夜二時近い。帰ってきてから四時間以上経過している。

早く寝なければと思うほど寝つけない。河野の告白が渦を巻くように脳内で繰り返し(漫才部分はカットされた状態で)再生される。

眩しい、と沙織が目を覚ましたのは九時近い時刻。二度寝をしようと思ったが、眠りかける寸前、河野との約束を思い出ししぶしぶ起きだす。約束を破ったらどんな嫌がらせをされるかわからない——大学時代のようだと思いを漏らす。

携帯には昨日のメンバーからの着信履歴とメールがたくさん入っていた。トーストをかじりつつ、メールを確認する。

ほとんどは『楽しかった』『また飲み会しよう』という内容だったが、明海からのメールは意味深だった。

『河野先輩とうまくいった?』

明海は何を、どこまで知っているのだろう。沙織は首をひねる。

『告白された。映画を見に行く』

昨日の今日なので、明海は二日酔いでつぶれていると思っていたのだが——携帯が鳴る。相手は明海。

「もしもし?」

「沙織、おはよう」

「おはよう、明海大丈夫? 昨日はずいぶん飲んでたけど?」

「ちよつと頭痛いけど、問題ないわよ。私、お酒強いし」

大学時代、ウワバミとして知られていただけのことはある。

「それより、おめでどう」

「……何が？」

「河野先輩とのこと。付き合うんでしょ？」

「いや、あのさ、そのことなんだけれど。明海は知ってたの？」

沈黙の後、明海は思い切ったように口を開いた。

「大学時代にね、私、河野先輩に告白したんだ」

「——え？」

初めて聞く。明海とはずいぶんいろんな話をしたはずなのに、そういえば恋愛の話はあまりしなかったことにいまさら気づく。

「見事に振られたんだけど、諦めきれなくて、ずっと河野先輩のこと見てた。だから、河野先輩が誰を好きなのか、私は知ってた」

「……そう」

「沙織が落ち込んだとき、河野先輩、誰よりも優しく沙織に接してた。でも、沙織はちっとも気づいてなくて——」

その通り。沙織は気づかれないよう苦笑する。河野には嫌がらせを受けていたという記憶しかない。

「私、沙織にははつきり言わないと伝わらないって河野先輩に言ったの。でも、先輩は

今のままでいたいからつて沙織に気持ちを伝えなかった」

「うん」

うなづきながら、沙織はその頃のことを思い出す。

いつも、河野が何か言いたそうにしていたことには気づいていた。けれど結局、河野は何も言わなかったし、言おうとすれば沙織は巧みに話題をそらした。

河野にはみんなとじやれているときのような不遜な態度のままできて欲しかった。

でも、河野は時々とても優しい雰囲気をもと。それが小川先輩を連想させ、失恋したばかりの沙織には居心地が悪かった。

「二月の中頃だったかな、偶然街で小川先輩に会ったの。最初は当り障りのない昔話をしていたんだけど――」

「新山は河野と寄りを戻す気はないの？」

運ばれてきたコーヒーにミルクを入れつつ、小川は探るような視線を明海に向ける。

明海はオレンジジュースをストローでかき混ぜつつ、眉間にしわを寄せる。考え込むときの彼女の癖。

「河野と付き合ってたよね？ 大学時代、仲良さそうにしてた女性は新山以外考えられないし」

明海はやっと納得のいった表情で、

「いいえ、振られたんですよ、私」

「え？ じゃあ、河野が引きずつてる相手って誰？」

不思議そうな顔。明海はにやりと微笑んで、

「沙織ですよ。樋口沙織」

「……新山の友達だっけ？ ——そう言えば三人一緒によくいたね」

沙織を河野が構い、そんな二人を明海が構っていた。そういう構図だったが周囲には見えていなかったらしい。

「河野が好きなのは樋口だったのか」

はつきりと沙織の顔を思い出せない様子でながらも、小川はうなづく。明海は顔に笑みを貼り付けたまま、

「沙織はね、小川先輩のことが好きだったんですよ」

「僕？」

「そう。でも先輩が電撃結婚しちゃったから、すごくショック受けて——河野先輩が慰めてたけど、沙織は恋愛する気なくしちゃったんです。だから優しい優しい河野先輩は告白しなかった」

明海は大げさなため息をつく。

「じゃ、何が悪いわけ？」

「そうですよ。小川先輩が諸悪の根源なんです」

「そうか——」

大してダメージを受けた様子もなく小川は微笑み、

「じゃ、結果はどうなろうと、まずは河野に告白させないといけないわけだ」

「そうですね。二人が一緒になるよう……ついでに同窓会しません？」

「いいね」

「じゃ、決まりで。河野先輩には振られるように願つてゐるつて伝えて下さい」

「わかった」

——つてわけ」

「なんで小川先輩に言つちやうのよ！」

「別にいいじゃない。あんたもきちんと振られれば納得するでしょ？」

「振られなくても、先輩結婚した時点で吹っ切れたわ」

「吹っ切れた人間が記憶無くすほどお酒飲んだりするもんですか」

嫌味な笑い声が電話口から響く。沙織はぎゅつと手を握り締め、

「でも、いいの？ 明海は河野のことが好きなんですよ？」

「それは過去の話。今現在、私には婚約者がいるのよ」

「え？ そんな話聞いてない！」

「言つてないもの」

再び聞こえる楽しそうな笑い声。

「相手はすっごくいい人よ。河野先輩よりもね」

「それは言いすぎなんじゃない？」

「そうかしら？ 河野先輩より絶対優しいし、いい男だわ」

「河野のほうが優しいよ」

自分が口にした言葉に気づき、沙織は顔を赤らめる。

「沙織、素直になりなさい」

優しい声。あの頃、沙織が立ち直れたのは河野と明海のおかげだ。

「私は素直よ」

答える沙織は素直じゃない。それは本人自身が一番わかっている。

「じゃ、どうすればいいのかわかってるわね？」

「わからない」

「そう、良かった」

会話にならない会話をし、

「幸せにね」

「ありがと」

短い言葉をようやく返した。

待ち合わせ場所に沙織が時間ぎりぎりにとどり着くと、優しい顔をした河野がたずんでいた。沙織の姿を見つけると、ますます、身にまとう空気が穏やかになる。

「ずるいずるいずるい……」

呪文のように沙織は何度も口の中で唱える。

「何が？」

河野は何を言われているのか理解できない顔。

「お待たせしてすみません」

だが、ぶきらつぽうに頭を下げる沙織の言葉に、河野は嬉しそうに言葉を返す。

「待つてないよ」

顔を上げた沙織は、真正面から河野の顔を見る。

あの頃も、ふと気づけば河野はこの顔をして沙織を見ていた。沙織は気づいていたけれど、気づいてはいけな顔だと目をそらしていた。

明海と、自分と、河野と。三人でずっと仲良くしているためには見てはいけな顔。

「——そんな顔、しないで下さい」

「そんなつて、どんな？」

「……」

沙織は答えず、

「昨日の返事、まだでしたね」

「あ？ え——」

とたん、不機嫌そうな顔になる。河野らしい顔だと沙織は微笑み、頭を下げた。

「こちらこそよろしく願います」

羽と彼女と魔術師と

一・沢倉知子

目が覚めた時、確かに何か違和感を感じた。けれどまどろみの中にある私にはそれを追及する気なんて起こらず、朝食を食べ、身支度を整え、いざ出かけようって段になってようやくやく気付いた。

先月買った姿見の中の背中に生える、細い、針金細工のような羽。けれど触る事は出来ず、ただ蜃気楼のようにそこに見えるだけ。細い針金のような銀色の光を精密に組みあげ、三十センチほどの羽の形にした感じ。良く出来ているし、美しい。

けれど、そんな事を言ってる場合じゃない。上着を羽織る。が、光で出来たそれは布地を通り抜け、背中に存在している。

「何、これ」

声を出して呟いてみるが、なんら問題は解決しない。手に触れもしないものをどうやって取り除けると言うのだろうか。

どうしようか考え込み、ふとあの噂を思い出したのは天の声とも言えた。

商店街の外れにある喫茶店「リトル・カフェ」の占い師は、本物の魔術師である――

今日は日曜日。しかも、十時前と時間帯も早め。人々がまだ動き出していないのが幸いした。商店街と言えども人通りは少ない。

人つてもものは、その人物が堂々としていれば違和感に気づきにくい。どこかで読んだ一説を思い出し、なるたけ平常を装う。表情が多少こわばっていたかもしれないが、羽を見られているとしても十人にも満たないだろう。

まして背中に羽があるなど、光の加減か、寝ぼけていたか、見間違いで片付けてくれるだろう、たぶん。大多数の人間は、自分の許容しえない物事は無かったことにしてしまう生き物なのだ。これもその本の受け売りだけだ。

角を曲がると目的の喫茶店が見えてきた。量と値段だけに主体を置いた、三十年くらい前からやつてる近所では有名な店だ。さすがに日曜の朝だけあつて店はがらんとしていた。

年季の入った分厚いガラスがはめ込まれた木のドアに手をかけると、ドアベルが派手な音を立てる。

「いらつしやい」

中から聞こえてくる中年女性の声。ドアベルの音に反応して声を上げただけらしく、顔は見えない。席につくまでもなく、お絞りと水を手にした声の主が現れた。

「どこでも好きな席にどうぞ」

「いえ、あの……違うんです」

「違う？ 何が？」

不慣れた顔つきに変わる。

「あの、」

何から話せば良いのかわからない焦りと、本当に朝見た羽が背中にあるんだろうかという不安と。もしかすると自分の見間違いで、羽などなくなってしまうかもしれない、なんて淡く儂い期待。

……自分が思っていたより、この状況下は自分自身に深刻なダメージを与えていたらしい。『超マイペース』なんてあだ名は今日限り、謹んで返上しよう。

「これ、」

クルリと背中を見せる。

お婆さんは妙な顔をし、

「……羽？」

触れようと手を伸ばす。が、何もつかめないのですますます奇妙な顔になる。

「何これ、光——で、出来てんの？」

「みたいで」

「……良く出来てるわねえ」

お婆さんは何度もそれに触れようと、羽の形に添って手を動かす。

「触れないわねえ」

「ええ。それで、魔術師——占い師さんは？」

魔法が解けたかのようにお婆さんは我に返り、

「ああ、そうね、これ魔法よね」

「だと思つて」

育ててくれた祖母は若い頃に魔術師を目指していたらしい。簡単な魔法であれば確かに使えたし、古い魔法のテキスト書なんかも数冊、うちでみかけた覚えがある。魔法は掛けた本人でなければ解けない、というのは通説だが、昨今の魔術師であればテキスト通りの魔法しか使えないので、ちよつと能力があれば何とかなるらしい。この魔術師がその「ちよつと能力」がある人ならば良いのだけれど。

おばさんは店の奥に掛けられた懐かしい振り子時計を見上げ、

「もうそろそろ来る時間だけど……」

「待たせてもらえますか」

「いいけど」

とは言うものの、妙な沈黙。なんだろうと考え込むまでもなく、

「あの、アップルティー下さい」

喫茶店だつてこと、忘れてた。注文するとおばさんはほつとした顔で奥へと引つ込んだ。

私に常識がないわけでも、不人情なわけでもなく、ただあまりの現実忘れてただけだ。自分に言い訳して、羽が見られないよう一番奥の席に座る。

待つこと四十分。いかにも、な格好をした人物がドアをくぐる。顔までもをすつぽり覆った黒い衣装、大きな木の杖、じやらじやらしたアクセサリーに刺青。これで魔術師じゃなければ、お前は何者だつて雰囲気。

お婆さんは親切にも私の事をその人に伝えてくれる。その人は顔を上げ——とは言うものの、顔は見えなかつたけれど——私を見た。

しつかりした足取りで私の前の席につく。

「こんにちは、お嬢さん」

低すぎず、高すぎない中性的な声。話し方からも男女、どちらともとれる。唯一見えている手は骨ばつてはいるものの、男性の手とは言いがたく、かといって女性の手とも言い切れない。

年齢も、性別も不詳。『怪しい』が具現化して、目の前に座っている。

「羽はいつから？」

実物を見もせず、問い掛けられる。

「起きた時からです。いつかはわかりません」

魔術師がうつすらと笑った気がした。布地に覆われているため表情は見えないが、雰囲気がふつと和らいだのだ。

「簡潔な答えだ」

どうやら誉められたらしい。

「夢見がちなお嬢さんではないようだね——そう睨まないで」

瞳がほんの少し険しくなったのを察したようだ。自分のことは悟らせず、他人のこととはじつと観察しているらしい。気味が悪い。

「これです」

さつさと見てもらおうと、体をひねる。片方の羽しか見えないかもしれないけれど。

「なるほど、見事な羽だ」

「これ、治せますか？」

体をひねったまま話をするのも辛いので、正面を向く。魔術師も羽に興味を示していないようだし。

「治す、か」

くつくつと喉の奥で笑う声。

「魔法は『解く』と言うのだよ」

「……解けますか？」

顔は赤くなっているはずだ。魔法なんて知らないのが当たり前なのに、いちいち言葉の上げ足をとらなくてもいいじゃないか。性格悪い。

魔術師は懐から青い石のペンダントを取り出す。

「問題ない、」

良く見ると、青い石ではなく黒い石に青い、小さな文字で文字がみっしりと掘り込

まれている。

「これを身に付けている間はその羽が消える」

問題ないと言いながら、身に付けている間とはどういうことだろうか。

「解けないって事ですか？」

「違う。君のその魔法は特殊なものだ。魔法をかけた人物、かけた魔法の種類がわからなければ対処しようがない。調べるには少々時間が掛かる」

「なるほど」

時間稼ぎのためって訳か。とりあえずはこれをもらっておかなければ、夕方からのバイトに行けない。

伸ばした手に石は触れず、

「お金」

空の手が目の前にある。以外に素早い。

「いくらですか？」

「五十万円」

「はい」

目を見開く。確かに、魔法は高いもんだってこと聞いたことがある。

けれど、五十万。

南の国のお土産っぽい雰囲気のださい。ペンダントが五十万。

羽がなくなれば付けなく成る事間違いないの。ペンダントに、諭吉さんが五十人。

……。

……。

……。

……無理。

「ちよつと——」

「言いよどむ私に、

「レンタルでもいいよ」

「タイミングよく言う。もしや人が苦惱してるの見て楽しんでるんだらうか。」

「……いくらですか？」

「一日五百円」

「なんとワンコイン。めっちゃ安い。いや、待て。どこかでこんな手口を聞いたことがある。」

「そう、あれは詐欺の特集をしたテレビ番組だ。高い商品だと偽り、値段を吹っかけておいて半額以下で売る。けれど販売した価格がもともとの価格で、まったく安くないってやつだ。」

「どうする？」

「……何日くらいかかりますか？」

魔法は何でもかんでもとにかく時間がかかると祖母が言っていた。まして、特殊な魔法であれば調べるだけでも相当時間がかかるはず。

一日五百円とはいえ、一ヶ月だと一万五千円。そんな余裕はない。

「二・三日もあれば十分だろう。昔に比べて魔術師自体が少ないから、君に魔法をかけた相手を探すのはわけがない」

「でも、魔法の種類も調べなければいけないですよね？」

「魔術師は全て国に登録されている。登録されている個人情報と、公共の場で使用した魔法の履歴などを調べれば推測できる」

「へえ」

魔術師に対するイメージがちよつと下がる。まさか登録制とは知らなかった。でも魔法で何でも出来るのなら、登録していなければ悪い事に魔法を使ったとき対応のしようがないか。

「魔法を解くのは別料金だよ」

「……金の亡者か。」

「いくらですか？」

「五千円」

思ったより高くない。風邪を引いて病院に行く事を考えるとどっこいだろう。

「わかりました」

「前金で三千円」

「……は？」

前金？

財布からなけなしの三千円を引つ張り出し、テーブルに置く。

魔術師は瞬速でそれを懐にしまいこみ、さっきまで三千円あった場所には青いペンダント。魔術師じゃなくて手品師でも通じそうだ。

「もしかして、」

何か言いかけ、言葉を切り席を立つ。

嫌な予感。意味深な前置きで何を言うつもりなのだろう。

「何ですか？」

「いや——」

ふらりと歩みだす。慌ててペンダントを身につけ、後を追うように付いていったのだが、占い師は帰るわけではなく席を移動しただけだった。占い用の小道具が置かれた席。つまり、定位置に。

「気になるんですけど？」

とりあえず魔術師の前の席に腰を下ろす。

「……君は占いに興味があるか聞こうと思ったんだよ」

「は？」

「何を占おうか。今日の運勢？ 恋愛運？ 金運？」

「いえ、結構です」

立ち上がるとうとするが、なぜか立てない。腰が上がらないのだ。

「ふふふ、」

魔術師が不気味な笑い声を上げる。

「私の占いが終わるまでは立てないよう、その椅子には魔法が掛けてあるのだよ」
なんて陰湿な。

「不意の出費が重なる日。家でおとなしくしているのが吉」

なんて馬鹿げた占い結果を聞き、料金の千円を払って店を出た。

帰ってみればお昼前。簡単に料理を作り、返却日が迫っているビデオを掛ける。

半分ほど食べ終えたところで、来客を告げるブザー音。やたら勘に障る音が何度
も部屋に響く。

ドアを開けると、サラリーマン風の男が二人たたずんでいた。手前の男は濃紺のスーツに青のネクタイ。足元には黒い皮製のバッグ。色鮮やかなハンフレットと思しき紙がのぞいている。奥の男は葬式にでも向かうかのような黒尽くめ。

「こちらは沢倉さんのお宅ですか？」

「そうです」

「沢倉知子さんご本人ですか？」

「ええ」

男の瞳がキラリと輝く。

……一人暮らしの天敵、押し売りだ。本能が告げる。

「ちよつと——」

「間に合ってます」

ピシヤリと扉を閉め、ドアチェーンに鍵をかける。女の子の一人暮らしってこういう時の用心が肝心だ。

「あの、すいません、沢倉さん！」

扉を何度も叩く二人組み。うるさいったらありやしない。管理人さんと警察に不審者がいると電話を掛け、ヘッドホンをして音量を上げた。

二・町田高弘

「おたくら、何してんの？」

突然警官と老婆に声を掛けられる。

「特に何ってわけでもないですが……」

俺は言葉を選びつつ答える。

現状としては非常にまずい。一人暮らしの女性の玄関先で騒いでいたら、不審者と
思われても仕方ない。

それにしても長谷川先輩、警察が来た事くらい教えてくれないだろうか。何も
しないで欲しいとは言ったものの、まさか本当に何もしいないとは……先輩の事、甘く
見すぎていたらしい。

「沢倉の嬢ちゃん、おらんじゃろうが」

老婆が声を荒げる。

「いえ、先ほどいらつしやいましたよ」

「嘘つけ！ 出とるつて電話があつたわ」

……は？

「沢倉さん宅の玄関先に不審者がいるつて匿名の通報があつたんだよねえ」

警察が老婆の言葉を遮るように声を上げる。妙に親しげな口調なのはこちらを
疑っているからだろう。

彼女、手が回しがいい。

「いえ、私たちは別に怪しいものでは——」

足元の鞆を抱え立ち去ろうとするが、一方通行の出入り口を塞がれたんじゃ逃
亡もままならない。

「じゃかわしい」

老婆が罵声を上げる。

「そんな死神みたいな格好しとつて何言うтонじゃ」

やっぱり先輩か。

洋物の刑事ドラマが好きだと自負するだけあつて、とにかく先輩は妙だ。さすがに怪しいからと今はサングラスを外してもらっているが、普段からエージェント・スマイスのような格好をしている。

何て刑事ドラマが元ネタなのかは知らないが。

自分自身、幼いころに憧れていた特撮ヒーローものの延長のような今の職に付いているので、あまり批判もできない。

怒鳴り続ける老婆をなだめようと試行錯誤していたものの、警官は諦めたように息をつき、

「ちよつとここじゃなんだから、一緒に来てくれるかな？」

……任意同行だろうか。

確かに、邪魔な老婆のいないところで話をするにはそれしかないだろうが……田舎で暮らしてる両親に顔向けできない。けれど、行かなければますます面倒な事になる。

どうしようかと先輩を見やれば、何故だか嬉しそうな顔をしている。本当に頼りにはならない人だ。

海外もののドラマで主人公の警官が捕まったりなんてストーリーあったらどうか？

「名前と住所、ここに一応書いてくれる？」

警官はあくまで優しい。老婆があれほど怒らなければ、調書をとる必要もないのだから当然かもしれないが。

書類を受け取り、でたらめな住所を記す。

「で、一人は何をしていたのかな？」

書類を受け取りながら、世間話の要領で警官は尋ねる。手馴れたものだ。

「黙秘する」

鋭い言葉が部屋にこだます。

……先輩？

こういう場合は適当にごまかし、もしくは上に連絡し指示を仰ぐことになっているのだが。

警官は疑りの視線を一瞬見せ、何事も無かった用に書類に目を通す。

「高橋一哉さんにジェームズ・ボンド——？」

じろり、警官が疑わしそうに先輩を睨む。

先輩、何考えてるんですか！

「いえ、あの、じよ、ジョークです。ジョーク好きなんですよ、先輩」

必死に言い募る俺には目をくれず、先輩は横柄な態度で、

「電話を貸せ」

「は？」

警官も目を丸くしている。

「電話だ。私には弁護士に電話する権利があるはずだが？」

「いや、あの、事件にするとかそんな話じゃないから——」

「電話をする権利があるはずだが？」

不敵に笑う。

どうしてここまで怪しい態度をとる必要があるんだ？ 警官も当初は注意して終わりにするはずだったんだろうが、話をややこしくするのでげんなりしている。

先輩は電話を借り、直接上に電話を入れていたようだ。たぶん、電話口の向こうは課長だろう。上司であるにもかかわらず、高校時代の後輩だとかで、何故だか先輩は課長をあごでつかっている。

若いというのに胃腸が弱いらしく、先週、胃潰瘍が回復しつつあると嬉しげに話していたと言うのに気の毒な話だ。

「電話を替われと——」

先輩が納得行かない顔で、俺に受話器を差し出す。

「はい、替わりました」

「……極秘任務って言わなかったか？」

恨みがましい声。

「すいません」

「お前一人に任せてたはずの任務に、なぜ奴が参加してるんだ？」

「すいません」

「……はあ」

地獄のそこから響いてくるような、暗く、重い溜息。

「すいません」

ただただ謝るしかない。

「そこにいる貧乏くじ引いた警官に替わってくれ」

「了解」

警官に受話器を渡す。警官は戸惑いつつ、

「はい、替わりました。……は？ え、あ、はあ……そうですか。いや、ええ——」

受話器を置く頃には、疲れきった顔をしていた。

「組織ぐるみで何をしてるんだ？」

「すいませんが極秘事項なので、お答えできないんです」

この警官には気の毒だが、極秘事項を少しでも漏らせば左遷だ。家族ともども言葉の通じない地に、永久に。

そんな俺の杞憂に気づきもせず、先輩はなぜか嬉しそうに、

「羽だ」

「は？」

警官と俺の声がかぶる。

「朝、この町で強力な魔法反応があった」

「ちよ、ちよつと何言い出すんですか！」

極秘事項だつて事、課長に散々釘を刺されたはずなのに。

「うるさい、どうしてこの俺があいつの言うことを聞かなければいけないんだ？」

子供じゃあるまいし、何を言い出すんだ。

「上司じゃないですか！」

「あいつは後輩だ！」

「上司です！」

「うるさい」

止めようと、警官が間に立つ。

「落ち着け、この町には魔術師なんていないはずだが？」

「いる」

「いない」

「いるんだ」

「いないって」

今度は警官と言いき争い始める先輩。トラブルメーカーではあるが、強力な悪運を持ち合わせているらしく、迷宮入りしそうな事件をなぜか次々と解決している。その実績を買われているのか、左遷されることもない。

そろそろ子供の口喧嘩の様相を呈して来た。低レベルな悪口と、無意味な揚げ足鳥が続いている。掴みあいをしないでだけマシだが、警官の額には青筋。一触発の危険な状態。

しかたなく弥生さんの番号を呼び出す。

「お忙しいところすいません」

「何？ アイツまた問題起こしたの？」

ツーカーで会話が通じる。弥生さんにはそれ以外で電話をかける事がないからなのだが、俺も、そして弥生さんにとっても嫌な関係である。

「——はい」

「替わって」

「先輩、弥生さんです」

言った途端、先輩の表情が一変し、口調も替わる。

「——弥生ちゃん？ もしもーし……」

どうして一瞬でここまで人が替わるのか、いつ見ても不思議だ。

それまでの争いなんてなかったかのような先輩の態度に、警官は狐につままれたような顔で、

「何？」

俺に尋ねる。

「相手は先輩の奥さんです。先輩が暴走したときの抑制剤なんですよ」

「……あ、そう」

疲れきった顔で座り込み、お茶をすする。

そりやそりだろう。課内の人間でも、先輩に慣れるには半年掛かる。仕事を覚えるよりも難しいため、一番人の移動が多い課と言われている。

一通り愛の電話——弥生さんが皮肉り、怒鳴り、先輩が愛の言葉を繰り返す不毛な会話——が終わると、先輩は上機嫌だった。

「さ、さっさと仕事を済ませるぞ」

「……はい」

「元気がないな？」

「はいっ！」

警官に言葉を掛け、派出所を出る。

俺達が出て行くのがよほど嬉しいのだろう、警官は幸福そうな笑みを浮かべ、バイバイと思いきり手を振ってくれた。

俺もそつちで一緒に手を振りたい。

「時間も適当につぶせたし、今度は彼女のバイト先へ行くこうか」

予定行動であったかのように、先輩が言う。

「幸いバイト先はファミレスだ。ついでに腹ごしらえしよう」

「何言ってますか！」

捜査の基本、張りこみの方法としてありえない。第一、昼の警官と大家に手際よく通報するあの態度だと、今度はストーカーで騒がれる可能性もある。

「何ってお前、腹は減らないのか？」

「減ってますけど、そう言う問題じゃないんです」

「じゃどういう問題なんだ？」

「やばい。不機嫌になりかけている。」

「え、いや……すいません」

何で謝ってるだろう、俺。

深く考えていたら、この課ではやっていけない。頭の中のもやもやを吐き出すように息をつき、先輩の背中を追って歩き出した。

ファミレスは商店街の入り口にあった。

ガラス窓の向こうに、ウェイトレスとして忙しそうに働く彼女の姿がみえる。

「真面目に働いてますね」

夕方だからか、店内には高校生の姿が多い。

「羽、無いですね」

「……」

納得いかないとばかり先輩は顔をしかめる。

「他の候補をあたってみませんか？」

羽のある女性を見た、という人々の証言に見事なほど特徴が合致しているのは彼女だが、若干名、他にも候補はいる。

「いや、俺の勘が間違いないと告げている」

「……勘、ですか」

呆れた声になっていたのだろう。先輩が鬼の形相で訂正する。

「俺の、長年の経験に基づいた、勘だ」

言い直す。それでも勘は勘だろうに。

「この近くに魔道師がいないか？」

鞆からモバイルを取り出し、本部の魔術師情報にアクセスする。

他に影響を与えられるようなレベル、もしくはそのような魔法を使う魔道師はいない。

「いませんね」

「……妙だな、俺の勘は間違いないと告げているのに」

その勘が間違ってるんじゃないですか？

などと俺が言えようか。微妙な笑みを浮かべた顔でも頷くしかない。

一旦店を通り過ぎ、変装のため物陰に入る。

相手が普通の人間であれば幻影魔法をつかえばいいが、魔術師の場合は別だ。こちらが魔法をつかえば警戒されかねない。そのため、無意味に魔法は使わないほうがいい。

ネクタイを青から黄色に変え、銀縁の眼鏡を掛ける。髪の毛分け目を変えれば、一・二度会っただけの人間ならばわからないはずだ。

先輩はジャケットを脱ぎ、ネクタイを外す。黒尽くめつてのは何かと目立つ。しかも、スーツだと応用が利かない。

不満顔でぶつぶつ呟いているが、無視して先ほどのファミレスに向かう。

入つてすぐ、席に案内してくれたのは彼女だった。無難に一通り説明し、奥へと引き上げて行つた。

「大丈夫みたいですね」

ほっと胸をなでおろし、向かいの席を見る。そこにはメニューを一生懸命覗き込む先輩の姿があった。

「先輩、任務を忘れてないでしょうね？」

メニューから顔を上げ、ぶつちよう面で、

「これは演技だ」

「……そうですか」

新聞を読むふりをして彼女を観察する。皆同じ制服姿。入れ替わり立ち代わり厨房を出入りするので、ややこしい。

「おい、お前何注文するんだ？」

「え？」

気づけば目の前にメニューが広げられている。

「俺はこれか、こつちか、これなんかも良さそうだと思うんだが？」

「一番安いのでいいです」

彼女に目を戻そうとするが、

「これか、こつちか、これ、どれにする？」

三択らしい。溜息をつくのも面倒くさい。

「どれでもいいです」

「良くない」

「……じゃ、これを」

イタリア風チキンプレートを指差す。これが一番が安い。

先輩は「どちらにしようかな……」と唱え始め、ふかひれ入り海鮮ラーメンに決め

たらしい。

近くのウエイトレスを呼び寄せる。偶然、それは彼女だった。マニュアル通りなのだろう、注文を取り、メニューを拾い集め帰ってゆく。俺達の正体に気づいた様子は無い。「見たか？」

先輩が興奮気味に言う。

「何をですか？」

「胸元だよ」

「……」

この人、仕事やる気あるんだらうか。

「お前、見て無かったのか？ 魔法を無効化させる石をつけてただらうが」

「……え？」

気づかなかった。では、彼女の背中には羽がある——可能性がある。

朝、数時間に渡つてこの近くで魔法反応があった。俺達はそれを追つてここまで来たのだが、昼前にそれは消えた。

魔法を無効化させる石など、どこでも買えるような物ではない。商店街を羽のある女性が歩いていたという証言がそれを裏付けている。彼女はどこでその石を手に入れたのか——入手先を調べなければ。

これ以上彼女を見張ついても意味は無い。食べ終わったところでレジに向かう。

近場にいた二十代の女性が駆けつける。

「有難うございます」

会計を渡し、領収書を頼む。

「この辺りに魔法グッズを扱っている店があるのか？」

ストリートな先輩の問いかけに、女性は一瞬顔にクエスチョンマークを浮かべるが、次の瞬間には笑顔で、

「ああ、お店はないですが、魔術師だつて噂の占い師がいますよ。時々グッズも売ってるそうですから、その方の事じゃないですか？」

だが、そんな魔術師のデータは本部に登録されていなかった。魔法グッズを作れるレベルの魔術師はこの辺りにはいないはずだ。

「あの娘——」

と、彼女を指差す。

「沢倉さん、魔法を使えるなんてことはないですよね？」

「沢倉さんが？ まさか」

可笑しそうに笑う。

「彼女は普通の娘ですよ」

「……ありえない」

先輩が呟く。

「彼女が魔法を使えない？ そんなことはありえない。あの娘は十二歳で——」
「先輩、何言い出すんですか！」

大声を上げて言葉を遮り、無理やり外に連れ出す。彼女に関することは全て極秘の扱いになっているのに。

それにしても先輩、無理やり横入りしてきたくせに、今度の資料に全て目を通したのだろうか？ 妙に彼女の事に詳しいが。

占い師は商店街では有名な人だった。出没する喫茶店はすぐにわかり、そこに向かう。

喫茶『リトル・カフェ』。名前は可愛らしいが、ずいぶん年季の入った店構え。食堂と言っても過言ではない雰囲気。

先輩は目を輝かせ、懐から雑誌を取り出す。

「ここ、ジャンボ。パフェで有名な店だぞ」

興奮した声。開いた街の情報誌には巨大なパフェの前で満面に笑みを浮かべる女性の写真。

さつき食事したばかりだというのに、ジャンボパフェを食べようと言うのだろうか？
それより、

「経費で落ちませんよ」

「ケチくさい」と言うな

俺の一存で経費にできるわけがない。

「無理です」

「……じゃ、お前のおごりだ」

「は？」

それが良いとばかり一人で領き、店に入っていく。

「ちよつと待つてください、先輩。仕事だつてこと忘れてません？」

三・松戸優希

困った。

口には出せないが、状況としては非常にまずい。

黒いフードの下でそつとため息をついた事など、周りの人間は気づきもしないが。

「あのさ、」

人の波が一段落ついたころ、エプロン姿の紀和子がコーヒーを両手に持ち、客人用の椅子にするりと腰掛ける。

「悩み事でもあるの？ 占い師さん」

私の前にコーヒーを一つ置く。

黒いベールに抑揚の無いしゃべり方、誰にも私の心情の移ろいなどわからないはずな

のに、気づいたのは従兄弟だからだろうか。

「当てて上げましょうか、朝来た女の子の羽にあった紋章——」

口に出すなと首を振る。めったやたらな事で口に出すべきことではない。

「今ごろになって見つかるとはねえ」

「ああ」

何とも感慨深い。

私がこの地へやってきたのは彼女を探すためだった。ずいぶん探しはしたものの、彼女を見つける事は出来ず、結局、隠れ蓑のはずだった占い師に成り果てている。

「で、どうするの？ 仕事復帰？」

「それなんだが——」

言葉を濁す。

彼女も彼女なりの生活が出来上がっている。それは私もしかり。

今の生活を全て白紙にし、新たに、いや昔の生活に戻る事。果たしてそれが幸福だと言えるだろうか。

以前の私は慣例通りに、規則通りの仕事をし、絶対的な衣食住を保証された身の上だった。未来に何ら不安はなく、将来はある程度予想できるものでしかなかった。生まれる前に誰かがひいたレールの上で、過ぎてゆく時間をもてあましている、退屈だけれど穏やかな、そんな人生だったのだ。

今の生活は百八十度違う。毎日がその日暮らし。明日、明後日の予定をたてることも出来ない。

けれどこの暮らし、慣れてみれば楽しんでる自分がある。あの頃には無い充実感がある。

派手なドアチャイムが鳴り響き、思考を中断する。

紀和子は瞬時に営業スマイルを作り、来店したサラリーマン二人を空いた席に通す。「何にしましょう?」

この店は喫茶店と言うよりも食堂に近い。

「コーヒー二つ」

若い男が注文するが、黒服の男がさえぎる。

「何を言ってる、パフェだ。この店に来てジャンボパフェを食べなければ意味が無いだろうが」

紀和子が何を思ったのか、すぐ隣の席に通すものだから二人の会話がまるで聞こえる。考え事も出来ない。

「先輩、経費じゃ落ちないって言ってるじゃないですか」

「お前が払えばいいだろうが」

「どうして俺がおごらなきゃならないんですか!」

若い男は丁寧な口調で対応しているものの、額に青筋が浮かんでいる。

「気苦労が堪えなかった昔の自分を思い出す。それに比べ今は何と楽なことか。パフェを食べなければ仕事をする気が失せる」

黒服は無茶を言う。

昔の嫌な同僚の事を思い出してしまった。奴は今ごろどこでどうしているのやら。彼女がいなくなったそもその原因、そしていろんな災厄の元凶。ただし、ヤツの家が上位の魔術師を数多く輩出している名門であるため、トラブルメーカーであるヤツの失態の多くは隠蔽されている。

けれど彼女がいなくなったなんて事実には隠しようが無く、ヤツは免許を剥奪され、飛ばされたと噂で聞いた。

出来るならば彼女がいなくなる前にやって欲しかった。どこへ行ったともしれぬ彼女の捜索の任を受けた私は、しみじみと呟いたものだった。

「じゃ、さっさと帰ってください」

「何？ お前、私と組むのが嫌なのか？」

二人の会話は泥沼にはまり込んでいく。

「何言ってるんですか、この件はもともと俺一人の担当だったじゃないですか」

「お前みたいなのがヒョッコに、上がこんな重大な事件を任せるわけないだろうが」

「先輩がいないほうが早く片付けられますよ」

「……上等だ」

黒服が立ち上がる。若い男に向かって手をかざし、呪文を——つて一体、何を考えているんだ！

現在、魔法は規約によって限定されている。攻撃系、ならびに中々高レベルな魔法を使うには届け出が必要なのだ。

黒服が唱えているのは中レベルの攻撃系呪文。しかし、その前に威力増幅のスペルを入れていたから、集中型から広範囲型へ魔法を変化させている。

その上、唱えた威力増幅魔法は最上レベルのものだから、発動させれば狭くとも商店街ごと辺り一体が瓦礫と化す。

後輩はあまりの出来事にショック状態。震える声で力無く唱えようとしているのは低レベルの防御魔法。マシンガンを前に、雨傘で身を守ろうとしているようなものだ。歴然とした力の差。脅しにしてもやりすぎだ。魔法を封じ込めるための呪文を唱え始めたところで黒服と目が合う。

「……松戸？」

重い沈黙。

「お前、松戸か？」

なぜ私の名を、と問うほど私は馬鹿ではなかった。

あの頃と違い、スーツ姿だからわからなかったが、目の前にいるヤツこそ全ての元凶、生きたトラブルメーカー長谷川だ。

神よ、信心のない私が問いかけても答えてくれないかもしれない神よ。私が欲しいのは平穩です。ヤツがいない世界です。

思わず現実逃避してしまおう。

「松戸、久々だな」

「……」

渦巻いている感情を一言で表現するならば『無念』だ。

「忘れたか？ お前の元同僚にして、相方の——」

「人違いだ」

今日は早く帰って、ゆつくり風呂に入って、さっさと寝てしまおう。悪夢を起きてまで見る必要などない。

「あいかわらずだな、松戸」

無駄に親しげに声をかけつづけられる。やめてくれ、お前と知り合いたなんてこと、世界中から誰もいなくなつたとしてもつぶやきたくない事実なんだから。

「つて、お前だな！」

いきなり胸倉を締め上げられる。

「な、何が？」

「お前、何の権限があつて羽を封じた？」

「……」

彼女の事か。極秘捜索にあっているのは私一人だったはずだが、時間が掛かりすぎているので新たな人員が配備されたのだろうか。

いや、事実そうなのだ。そう考えれば先ほどの話が見えてくる。

若い男が受けていた任に、ヤツが横入りしたのだ。だから二人は揉めていた。生きたトラブルメーカー長谷川の名は伊達じゃない。後輩はあのころの私同様、一刻も早く長谷川と縁を切りたかったのだ。

「彼女は客だ。そして私は占い師だ」

自分の言葉に驚く。

いつの間にか私は占い師が本業だと思っている。

彼女の羽を見て、彼女の言葉通り封じの石を渡したのも、今の生活を続けたいためだったのだろうか。

「ほお、じゃあただの占い師が封魔アイテムなんて高価なものをどこで手に入れた？」

「ハンドメイド」

自慢じゃないが、趣味の一つが魔法グッズ製作。知る人ぞ知る程度のブランドとはいえ販売しているのだけだ。

「ほお、あくまでとぼける気か？」

思い込んだら引かないのはあの頃のまま。ちょっと調べればわかることだろうに。緊迫した空気をぶち壊すチャイムの音。

「すいません、占い師さんまだ——」

飛び込んできたのは彼女だった。走ってきたのだろう、息が切れている。むなぐらをつかまれた私と、つかんでいる長谷川を交互に見比べ、まずい所に来てしまったという表情になる。

紀和子に目配せし、彼女を近くの席に座らせる。長谷川の手を振り払い、咳払い一つして席につく。

「いらつしやい」

「あの、」

彼女は戸惑い気味に声を発する。二人が気になる様子。気にするというのが無理な話。

「占い、当たっていたでしょう？」

水を向ける。彼女は戸惑い気味に、頷く。

「——はい」

「私の占いは良く当たりますから」

ふっと、彼女の笑う。緊張がほぐれる。

「魔法を解く方法がわかりました」

「本当ですか！」

「ええ、ただし、魔法を解くための魔法を使わねばなりません」

彼女は頷く。

「そのペンダントは魔法を無効化する力のあるもの。そのペンダントを返してください」

恐る恐ると言った様子で彼女はペンダントを外す。彼女の身から離れた途端、背中に羽が現れる。

彼女は恥ずかしそうに顔をうつむかせる。二人は羽に魅入っている。このまま大人しくしていてくれればいいのだけれど。

水晶球に手をかざし、呪文を呟く。中心に淡い微かな光りが宿る。彼女は魅入られたようにそれを見つめる。

「あなたは十年前にこの街に来ましたね？」

「……はい」

うつろな瞳。催眠状態に入っている。

「街はどんな風でした？」

「……雨が、たくさん降っていました」

彼女が降らせた雨だ。私達はその豪雨を止めようと、必死になり彼女の存在を見

失った。

「それ以前の記憶は？」

「……あまり、覚えていません」

「もつと深く思い出してみましよう。雨が降る前の事を——」

良く晴れた日だった。私と長谷川は制服である魔術師の黒いローブをまとい、彼女の傍に控えていた。

彼女——私達が教育係として仕えている現魔法王家の第二王女・友利様は、普通、十八歳くらいで取る中レベル魔術師免許を十二歳にして取得されたという優れた魔術師である。

先日、十五歳の誕生日を迎えられ、高レベル魔術師試験を受けたものの不合格。常人ならば二十歳を過ぎて受けるような試験なのだが、天才と言われ生きてきた彼女には屈辱だったらしく、それ以来ずっと苛立っている。

「いい加減にしろ、クソガキ」

いつものこととは言え、長谷川の悪態には頭が痛い。

「長谷川、自分の立場をわかつて物を言ってるの？」

友利様もいつも以上に口調が荒い。

「試験に落ちたくらいで、何日引きずってんだよ？ だからガキなんだ、お前は」

「うるさい、お前に何がわかるっていうのよ！」

彼女が苦手とするのが天候を操る魔法。だが、それは長谷川が得意だったりする。

先日の試験で、実技の課題が天候を操る魔法だった。それ以来、二人の間の険悪

さは目に余る。

「俺が教えてやろうって言ってんだろぅが」

「うるさい、お前なんかに習うことなどない！」

確かに、長谷川は天候の魔法では勝っているものの、全体的には彼女に負けている。だが、長谷川は高レベル魔導師である。試験でたまたま得意なものが当たったためらしい。順位的には最下位に近いのだが。

「そう言う口は、まともに雨でも降らせることが出来るようになってから言うんだな」

嫌みつたらしく笑う。

友利様をこれ以上挑発しないで欲しい。長谷川は言えば言うほど自分の首が危なくなっていくだけだ。事、わかっているのだろうか……なわけないな。

「——わかったわよ」

低く、小さな声。

「友利様？」

私は不安になる。彼女は一度言い出したら聞かない。

出来ない魔法を無理に発動させようとすれば、体に無理な負担が掛かる。中高レベルの魔法を使っている時点で、若い彼女の負担は相当なものはず。

「やつてあげようじゃないの」

「おお、やれるもんならやってみろ」

「やめろ長谷川。おやめください、友利様」

私の言葉など二人は聞く耳もなく、長谷川は無駄に離子立て、友利様はますます意固地になつていく。絶望的だった。

友利様は雨の魔法を唱え始める。しばらく何も起こらなかったが、不意に彼女の顔に笑みが浮かぶ。どうやらコツを掴んだらしい。だが次の瞬間、彼女の顔がこわばる。

「馬鹿が。気を抜きやがつて」

長谷川の舌打ちに、ようやく私も事態を飲み込む。魔法が暴走を始めたのだ。

集まつてきていた黒雲は渦を巻くように大きく膨らみ、ぽつりぽつりと降っていた雨は豪雨へと変わる。

天候を操る魔法は高レベル魔法に当る。私と長谷川は必死になつて術を制御しようとするが、他人の唱えた術の後始末ほど厄介なものはない。

一刻も早く事態を収束させねば、彼女の身が危ない。魔法が彼女の魔力を、生命を食い尽くすまで暴走しかねないのだ。

「長谷川、頑張れ」

「お前に言われるまでもない」

ようやく嵐を収めた頃、彼女の姿はどこにもなかった。

その後、私は彼女の搜索の任に。彼女をけしかけた長谷川は左遷されたのだ。

四・友利

長い長いトンネルを抜け出した気分だった。

私は沢倉知子じゃない。友利だ。

目の前の占い師がベールをとる。懐かしい、けれど記憶より少し老けた松戸の顔。

「その後、どうされていたのですか？」

相変わらず私に関して松戸は甘い。

「雨の中、ずいぶん長い間さまよっていたわ。おばあちゃんに声を掛けられるまでどうしていたのか……はつきりしないけど」

「おばあちゃん？ 保護された方の事ですか？」

「ええ。その後、私はおばあちゃんと暮らしていました」

おばあちゃんに保護されて、私は一から一般的な生活の基礎を学び、今まで生きてきたのだ。

「その方は？」

「亡くなりました、三年前に……」

「ごめんなさい、辛い事を聞いてしまって」

言葉とは裏腹に松戸には何の表情もない。昔、魔法に失敗して表情を失ったのだと聞いたことがある。

けれど、私は松戸の気持ち——哀しんでいるのがわかる。松戸が優しい人だって事を知っているから。

「その方のお名前は？」

「沢倉美津江さんです」

途端、松戸が長谷川に掴み掛かる。

「長谷川、お前、何を考えてるだ！」

殺意のこもった瞳で長谷川を睨み付ける。

「えっと、あの、松戸……？」

「あの、占い師さん？」

長谷川の後輩は突然の松戸の強行に戸惑いを隠せないまでも、何とか止めようとしている。

私は蚊帳の外に置かれたままだ。

「松戸、どうしたの？」

「謎は全て解きました」

怒りを含んだ松戸の声。

「沢倉美津江って長谷川の祖母の名前ですよ」

「え？」

「祖母？」

私と後輩の声が重なる。

「同姓同名じゃ——」

私の声を遮るように、

「俺も知らなかったんだってば」

長谷川は悪びれた様子もなく言い返す。

「一族の中で唯一、魔法の能力がなかったからな。ここ数年まったく親交がないんだよ、だから死んだ事だつて知らなかったんだから」

「確かに、美津江さんは少々変わっていた。だがな、お前が何も知らないわけがないだろうが」

ぎりぎりともむなぐらを締め上げていく。

「美津江さんが、やたら可愛がつていた孫のお前が」

「……まさか、シンちゃんつて長谷川の事？」

おばあちゃんがいつも話してくれていた、遠くにいる孫の慎一——シンちゃん。

「ああ。それより、年上の事をちゃんづけて呼ぶな」

妙な所にこだわる。

「おばあちゃん、毎月手紙出してたよね？ その中に私の事も書いてるって言ってたけど……」

「知らん」

苦しそうな表情になりはじめる。後輩がようやく二人を引き離す。松戸を何とか椅子に座らせ、

「手紙は届いてなかったの？」

再び尋ねる。

「来てたが読んでない」

「なぜ？」

「達筆すぎて読めない」

「……」

つむぐ言葉がなかった。

難解な魔術書は読めて日本語が読めないなんて、なんて性質の悪いジョークだろう。

「まさか、美津江さんの所にいるなんて思いつかなかった」

疲れきった様子の松戸。

「でも、友利様には良かったのかもしれない」

「え？」

「あの頃のまま成長されていたら——」

優しい瞳で見つめられる。

あの頃の私は、ずいぶん松戸に心配を掛けていたのだ。今になってようやく知る。

あのまま、あの環境で成長していれば、きっと今ごろ出来ない魔法を使い身を滅ぼ

していただろう。

「ごめんね、松戸」

「……いいえ」

無表情なはずの松戸が微笑んだ気がした。

「ガキ、俺に感謝は？」

「無し」

「それにしても、どうして突然私の背中に羽が生えたわけ？」

今でもまだ、背中に羽は生えたまま。松戸は決してそれを解こうとはしない。

松戸は私の顔を注目し、深深と溜息をつく。

「まだ全部、完全に思い出されたわけではないようですね、友利様」

「——へ？」

「それは、次期女王に選ばれた印ですよ」

作品紹介

- 「今、そこにある危機。」現代ファンタジー？
宇宙から来た調査員と、髪の毛。
- 「ダイブ」近未来、恋愛
平和な過去をリアルに体験する事ができる「ダイブ」を体験するシン。
- お題「10 themes in water (<http://www.pluic.halfmoon.jp/water.htm>)」使用。
■「眠り姫」未来、
眠りから覚めた彼女がいたのは、はるかな未来だった。
- 「リアルマジシャン」現代ファンタジー
アカネが幼い頃再婚した父と、その後、遠くに行ってしまった母。娘視点。
- 「青のシンデレラ」現代
亡くなった粹な祖母と、祖母の秘密。
- 「あなたの好きな人」現代、恋愛
もうすぐ二十歳のエリ。彼女のお見合いと、彼女に思いを伝えられない彼。
- 「別名・恋人の樹伝説」現代、恋愛
その桜の花びらを食べた者には一週間以内に恋人ができると言う。ただし、変人の恋人が。お題『学園ラブコメ書きさんに10の事件』使用。

■「片想い」現代、恋愛

久々に会うことになった友人たち。片思い中の彼と、にぶい彼女。

■「羽と彼女と魔術師と」現代ファンタジー

ある朝目覚めたら、背中に羽根が生えていた。

『 朝焼空の色 』
夏樹夕 (C)Yuu Nastuki

2011年7月15日発行

空色惑星
<http://sorairowakusei.yu-nagi.com/>

